

愛知学院大学考古学発掘調査報告28

岐阜県可児市

古城山窯跡

第1次発掘調査概要報告書

愛知県瀬戸市

広久手F窯跡

窯体再実測および範囲確認調査報告

2019. 3

愛知学院大学文学部歴史学科

愛知学院大学考古学発掘調査報告28

岐阜県可児市

古城山窯跡

第1次発掘調査概要報告書

愛知県瀬戸市

広久手F窯跡

窯体再実測および範囲確認調査報告

2019. 3

愛知学院大学文学部歴史学科

古城山窯跡

第1次発掘調査概要報告書

目 次

第1章 発掘調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第3章 古城山窯跡の研究抄史	4
第4章 発掘調査の経過（発掘調査日誌）	7
第5章 検出された遺構	9
第1節 周辺地形とトレンチの設定	9
第2節 Aトレンチの状況	9
第3節 Bトレンチの状況	13
第4節 Cトレンチの状況	13
第6章 出土遺物の概要	14
第1節 甕類	14
第2節 片口鉢その他	14
第7章 小結	16
付編1 永田5・6号窯跡について	17
付編2 牟田洞窯跡第2次調査3グリッド出土の窯道具類について	54
写真図版	61
報告書抄録	68

例 言

- 1 本書は、岐阜県可児市兼山古城山1418番10・11に所在する兼山窯・古城山窯跡の第1次発掘調査概要報告書である。
- 2 発掘調査は可児市教育委員会が主体となり、愛知学院大学文学部歴史学科考古学コース教授藤澤良祐がこれに協力するという体制で実施した。第1次調査は、3年次の「考古学専門実習B」の専攻生である赤山純里・猪飼充・大森裕朗・大矢敬子・糟谷貴幸・川端ちえ美・田浦舞衣・西森睦月・安田彩音・山田紗希、2年次の「考古学基礎実習B」の専攻生である加藤怜・子安優翼・坂井航・下田大真・福田治也・万年美紀・山田美咲の参加のもと、平成29年8月14日から8月27日にかけて実施した。
- 3 発掘調査にあたって、可児市教育委員会の長瀬治義氏・長江真和氏をはじめ、丸山組・元久々利組の皆様には調査に対してご理解をいただき格別なご配慮を賜った。なお発掘調査には、本学非常勤講師の中野晴久、文学研究科研究員の山本智子、同院生の森まどか・伊藤真央・田中良・高野夏姫、同卒業生の森村知幸、学部卒業生の三ツ本樹純、学部4年生の勝野友陽・田口芽依・中田智也・長縄憲治・前田真奈・松岡里奈・脇田遼の参加を得た。
- 4 出土遺物の整理および報告書の作成は、引き続き専攻生によって4年次の「考古学専門演習B」、および3年次の「考古学基礎演習B」において、平成29年9月から平成30年1月にかけて実施した。また平成29年9月からは2年次の「考古学基礎講読B-II」の一環として、大平悠希・荻野貴史・梶浦剛史・加藤悠華・栗山美里・杉村有亮・洲崎拓真・寺井崇浩・兵藤美江・水野啓吾・森本帆乃夏が参加した。
- 5 本書は専攻生が分担して執筆し、執筆者名は各文末に記した。編集は研究員の山本智子が行った。なお報告書作成にあたっては、可児市教育委員会の長江真和氏に多大なるご助力をいただいた。
- 6 発掘調査に係わる記録類は、愛知学院大学文学部歴史学科考古学整理室に保管している。
- 7 本書には、付編1として「永田5・6号窯跡について」、付編2として「牟田洞窯跡第2次調査3グリッド出土の窯道具類について」を掲載した。付編1は山本智子が執筆・編集、付編2は専攻生が執筆し高野夏姫が編集した。

第1章 発掘調査に至る経緯

愛知学院大学文学部では、平成14年度に歴史学科に考古学コース（先史考古学・歴史考古学）を開講し、新入生が3年次となる平成16年度には、考古学の基礎技術を習得するための必修科目として「考古学実習」を開講し、合宿形式により遺跡の発掘調査を実施することになった。そして平成18年度からはより高度な技術習得のため、従来の「考古学実習」を、2年次の「考古学基礎実習」と3年次の「考古学専門演習」に分離し、2年次から発掘調査に参加することになった。調査地の選定にあたって、本学が所在する東海地方は古代以来の窯業生産の中心地域で、数多くの窯跡が分布し古くから考古学的調査が行われていること、近年では中世窯・近世窯の生産や流通に関する調査研究が盛んであることから、歴史考古学専攻では窯業遺跡の発掘調査を実施したいと考えていた。

はじめに発掘調査に着手したのは岐阜県中津川市に所在する中津川窯で、中世中津川窯は昭和33年に発掘調査が初めて実施され研究の歴史が古いにも拘らず、生産の実態について不明な点が多いことから、中津川市教育委員会の協力のもと、考古学実習の初年度に当たる平成16年度には尻無1号窯跡の試掘調査を、平成17年度には上県2号窯跡の試掘調査を実施した。このうち上県2号窯跡は窯の遺存状況が良好であったため、平成18年度から平成24年度にかけて5基の窯の発掘調査を行い、平成25年度には実測図を作成し一応の調査が終了した（愛知学院大学2006～2015）。

続いて実施したのは岐阜県可児市に所在する大萱窯跡群の発掘調査である。可児市教育委員会では岐阜県指定史跡である大萱窯跡群の国指定史跡を目指しており、協力して発掘調査を実施して欲しいとの打診があった。大萱窯跡群は牟田洞・大萱窯下・弥七田の3窯跡から構成されるが、昭和初期に荒川豊蔵氏や加藤唐九郎氏によって調査され、黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部といった桃山茶陶を生産した窯跡群として著名である。正式な学術調査は実施されていないため遺跡や遺構の実態については不詳であった。そこで歴史考古学専攻では、可児市教育委員会に協力するという体制で「考古学実習」を実施し、平成25・26年度には牟田洞窯跡、平成27・28年度には弥七田窯跡の発掘調査を行い、大萱窯跡群の一応の調査が終了した（愛知学院大学2016～2018）。

そして平成29年度、引き続き可児市に所在する兼山窯・古城山窯跡の発掘調査に着手することになった。古城山窯跡は中津川窯と同様、大形壺甕類を焼成した中世窯として以前から注目されており、昭和42年に発掘調査され2基の窯が検出されたが、正式な調査報告書は未刊行であるため、遺跡や遺構の実態は不詳であった。この度、可児市教育委員会のご尽力により発掘調査が可能となり、歴史考古学専攻としては大萱窯跡群と同様に可児市教育委員会に協力するという体制で「考古学実習」を実施することとなった。

（藤澤良祐）



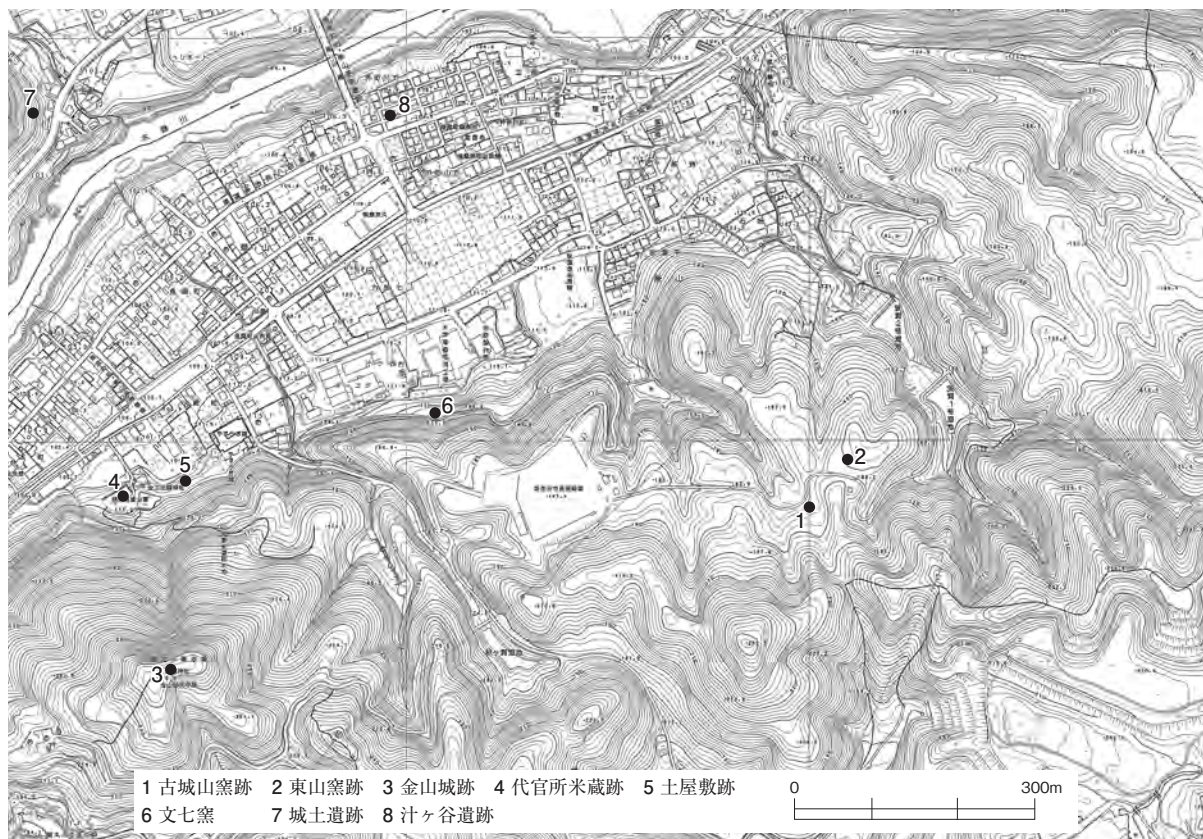
第1図 岐阜県可児市位置図

第2章 遺跡の立地と環境

岐阜県可児市は、岐阜県の中南部に位置し、中部圏の中心都市である愛知県名古屋市および岐阜県の県庁所在地である岐阜市から30km圏内で、1982年に市制を施行し可児市が誕生した。2005年に可児郡兼山町を合併し現在に至り、北西部は木曾川を挟んで美濃加茂市、北東部は加茂郡八百津町、東部は可児郡御嵩町・土岐市、南部は多治見市、西部は愛知県犬山市と接し、面積は87.57km²である。ただし、古城山窯跡は旧可児郡兼山町に所在するため、ここでは旧可児郡兼山町周辺の地形と地質について記述する。

旧可児郡兼山町は可児郡北端に位置し、北部は木曾川を挟んで美濃加茂市、北東部は加茂郡八百津町、南部・西部は可児郡御嵩町と接している。掌状地である太田盆地の一部で、木曾川は上流に向かうにつれ川幅が極端に狭くなり、峡谷のように深い谷の兼山^{とろ}瀬をつくっている。太田盆地は大部分が河岸段丘からなり、河岸段丘上に町家が並んでいる。これは地形から兼山段丘と呼ばれ、木曾川の堆積物をほとんどもたず、大部分が硬い基盤岩石の露出した土壤層のうすい岩石段丘である。兼山段丘は上・下2段の段丘になっており、背後には基盤岩石を露出した古城山がある。古城山(277.2m)は標高は低いが険しい壮年期の山で、北は木曾川の谷にのび、南は比較的なだらかにのびている。西の高根山から、東の坊主山へと山並みが連なっている(兼山町1972)。

兼山町の地質は、兼山段丘の基盤岩石である古生層に代表される。一般に化石を含まない硬い岩石からなる秩父古生層を基盤として、新第三紀の瑞浪層群・瀬戸層群、第四紀の木曾川泥流などの堆積物が周辺に分布している。この秩父古生層は砂岩・粘板岩・チャートが層を形成し、八百津町境などでは古



第2図 古城山窯跡周辺遺跡分布図(岐阜県教育委員会1990より作成)

生層の上に礫と粗い砂粒が混じった礫層があらわれる。また、西は可見盆地にあった内陸湖（古可見湖）の端で砂質粘土層である可見夾炭層が露出し、木曾川付近では木曾川の堆積物である円礫層がみられる（兼山町1972）。古城山窯跡は秩父古生層の主に砂岩層に立地している。

周辺の遺跡は汁ヶ谷遺跡（8）と、加茂郡八百津町に所在する城土遺跡（7）は縄文時代早期の遺跡とされ格子目文押型文土器片が採集されている。中近世の遺跡は金山城跡（3）、代官所米蔵跡（4）、土田屋敷跡（5）である。金山城は安土桃山時代に森長可の居城として知られており、代官所米蔵跡は石塁が当時のまま遺存している。江戸時代以降は東山窯跡（2）、文七窯跡（6）が確認されている。東山窯跡は古城山窯跡からおよそ100m東の付近に立地し、飴釉の平小鉢の破片や鉄釉・青織部・御深井釉・黄瀬戸系の小鉢や壺類の陶片が出土したという（兼山町1972）。文七窯跡は、文化元年（1844）に窯ヶ根窯の窯株を兼山の藤掛文七が譲り受けて開窯し、およそ30数年継続した窯である。製品は漆黒釉陶器、灯明具、磁器製品が出土している。昭和41年の架橋工事により滅失している（兼山町1972・可見市2007）。（高野夏姫）

引用・参考文献

- 兼山町1972『兼山町史』
- 可見市2007『可見市史』
- 岐阜県教育委員会1990『岐阜県遺跡地図』
- 通商産業省工業技術院地質研究所1991『日本地質図体系 中部地方』朝倉書店
- 長江真和・長沼毅2013『金山城跡発掘調査報告書』可見市教育委員会



第3図 古城山窯跡周辺の地質（通商産業省1991より作成）

第3章 古城山窯跡の研究抄史

古城山窯跡は1967年12月に、当時多治見市古窯調査委員を務めていた竹内蘭山氏の指導により1号窯の発掘調査が行われた。翌年には竹内氏は調査の中間報告をまとめ、翌々年に最終報告書を作成している（竹内1968・1969）。同氏の報告によれば、この窯跡は4基の窯から成るとみられ、このうち第1号窯の発掘調査を行い、この他字東山地区には1～2基の窯跡が存在するとしてこれらを併せて「兼山古窯址群」と名付けている^(註1)。

成果として、1号窯は全長10m余、最大幅2.08mで、窯体についても天井部は崩落しているが、側壁は最も状態の良いところで高さ1m程残存しているほか、床面・分炎柱についても良好に残存していることが確認された（第4図）。分炎柱については、長径83cm、短径63cmの楕円形を呈し、残存高は71cmで、床面については燃焼室が約10°、焼成室が約23°の傾斜であったという。また、ダンパーについては注意深く観察したものの確認することができなかったと記されている。

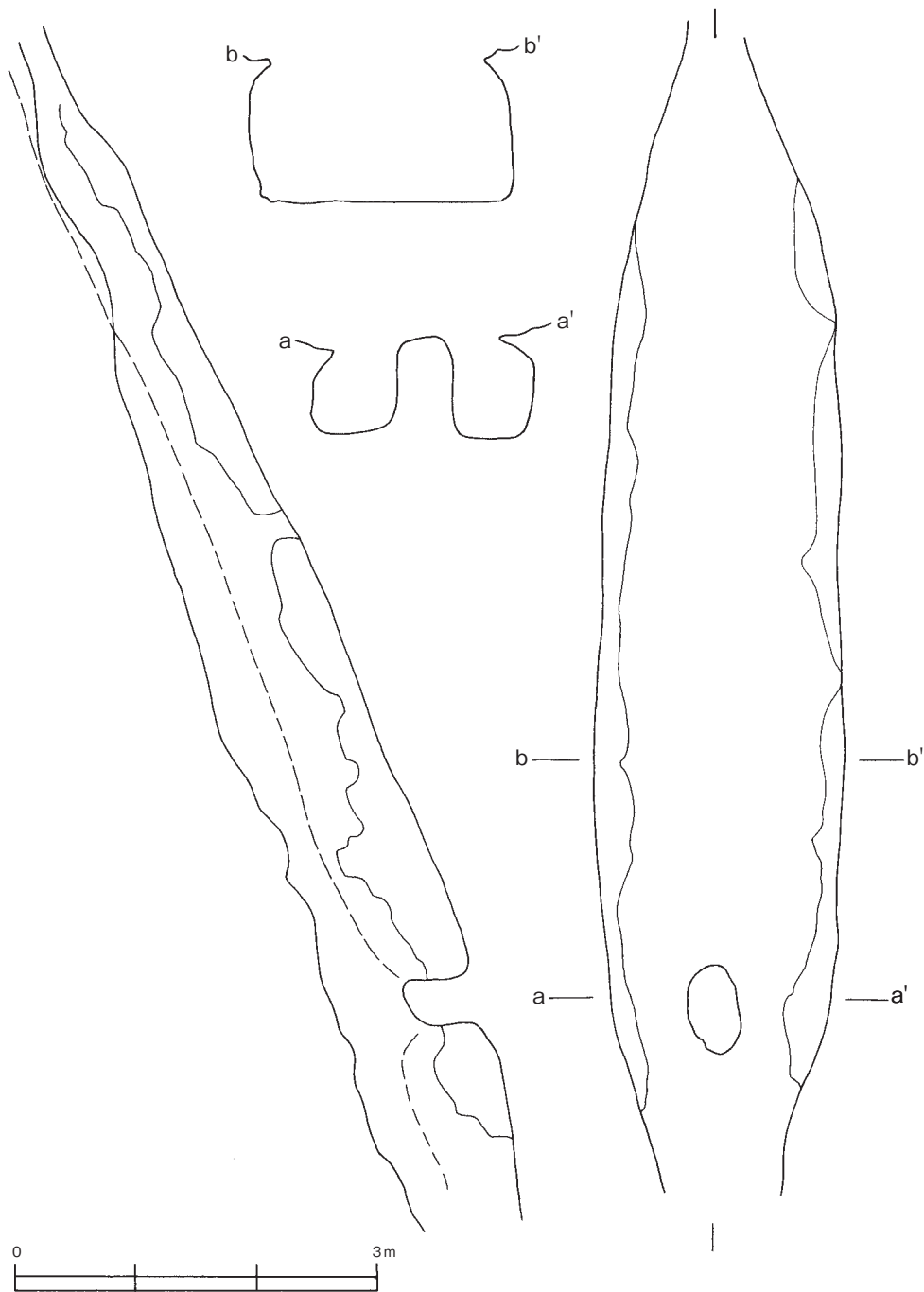
出土遺物についても触れ、窯体実測図と併せて一部遺物実測図も掲載されている。1号窯は主に壺・甕を中心に焼成し、これらの出土破片数はおよそ400点に及んだという。一方、片口鉢・山茶碗類は極少量で、山茶碗については美濃の土を使用していることは認めているが、あまり上作ではない点、出土点数が少ない点、割れた断面に自然釉が掛かっている点などから、1号窯の製品ではなく搬入されたものとしている。

竹内氏は、甕の口縁部の形状がN字状を呈し常滑窯のものに類似することや、窯体の構造などからこの窯の操業を鎌倉時代としている。また、この窯跡の特徴として燃焼室の奥行きが狭い点、煙道部があまり焼けていない点、窯内の出土遺物の焼成が不足している点などを指摘し、このうち後二者の問題は前者に起因するとした。また、当時の兼山という地における情勢について、鎌倉時代にすでに窯業が盛んで木曾川を利用して製品を運搬していると仮定した場合、荘園支配下における土地所有において行動範囲が制限されるなかで、陶工がこの丘陵地帯をどう利用したのかを推察すると、当時の兼山の地は商品経済が盛んで庶民の生活も想像以上に充実していたのではないかと記している^(註2)。

なお、調査担当者である荒井金一氏は調査日誌の中で、1号窯に北側に隣り合って築かれた窯について触れ、これを2号窯と記している（荒井1968）。2号窯は、全長約10m余の1号窯に対し全長約14.5mと大型であるという。1号窯の出土遺物については、歪みは大きいが同一個体と思われる大甕1点、甕破片約400点、焼台約20点、山茶碗片2点、すり鉢（片口鉢か）1点とあり、2号窯の出土遺物については、復元可能な中甕1点、甕破片約100点、砥石1点、叩石1点などと記されている。また、1号窯は焼成不足のものが多くに対して2号窯のものは完全に焼けたもので灰釉（自然釉か）がかかったものばかりであることについても注目している。

その後、『兼山町史』編纂にあたり、荒井氏が竹内氏の報告を再編集している（荒井1972）。ここでは中世美濃国内の甕生産について触れ、古城山窯と同様に常滑窯の技術を導入した窯業地として中津川窯の存在に注目している。その際、2号窯から出土した中甕の接合・復元した状態の写真が掲載されているが、出土遺物以外の部分で2号窯についての記述はみられなかった。また、荒井氏は木曾川を利用した水運についても言及し、当時の兼山町が木曾川舟航とにらみ合わせて商品経済が盛んで庶民の生活も想像以上に充実していた可能性を指摘している。

さて、同窯跡についてはその後1976年刊行の『美濃の古陶』で、榎崎彰一氏によって美濃地方で中



第4図 古城山1号窯窯体構造図（竹内1969より作成）

津川窯の他に壺・甕生産が行われた窯跡として紹介されている（榑崎1976）。また、中島勝国氏、奥磯栄麓氏は窯体構造図を再掲載し、窯体構造や出土遺物についての概要を報告しており、木曾川の水運についても触れ、同窯の性格を明確にするためには製品の流通を究明する必要があると指摘している（中島・奥磯1976）。

藤澤良祐氏は1993年発行の『東海の中世窯』で古城山窯跡について紹介し、出土遺物に関しては、常滑窯に酷似したN字状口縁の甕類が多量に出土したことから、「工人集団の移動を含めた常滑窯からの直接的な技術導入」による成立を想定している（藤澤1993）。また、口縁部の形状から操業年代について13世紀中葉からはじまり、13世紀後半代にピークを迎えるとした。なお、12世紀中葉に常滑系の甕を生産した三河地域の足助窯について、古城山1号窯と時期は異なるものの、両者ともその成立以

前に山茶碗生産が認められず、窯業地としても短時間で廃絶するという共通点も見出している。

中野晴久氏は、古城山1号窯の窯体が全長14mほどで、焼成室長も10mである点について、大型品の集約的生産に向けて改良された13世紀代の常滑窯の窯体構造と一致する点を指摘し、出土遺物からみても13世紀中葉以降の常滑窯から強い影響を受け、工人レベルで直接的な技術移植があった可能性が高いとしている(中野1996)。さらに、中野氏は同書の中で瓷器系中世窯の技術系譜を整理し、古城山1号窯を常滑窯(第2群C類)の影響を受けて成立した窯業地として中津川窯などととも第3群c類と位置づけている。

さらに、2010年に長瀬治義氏は同窯の窯体構造図と遺物実測図を再掲載し、焼成された甕の口縁部の形態から、常滑編年6a型式と類似し、鎌倉時代中期頃の操業と推測している(長瀬2010)。山茶碗との併行関係からみると窯洞期にあたるが、山茶碗類の出土数がわずかであることから併焼の可能性は低いとみている。窯場設置の意義としては、中津川窯に所属する中洗井北古窯跡と同様、常滑窯からすると遠隔且つ単発的であり、広がりも継続性もみられないことから、特定遠地の常滑系製品の需要に応えたものと解釈している。また、竹内氏と同様、戦国期に木曾川最上流に設けられた兼山湊の存在にも注目している。

近年では、愛知学院大学文学部歴史学科により、中津川窯の尻無1号窯跡や上県2号窯跡の発掘調査が行われている。この調査研究の一環で古城山窯跡の踏査、遺物採集を行い、過去の報告を踏まえて再報告している^(註3)(山本2013)。古城山窯跡出土資料と採集資料のうち、主要生産器種である甕類をその口縁形態からA・B類に大別、さらにそれぞれ1・2類に細分した(山本2013)。甕B類については常滑窯の製品と特に類似性が高く、常滑編年の第5型式期に併行するものであるとし、甕A類については口縁部の形状や縁帯幅などから甕B類より古い様相を呈するものとした^(註4)。また、古城山窯跡の出土とされる山茶碗については、窯洞期と白土原期に比定した。

註1 中間報告の時点では古城山古窯群としている。

註2 古城山2号窯については中間報告の中でその調査に着手し作業半ばであると記されているが、1969年の第1号窯の最終報告の中では2号窯についての記載はみられない。

註3 1号窯の遺構実測図について、竹内氏の報文に記される数値と、掲載されている実測図が一致しないため、図面を計測し直した数値に合わせて再報告を行った。しかし、平成30年に行った第2次調査により、実際には報文中の数値が正しく、実測図の縮尺が誤っていたことが判明した。

註4 この再報告のなかで、山本は甕A類に類似するものが常滑製品にみられないとしているが、常滑窯の報告書を精査したところ、槍場・御林窯跡群の報告書のなかで中野氏によって行われた甕口縁部の分類のうち、A類とされるものの中に古城山窯跡の甕A類と類似するものが見受けられる(中野1985)。

引用・参考文献

荒井金一1968『字古城山古窯群第一号窯跡発掘調査』兼山町教育委員会・兼山町文化財審議会

竹内蘭山1968『字古城山古窯群第一号窯発掘調査中間報告』

竹内蘭山1969『古城山古窯址群発掘調査報告書(第一号窯)』

荒井金一1972「第七節 鎌倉時代」『兼山町史』岐阜県可児郡兼山町・兼山町史編纂委員会

榑崎彰一1976「美濃古陶の流れ」『美濃の古陶』光琳社出版

中島勝国・奥磯栄麓「可児地区」『美濃の古陶』光琳社出版

中野晴久1985「第10章 第1節 A地点出土の甕口縁部に関する分類」『槍場・御林古窯址群 常滑市文化財調査報告書第15集』常滑市教育委員会

藤澤良祐ほか1993『東海の中世窯』(助瀬戸市埋蔵文化財センター)

藤澤良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要 第3号』三重県埋蔵文化財センター

中野晴久1996「瓷器系中世陶器の生産」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～』瀬戸市教育委員会・(助瀬戸市埋蔵文化財センター)

長瀬治義2010「兼山(古城山)窯」『古陶の譜 中世のやきもの』MIHO MUSEUM

安井俊則・中野晴久2012「押印・刻文」『愛知県史 別編窯業3 中世・近世常滑系』

山本智子2013「古城山窯跡の出土遺物について」『上県2号窯跡』第7次発掘調査概要報告書』愛知学院大学文学部歴史学科

第4章 発掘調査の経過（発掘調査日誌）

8月14日（月） くもり

8時半に愛知学院大学考古学整理室に集合し、9時半に出発した。13時ごろ可児市大森笹洞5号窯・6号窯を見学した後、15時半ごろ現場に到着した。器材を搬入し、窯周辺の草刈りを開始するとともに、測量班は三つの基準点（①109.397m、②108.912m、③107.752m）を確認した。

8月15日（火） 雨

この日は雨のため調査を中止し、午前中は久々利公民館の「なぞとき可児の古墳探検」展と、荒川豊蔵資料館の「茶碗尽くし」展および荒川豊蔵の作業場・居宅を見学した。午後は美濃陶磁歴史館の「やきものの型」展と、乙塚古墳・段尻巻古墳を見学した。

8月16日（水） くもり時々雨

午前中は雨のため待機し、12時半に現場集合し、窯周辺の草刈りと清掃をした。範囲は東西約38m、南北約28mである。測量班は標高移動のためA班とB班の二つの班に分かれて行動した。共通の標高点を測った結果A班が114.164mとB班が113.702mとなり、0.462mの差が生じた。

8月17日（木） 晴れ

前日に引き続き草刈りと清掃を行った後、窯跡の全景写真を撮影した。また、杭を調査範囲の四方（北の山・谷側、南の山・谷側）に設置した。測量班は新しい基準点（③107.752m）から移動し、グラウンドの入口に到着した（167.477m）。

8月18日（金） 曇りのち雨

試掘坑（トレンチ）を窯体部に2箇所（Aトレンチ・Bトレンチ）、窯体下方の平坦部に1箇所（Cトレンチ）設定した。また、測量班は標高移動を完了し、基準点の標高はBM1 186.470m、BM2 190.666m、BM3 192.615m、BM4 188.615mとなった。

8月19日（土） 晴れ

Aトレンチ・Bトレンチ・Cトレンチとも設定状況の写真を撮影し、それぞれ腐植土の除去を行った。この日は午後2時に作業を終了し、可児市兼山町の「美濃金山城下のぶらり歩き」に参加した。

8月20日（日） 晴れのち曇り

各トレンチとも腐植土を除去した後の状況写真を撮影し、地山検出を目指して掘り進めた。Bトレンチの南側で窯体の可能性を想定していたものは単なる窪みである可能性が出てきたため、これ以降2基の窯体について、過去の発掘調査報告書に従い南側の窯体を1号窯、北側の窯体を2号窯として扱うこととした。

8月21日（月） 晴れ

Aトレンチでは掘削作業を続け、旧表土を検出した。また、遺物も出土した。Bトレンチでは、地山検出を引き続き行った。Cトレンチは北側で地山が検出されたため、それを追って南側へ地山を広げた。南端では礫、中央部では炭化物を検出した。

8月22日（火） 晴れ

Aトレンチは2号窯左側と1号窯右側で地山を検出し、清掃を行った。1・2号窯間にて旧表土を検出したことから、その下層に地山の存在を想定したが、2号窯左側の地山と色が異なっていた。Bトレンチでは地山の検出を進めた。Cトレンチの南側にて焼土を検出し、地山の落ち込みもみられることか

らSX01とした。また2号窯の下方にあたる部分から焚口らしきものを検出した。

8月23日(水) 曇りのち雨

Aトレンチは全体の清掃を行った後、写真撮影を行った。Bトレンチは2号窯左側と1・2号窯間の地山、2号窯の床面を検出し清掃を行った。1号窯右側は地山だと思われていたもの下に旧表土が見つかったため、さらに掘り下げることとなった。Cトレンチは全体の清掃後、写真撮影を行った。焚口と想定されていた部分から炭化物が面的に検出された。燃烧室床面と思われるが、詳細は不明である。

8月24日(木) 晴れ

Aトレンチは2号窯の左側から1・2号窯間にかけての土層断面図の作成を開始した。Bトレンチは1号窯の壁と地山を検出後、清掃を行った。1号窯床面は確認できなかった。その後写真撮影を行い、土層断面図の作成に入った。Cトレンチは東壁の土層断面図を作成した。

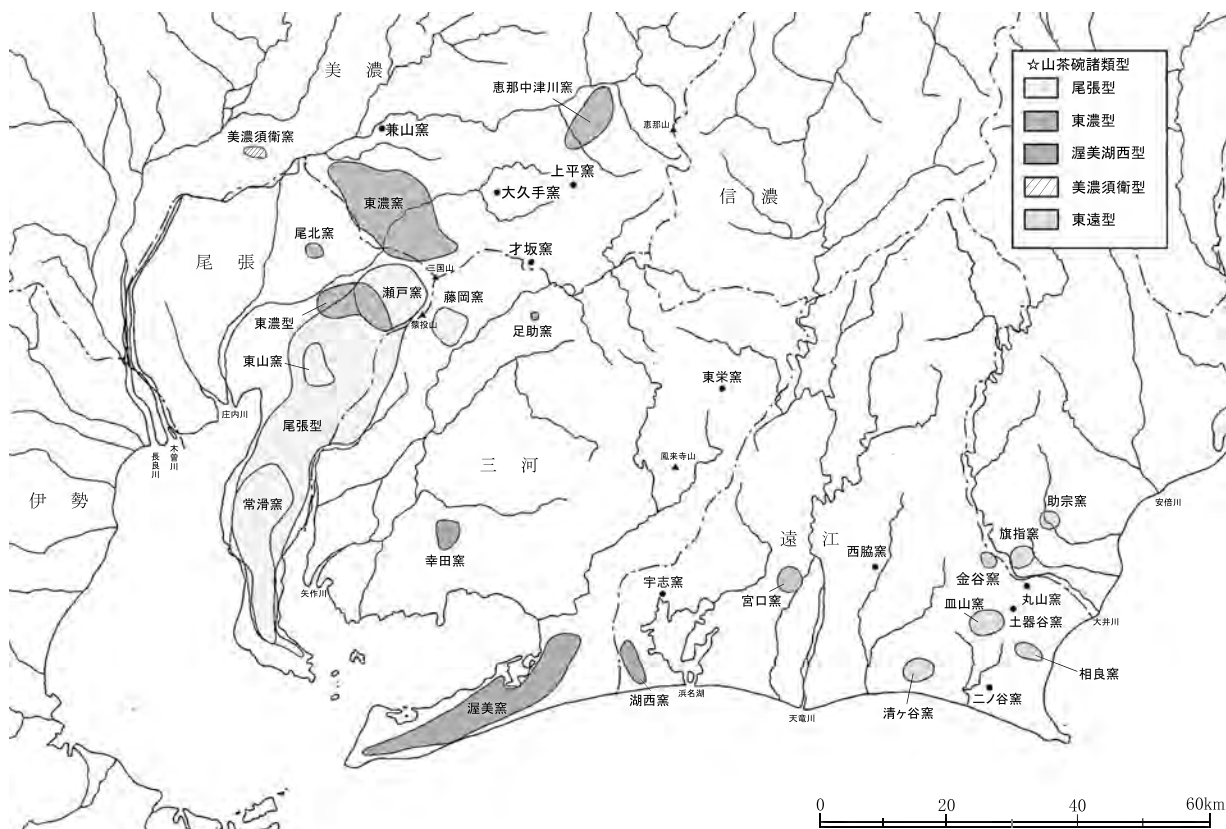
8月25日(金) 晴れのち雨

Aトレンチは土層断面図と平面図を、Bトレンチは土層断面図と2号窯左側から1・2号窯間にかけての平面図を完成させた。Cトレンチは土層断面図に土層の説明を記入し、平面図の作成を完了した。

8月26日(土) 晴れ

Aトレンチ・Bトレンチでは土層断面図に土層の説明を記入し、平面図の完成を完了した。各トレンチとも土嚢による埋め戻しを行い、予定していた全ての発掘作業を終了した。午後から調査区域内の片付けを行い、27日(日)午前中に出土遺物・発掘器材等を車に積み込み大学まで搬送し解散した。

(糟谷貴幸・西森睦月)



第5図 東海地方の中世窯位置図

第5章 検出された遺構

第1節 周辺地形とトレンチの設定（第6図）

調査範囲は西から東へ向かって斜面になっており、今回測量した範囲の標高は184.50～193.00mまでである。調査範囲の南側は比較的急斜面で、北側と西側はやや平坦になっている。1号窯・2号窯は標高187.00～191.50m付近に形成され、窯体部は明らかな窪みがみられ、2基の間は標高が高くなっている。また、1号窯に並ぶような形でその南側にも窯と思われる窪みが存在する。

調査に際し、1・2号窯の状況と1号窯南側の窪み、調査範囲西側の平坦面の状況を確認するため、3つのトレンチを設定し、東側から西側へ順にAトレンチ、Bトレンチ、Cトレンチとした。また、基準点としてBM1、BM2、BM3、BM4の4点を設定した。BM1は標高186.461mで、Cトレンチの北に位置する。BM2は標高190.666mで、Aトレンチの東に位置する。BM3は標高192.615mで、Aトレンチの南に位置する。BM4は標高188.615mで、Bトレンチの南に位置する。

Aトレンチは、1・2号窯の焼成室上方及び煙道部の状況を調査することを目的として標高189.00～191.50m付近に設定したものである。トレンチの北東の杭をA1とし、そこから南に12.957mの地点杭をA2、杭A2から西に1.0m地点の杭をA3、杭A1から西に1.0m地点の杭をA4と設定した。

Bトレンチは、1・2号窯の焼成室下方及び分炎柱周辺の状況に加え、窯体の可能性のある窪みの状況を調査することを目的として、Aトレンチの西側に約5m、標高188.00～189.50m付近に設定したものである。トレンチ北東の杭をB1とし、そこから南に16.496m地点の杭をB2、杭B2から西へ1.0m地点の杭をB3、杭B1から西に1.0m地点の杭をB4と設定した。また、2基の窯体の中間にも杭を2本設定し、杭B1・B2間のを杭B5、杭B3・B4間のを杭B6とした。

Cトレンチは、調査区西側の平坦面の状況及び工房跡の調査を目的としてBトレンチの西側に8～9m付近の標高186.80～187.00m付近に設定したものである。トレンチ北東の杭をC1とし、そこから南に12.322m地点の杭をC2、杭C2から西に1.0m地点の杭をC3、杭C1から西に1.0m地点の杭をC4と設定した。

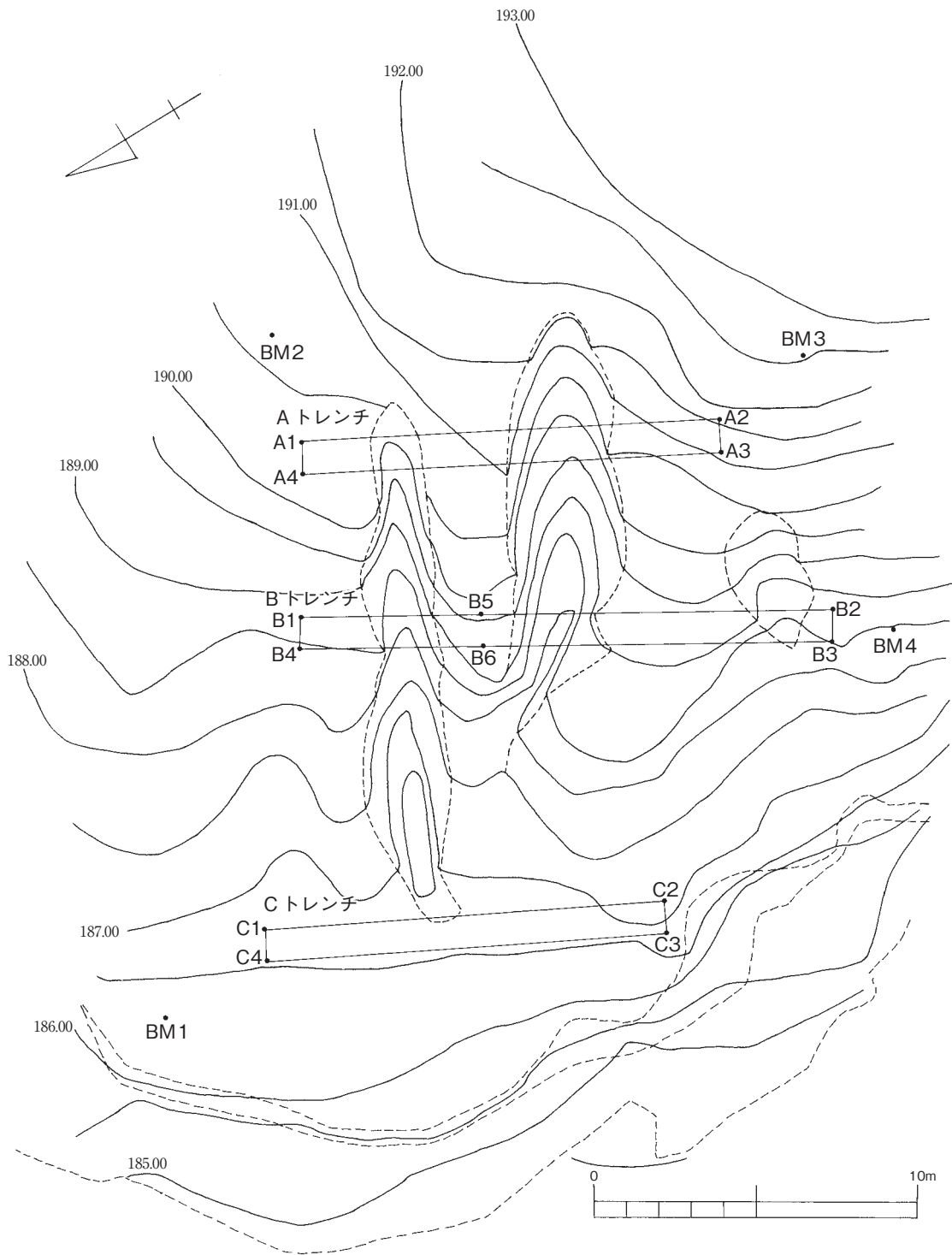
(大森裕朗)

第2節 Aトレンチの状況（第7図）

Aトレンチでは1・2号窯の床面と、1号窯右側の平坦面を検出した。2号窯に伴う床面の状況は粘土を貼った貼床で被熱により硬化しており、側壁も同様に被熱し硬化しているが、1号窯の床面は2号窯の床面のような被熱面はみられなかった。

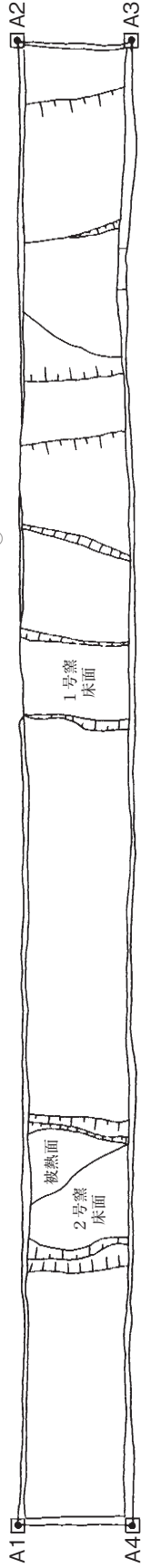
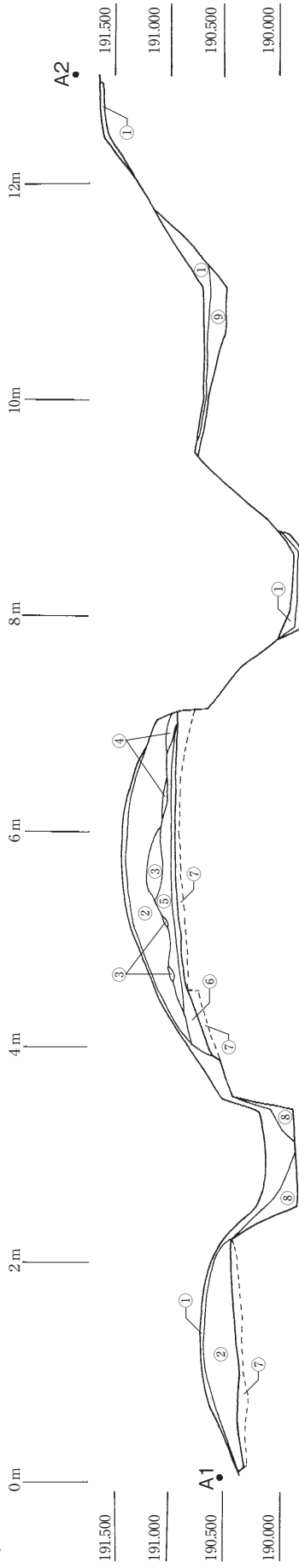
Aトレンチの土層断面図は東側の1面を提示した。杭A1の標高は190.550m、杭A2の標高は191.893mである。土層は①～⑨の9層を確認した。全ての土層において最上層は①黒褐色土が堆積している。2号窯左側と1・2号窯間ではその下層に昭和41年度の発掘調査時の排土とみられる②黄褐色土層が最大40cm程度の厚さで堆積している。2号窯左側ではその下層に地山である⑦黄褐色土が検出される。2号窯窯内には①層の下に昭和41年度の発掘調査後の流入土とみられる⑧褐色土層が堆積していた。そして、1・2号窯間では②層の下に⑤黄褐色土層が堆積するが、その間には旧表土に似た③にぶい黄褐色土層と④明赤褐色土層がレンズ状に堆積している。⑤層の下には旧表土とみられる⑥にぶい黄褐色土層が面的に堆積し、その直下には地山とみられる⑦黄褐色土層を検出した。1号窯窯内と1号窯右側では①層の下に流入土である⑨にぶい褐色土層が堆積している。

(大矢敬子・山田紗希)



第6図 古城山窯跡地形測量図

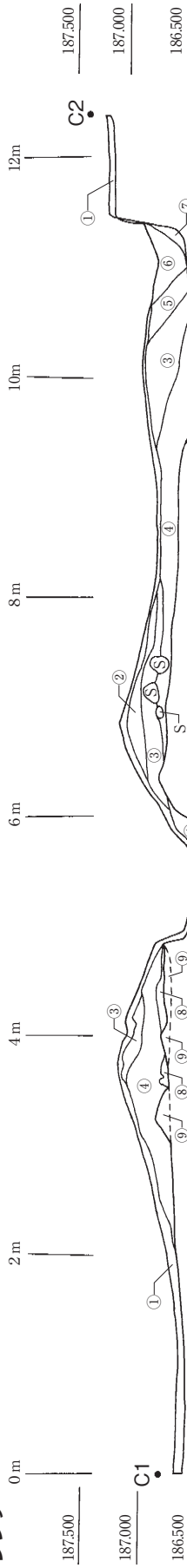
Aトレンチ



- ⑤黄褐色土 (しまり○ 粘性△ 1cm大の白色粘土を含む、昭和41年の排土)
- ⑥にぶい黄褐色土 (しまり× 粘性△ 田表土)
- ⑦黄褐色土 (しまり○ 粘性○ 1cm大の焼土を含む、地山か)
- ⑧褐色土 (しまり○ 粘性○ 流入土)
- ⑨にぶい褐色土 (しまり○ 粘性△ 1cm大の焼土を少量含む、流入土か)

- ①黒褐色土 (しまり× 粘性× 腐植土)
- ②黄褐色土 (しまり△ 粘性○ 粒状~10cm大の焼土を含む、白色粘土を含む、昭和41年の排土)
- ③にぶい黄褐色土 (しまり× 粘性× レンズ状に入っているが田表土ではない)
- ④明赤褐色土 (しまり× 粘性× 5~10cm大の焼土を含む)

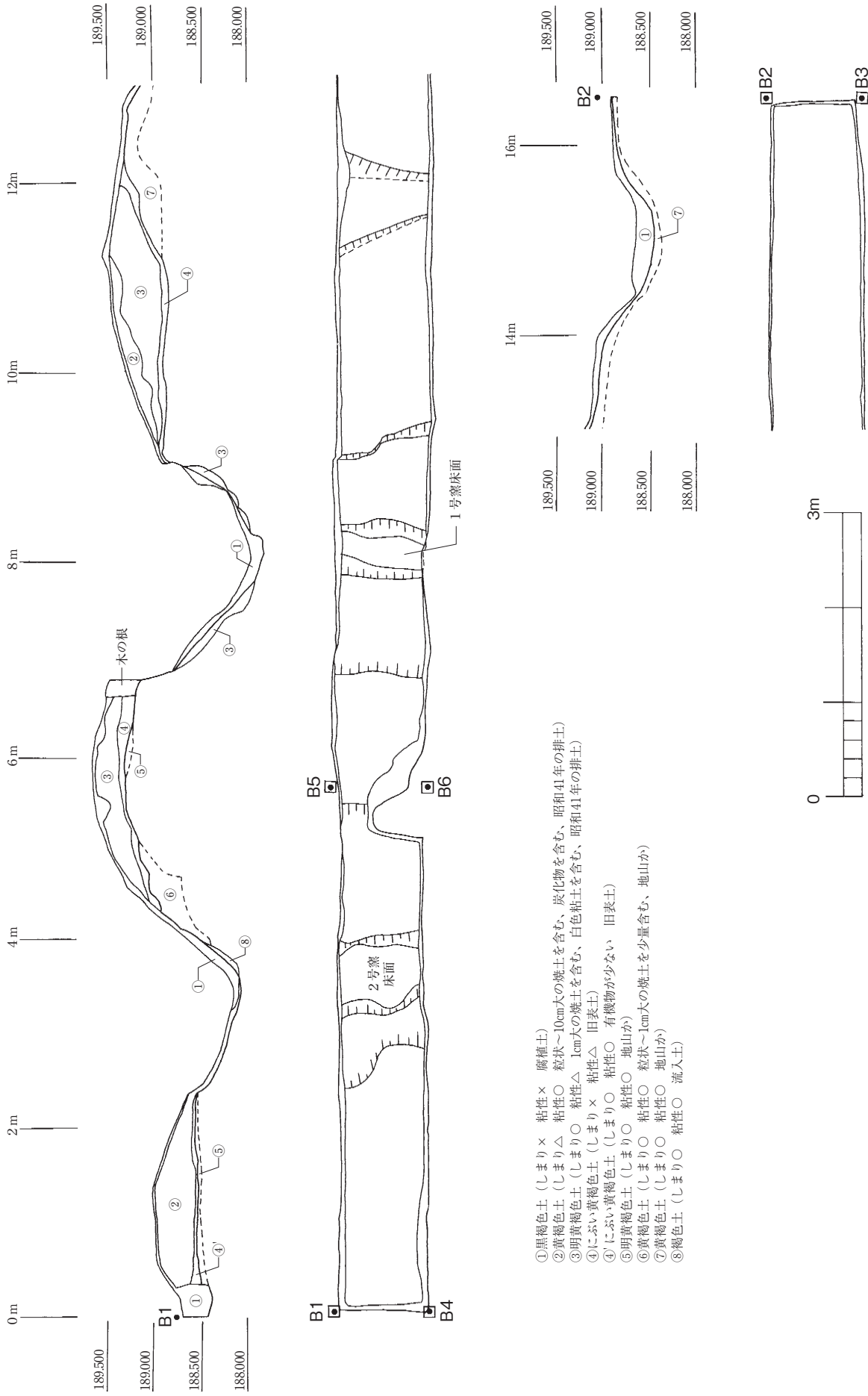
Cトレンチ



- ①黒褐色土 (しまり× 粘性× 遺物を含む、腐植土)
- ②褐色土 (しまり× 粘性× 炭化物を含む、遺物を含む)
- ③明赤褐色土 (しまり× 粘性× 5~1cm大の焼土を含む、遺物を含む)
- ④黄褐色土 (しまり△ 粘性○ 粒状~10cm大の焼土を含む、遺物を含む、昭和41年の排土)
- ⑤黄褐色土 (しまり○ 粘性○ 白色粘土を含む)
- ⑥暗褐色土 (しまり○ 粘性○ 糞乱層)
- ⑦赤褐色土 (しまり× 粘性× 焼土を含む)
- ⑧にぶい黄褐色土 (しまり× 粘性× 田表土)
- ⑨黄褐色土 (しまり○ 粘性○ 地山か)
- ⑩黒褐色土 (しまり× 粘性× 炭化物を含む)



第7図 Aトレンチ・Cトレンチ遺構実測図



第8図 Bトレンチ遺構実測図

第3節 Bトレンチの状況（第8図）

Bトレンチでは、2号窯の床面、1号窯の床面と両側壁、1号窯右側の平坦面を検出した。1・2号窯の床面はいずれも硬化面を検出したが、明確な被熱面は認められなかった。1号窯右側で検出した平坦面の幅は2.21mで、これより以南に存在する窪みを窯体と想定して調査を進めていたが、窯体は検出されなかった。

Bトレンチの土層断面図は東側の1面を提示した。杭B1の標高は188.793m、杭B5の標高は189.640m、杭B2の標高は189.052mである。土層は①～④④'⑤～⑧層の9層を確認した。ほぼ全ての土層において最上層は①黒褐色土が堆積している。2号窯左側では①層の下に昭和41年の発掘調査時の排土である②黄褐色土層が最大35cm程度の厚さで堆積し、地山とみられる⑤明黄褐色土との間に④'にぶい黄褐色土層が薄く堆積している。2号窯窯内には①層が最大30cm程度の厚さで堆積し、その下層に昭和41年の調査後の流入土とみられる⑧褐色土層がみられる。1・2号窯間では①層の下に昭和41年の排土である③明黄褐色土層が25cm前後堆積し、その下層に旧表土とみられる④にぶい黄褐色土が堆積している。このうち2号窯側ではその下層に地山と思われる⑥黄褐色土、1号窯側でも一部で地山と思われる⑤明黄褐色土を検出した。1号窯窯内には中央部分を除いて昭和41年の排土である③明黄褐色土層がみられ、全体を覆うように①層が堆積している。1号窯右側の平坦面では②③④層の順に堆積がみられ、南側では地山と思われる⑦黄褐色土を検出した。（田浦舞衣・安田彩音）

第4節 Cトレンチの状況（第7図）

Cトレンチでは、2号窯の下方にあたる地点で土坑状の落ち込みを検出した。底面の全面で炭層が検出されたため、2号窯焚口及び燃焼室に関連するものであると推定した。また、1号窯下方では、焼土層及び被熱面が検出されたため、1号窯との関連も考慮しSX01とした。

Cトレンチの土層断面図は東側の1面を提示した。杭C1の標高は186.766m、杭C2の標高は187.351mである。土層は①～⑩層の10層が確認された。すべての土層において最上層は①黒褐色土層が堆積している。北側では①層の下に焼土を含む③明赤褐色土層が、さらにその下層では昭和41年度調査の排土④黄褐色土層が旧表土である⑧にぶい黄褐色土層を覆うようにして堆積し、その直下に地山と思われる⑨黄褐色土を検出した。また、2号窯下方にあたる地点の落ち込みは、炭化物を多く含む⑩黒色土が最下層で前面に検出され、その上に③明褐色土層と④黄褐色土層が堆積している。杭C1から南に6mから8mの地点には①層の下に遺物を含む②褐色土層と③層が堆積し、③層の下には④層がみられる。④層は杭C1より南に11m付近まで堆積している。また、SX01では④層が地山とみられる⑨黄褐色土を覆い、その上に③層、白色粘土を含む⑤黄褐色土層が順に堆積し、⑤層の中に攪乱層である⑥暗褐色土層がみられる。また、⑥層の南側下層にはわずかに焼土を含む⑦赤褐色土が確認されている。（赤山樹里・川端ちえ美）

第6章 出土遺物の概要

本調査では、甕類が1点、片口鉢が2点、焼台として使用したと考えられる円礫1点が出土した。これに表面採集資料の甕類5点を加えて整理する。なお、本窯跡出土の甕類の基本調整として、頸部内外面にはロクロ目、口縁部内外面には回転ナデ調整、胴部内面上方には回転ナデ調整が認められる。

第1節 甕類（第9図1～6）

1は広口壺で口径23.0cm、縁帯幅1.1cmで、頸部はやや内傾し、上方で外側に屈曲する。口縁部上端は丸く収められ、上方へ短く伸びる。内面の口縁直下には窪みが一周する。頸部内面には指圧痕が認められる。2は広口壺で口径24.4cm、縁帯幅1.2cmで、頸部は内傾し上方で外側に緩く屈曲する。3は甕で縁帯幅1.5～1.7cmで、頸部は内傾し、上方で外側に強く屈曲する。屈曲部の外面は指ナデ調整により窪んでいる。胴部内面上方には指圧痕と紐輪積み痕が認められる。4は甕で縁帯幅1.5cm、頸部は内傾し上方で外側にやや強く屈曲する。口縁部は内傾し、端部は丸く収められる。6は甕で縁帯幅1.6cm、頸部はやや内傾し上部で外側に屈曲する。また、5は甕類の胴部上方で内側に湾曲する部分の破片であるが、外側に押印が施されている。

器表面は、1・2が暗褐色、3・5が暗灰色、4が茶褐色、6が灰褐色を呈し、1・2・4・5には淡緑色ないし薄淡緑色の自然釉が掛かり、2・4の外面にはボロが付着している。破断面は1・2が灰白色、3・4が灰色、5は暗灰色、6が灰褐色を呈し、1～4は密、5はやや密、6は粗い胎土を使用している。また、1の胎土中には2.0～10.0mm大の白色粒と、0.5mm大の黒斑が多く含まれ、2.0mm大の長石粒の吹き出しがみられる。3の胎土中には1.0～2.0mm大の白色粒と、細かな気泡が多くみられる。4の胎土中には1.0～2.0mm大の白色粒と、3.0～5.0mm大の礫が含まれ、気泡が多くみられる。5の胎土中には1.0～6.0mm大の白色礫が含まれ、6の胎土中には0.5～1.0mm大の白色粒と0.3～1.0mm大の気泡がみられる。1・2はやや焼成過多、3～6焼成良好である。（猪飼 充）

第2節 片口鉢その他（第9図7～9）

(1) 片口鉢

7・8はいずれも口縁部片で、断面は隅丸方形を呈する。7は器表面・破断面とも灰白色を呈し、8は器表面・破断面とも黄白色を呈する。いずれもやや粗い胎土を使用し、7の胎土中には0.5～1.5mm大の白色粒、8の胎土中には1.0～2.0mm大の礫がみられる。7はやや焼成不足、8は焼成不足である。

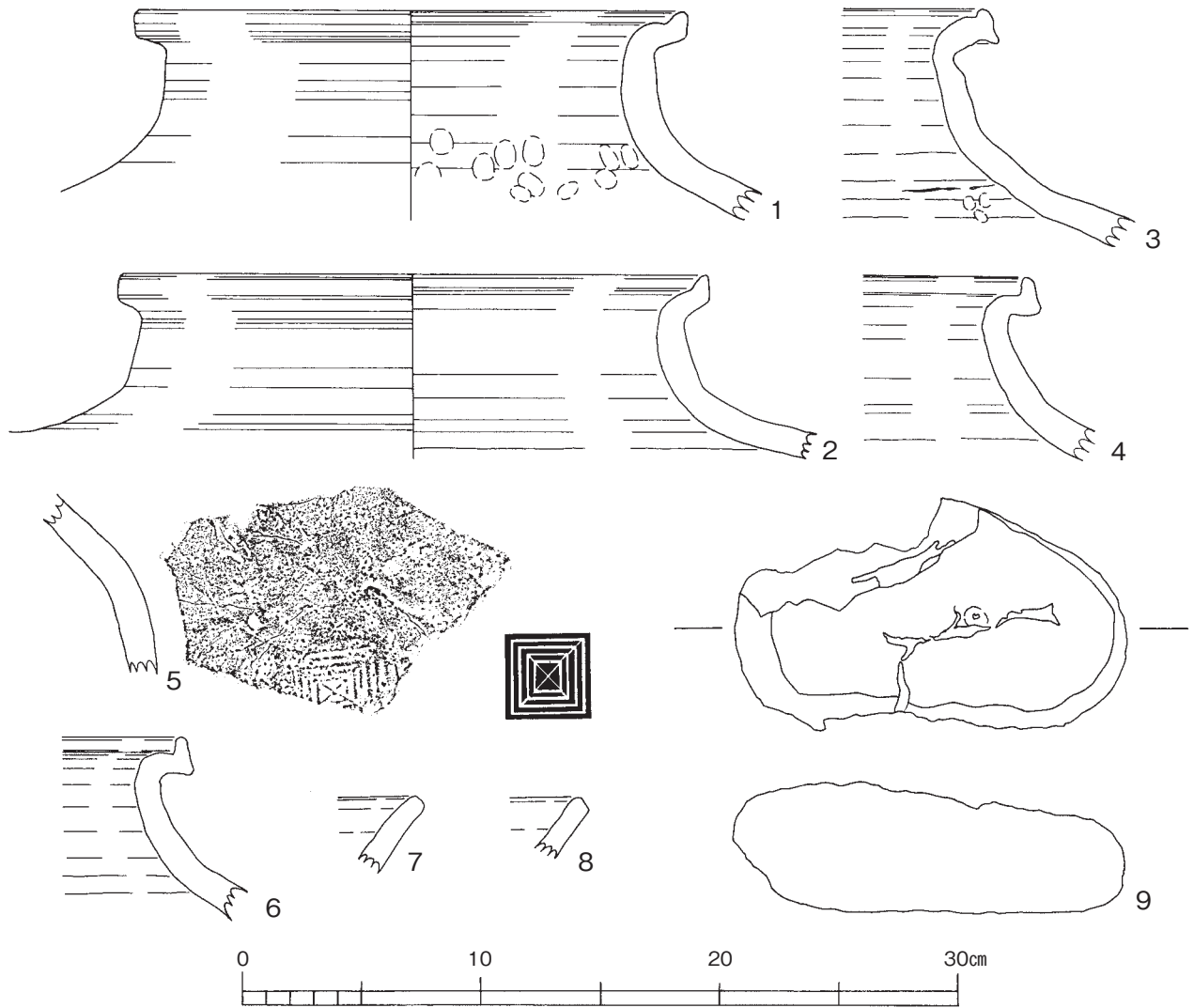
(2) その他

9は玄武岩と考えられる円礫で、熱を受け自然釉や陶片の付着がみられることから、焼台として利用されたものと考えられる。

（猪飼 充）

第1表 古城山窯跡出土遺物計測表

図	器種	分類	法量 (cm)			注記番号	口縁 残存率%	縁帯幅	備考	山本 2013
			器高	口径	底径					
9-1	広口壺	A 2	—	23.0	—	KJ 表採	25	1.1		No.18
9-2	広口壺	A 2	—	24.4	—	KJ1C No.1	25	1.1	自然釉	
9-3	甕	B 2	—	—	—	KJ 表採	5	1.55	自然釉	No.8
9-4	甕	A 2	—	—	—	KJ 表採	5	1.5		No.7
9-5	甕		—	—	—	KJ 表採	—	—	押印文	No.16
9-6	甕	A 2	—	—	—	KJ 表採	15	1.6		
9-7	片口鉢		—	—	—	KJ1B No.5	5	—		
9-8	片口鉢		—	—	—	KJ1C No.3	5	—		
9-9	焼台		—	—	—	KJ1	—	—	自然釉・玄武岩か	



第9図 古城山窯跡出土遺物実測図

第2表 古城山窯跡出土遺物台帳

No.	日付	調査区	出土層位	基本土層	注記番号
1	170816	表採	作業場から(平坦面上)粘土採掘場か	①黒褐色土	KJ1 No.1
2	170816	表採	窯の上から(北側の窯の上)2号窯の上	①黒褐色土	KJ1 No.2
3	170817	表採	1号窯前庭部	①黒褐色土	KJ1 No.3
4	170817	表採	2号窯周辺	①黒褐色土	KJ1 No.4
5	170821	A トレンチ	褐色土(焼土有り) 1号窯の南側	②黄褐色土	KJ1A No.1
6	170821	B トレンチ	焼土混じりの黄褐色土 2号窯北側	②黄褐色土	KJ1B No.1
7	170821	B トレンチ	焼土混じりの黄褐色土 1号窯と2号窯の間	②黄褐色土	KJ1B No.2
8	170822	B トレンチ	焼土混じりの黄褐色土 1号窯の右側	②黄褐色土	KJ1B No.3
9	170822	B トレンチ	焼土混じりの黄褐色土 1号窯と2号窯の間	②黄褐色土	KJ1B No.4
10	170822	B トレンチ	焼土混じりの黄褐色土 2号窯の右側	②黄褐色土	KJ1B No.5
11	170819	C トレンチ	腐植土	①黒褐色土	KJ1C No.1
12	170820	C トレンチ	腐植土	①黒褐色土	KJ1C No.2
13	170820	C トレンチ	赤褐色土	②褐色土	KJ1C No.3
14	170821	C トレンチ	黄色土	③明赤褐色土	KJ1C No.4
15	170822	C トレンチ	黄色土	④黄褐色土	KJ1C No.5
16	170822	C トレンチ	黄色土 2号窯南側	④黄褐色土	KJ1C No.6
17	170823	C トレンチ	黄色土 SX01より	④黄褐色土	KJ1C No.7

第7章 小結

古城山窯跡第1次調査では、Aトレンチ・Bトレンチの調査によって窯体を2基確認した。両トレンチでは1号窯・2号窯の焼成室床面及び側壁の一部を検出した。各トレンチとも昭和41年の調査の排土が確認され、1号窯と2号窯の間には特に厚く堆積していた。1号窯・2号窯には窯内埋土がほとんどみられず、腐植土と昭和41年の排土が薄く堆積していたことから、過去の調査後埋め戻さずに放置されていたものと考えられる。Cトレンチでは、2号窯の下方あたる部分で炭層を、1号窯の下方にあたる部分でSX01を検出した。また、発掘調査範囲の地形測量図を作成した。

今回の調査では2基の窯体を確認し、これらが竹内氏の報告における1号窯・2号窯であることを確認することができたが、今後解決すべき課題が幾つか残された。まず、Cトレンチにおいて、2号窯下方で検出された炭層を燃焼室床面と仮定すると、Aトレンチで2号窯の焼成室床面が検出されていることから、15m以上の長大な窯ということになる。しかし、地形測量図を見る限り1号窯に比べて主軸が安定しないように見受けられることから、2号窯の様相を知るためには、BトレンチとCトレンチの間の範囲を調査する必要があるだろう。また、SX01については1号窯の下方に位置することから、1号窯との関連が予想されるが、その性質を理解することは出来なかった。これについても、SX01の上方の地点を調査し、実態を明らかにする必要がある。

出土遺物については、出土点数が10点前後と非常に少ないが、そのほとんどが甕の破片で片口鉢が少量確認されたという点は過去の調査と同様で、山茶碗については確認できなかった。

古城山窯跡出土の甕類は、口縁部がL字状を呈するものをA類とし、口縁端部が方形で短く上方へ伸びる形状のものを1類、口縁上端に丸みを帯びるものを2類とした。また、所謂T字状口縁に近い形状のものをB類とし、頸部上方で強く屈曲し口縁下端が外方へ突き出すものを1類、口縁下端が下方へ短く摘み出され上端は短く上方へ伸び丸みを帯びるものを2類とした（山本2013）。本報告における1・2・4・6はA2類、3はB2類に該当する。なお、5にみられる押印文については、中野晴久氏が分類した常滑の甕の押印のうち、Cβ2類と類似している（安井・中野2012b）。

甕A・B類のうち、特に常滑窯製品との類似性が高いB類は、常滑編年の第5型式期（1220～1250年）に併行するものである。これに対し、A類についてはB類と比べて口縁部の形状が未発達で古い様相を呈することから、これに先行する常滑編年の第4型式期（1190～1220年）に併行するものと考えられる。

（山本智子）

引用・参考文献

安井俊則・中野晴久2012「押印・刻文」『愛知県史 別編窯業3 中世・近世常滑系』

山本智子2013「古城山窯跡の出土遺物について」『上県2号窯跡』第7次発掘調査概要報告書』愛知学院大学文学部歴史学科

付編 1 永田 5・6 号窯跡について

はじめに

愛知学院大学では、恵那中津川窯の実態を明らかにするため平成16年に尻無1号窯跡、平成17年から26年にかけて上県2号窯跡の発掘調査を行ってきた。この調査により、中津川市側における壺甕生産の様相が明らかになりつつあるが、これに関連して恵那市側での窯業生産についても検討を加える必要が出てきた。

永田5・6号窯跡は、平成元年に恵那市教育委員会によって発掘調査が行われ、5号窯で山茶碗、6号窯で壺甕生産が行われたことが明らかとなった。6号窯で生産された甕類については、その口縁部の形状から恵那中津川窯の中でも最も古い時期のものであるとされている。すなわち同窯跡は、美濃国内の窯業生産の様相を知る上でも、恵那中津川窯の変遷を知る上でも非常に重要な窯跡で、研究者の中でも重要視されシンポジウムや展示図録などでも度々紹介されてきたが、まとまった資料は提示されていない状況である。

そこで、恵那市教育委員会のご厚意・ご協力によって永田5・6号窯跡出土の出土遺物について実測図を作成する機会を得た。また、その中で遺構についても実測図を提供していただき、当時の状況をご教示頂いた。これらの経緯を経て、この度発掘調査の概要について報告をさせて頂くこととなった。この報告により、中世美濃国内における壺甕生産及び常滑窯との関連性を解明する一助となれば幸いである。

1. 地理的環境

岐阜県恵那市は美濃地方南東部に位置し、平成16年10月に、1市5町の合併により誕生した人口約5万4千人の地方都市である。市域の東部は中津川市、西部は瑞浪市、南東部は長野県下伊那郡平谷村・同根羽村、北部は加茂郡白川町・同八百津町、南部は愛知県豊田市に接している。

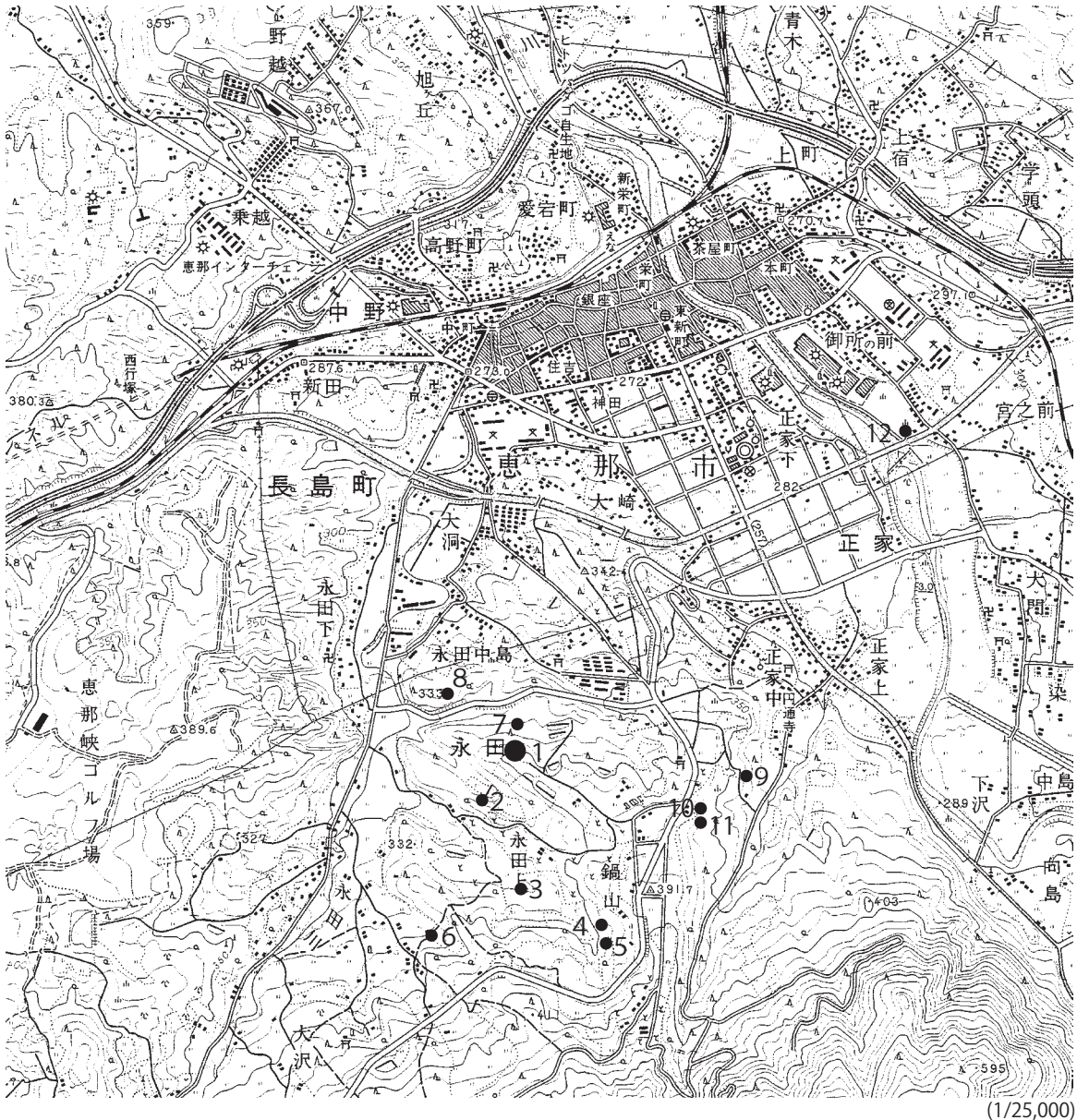
恵那市の地勢は、東は恵那山(2,191m)・保古山(969m)、南西は屏風山(969m)、南東は焼山(1,709m)・荒峰山(1,271m)・三国山(1,162m)、北西は三森山(1,100m)・見行山(905m)・笠置山(1,128m)に囲まれた盆地状の地形である。市内には木曾川・阿木川・矢作川などの河川が流れ、中心市街地を中山道が横断する。

永田5・6号窯跡が属する永田窯跡群は、恵那市長島町永田字城ヶ洞を中心とする標高300~400mの丘陵に立地し、東側約1kmには、国道19号線から岩村町方面へ抜ける国道257号線が通る(図1)。本窯跡群から東には約500mの地点には灰釉陶器を生産した正家窯跡群が存在する。また、北東へ約1.5kmの地点には16世紀代の武並神社窯跡が存在する。

2. 先行研究

永田窯跡群については、小山富士夫氏が1958(昭和33)年発行の『陶説 67 十月号』のなかで触れたのが初出で、当時は灰釉陶器の窯が長島町大字永田の城ヶ洞地区に1基、同菅沼地区に2基存在し、1943(昭和18)年頃発見されたと記している。

植崎彰一氏も、1976年発行の『美濃の古陶』のなかで恵那・中津川地区の窯業について、「白瓷系陶器窯は旧恵那郡一帯に広汎に分布するが、壺・甕窯は中津川市域にのみ集中して分布している。」と紹介している。



1. 永田5・6号窯跡 2. 永田1号窯 3. 永田2号窯跡 4. 永田3号窯跡 5. 永田4号窯跡
 6. 永田7号窯跡 7. 永田8号窯跡 8. 永田9号窯跡 9. 正家1号窯跡 10. 正家2号窯跡
 11. 正家3号窯跡 12. 武並神社窯跡
- ※永田8号窯・永田9号窯の位置は三宅唯美氏のご教示による

図1 永田5・6号窯跡位置図 (齊藤1983より作成)

1983年発行の『恵那市史』では、これまで灰釉陶器窯の存在が指摘されるに留まっていた永田窯跡群についての詳細が述べられている。同書では、永田窯跡群と正家窯跡群を同一の窯跡群としても考えられるとし、両窯跡群を恵那窯跡群の中心的なものとして位置付けている。永田窯跡群は灰釉陶器窯3基、山茶碗窯4基の計7基で構成され、永田1・3・7号窯を白瓷窯、2・4・5・6号窯を白瓷系窯とし、先述の小山氏の報告から窯数が増加し、より詳細に記載されている。

白瓷系窯の焼成器種については、2号窯では主に碗・皿を焼成したとしている。4号窯については、3号窯と同じ場所に築かれ、水田開発のために破壊されたものの、灰釉陶器と山茶碗類が採集されることから、少なくとも2基の窯が存在したと仮定し、3号窯を白瓷窯、4号窯を白瓷系陶器窯としている。

さらに、5・6号窯については採集資料の中に大形の甕や壺を焼いた形跡が認められることから、中津川窯との関連について指摘している（恵那市1983）。

その後、1989年に恵那市教育委員会による発掘調査が行われ、1993年の「恵那・中津川窯」『東海の中世窯』では、恵那市域の灰釉陶器窯は9基、中世窯は7基存在するとし、永田5号窯の窯体写真と、同5・6号窯出土の遺物実測図を掲載している。さらに焼成器種を紹介したうえで、山茶碗類は胎土や製作技法の特徴が東濃窯のものと酷似し、甕類の基本的な製作技法は常滑窯と類似するが、口縁部の形状に差異が認められることから常滑窯からの直接的な技術導入があったかどうかは判断できないとしている。同稿では永田6号窯を中世恵那・中津川窯最古の窯とし、その操業年代を12世紀後半と推定している（藤澤1993）。

中野晴久氏は、東海地方の瓷器系中世窯の多様性を整理し、恵那市側と中津川市側の壺甕生産の連続性が不明であるとしながらひとまず同一の窯業地であると捉え、恵那・中津川窯は東濃窯と常滑窯の影響下に成立したものであるとして性格付けた（中野1996）。そのなかで、永田5号窯出土の壺甕類について、口縁部の形態をみれば忠実に常滑（知多）窯の形態を写しているとし、この技術をもとに新しい時期に大型品生産に転化した可能性も指摘している。ただし、製品の全体的なプロポーシオンには相違点が認められることから、工人レベルの技術移植については疑問が残るとしている。

2010年に愛知県陶磁資料館で開催された特別展『中世のやきもの—六古窯とその時代—』に合わせて作成された展示図録では、永田2号窯跡、4号窯跡、5・6号窯跡について報告されている。これによると、未調査の永田2号窯跡、4号窯跡については第5型式の山茶碗・小皿が採集されている。発掘調査が行われた永田5・6号窯跡では、6号窯は山茶碗・小碗を主体に、輪花碗や片口鉢・杯・子持器台・瓶の生産が確認された^(註1)。

5号窯は甕を主体に、山茶碗・小皿のほか片口鉢や三筋壺・片口碗・小型罎・合子を生産したとある。最終焼成時に天井の落下により廃棄され、灰原の資料は極めて少なく、焼成回数は2～3回と推測される。出土した甕については法量によって3種類に大別され^(註2)、6号窯→5号窯の順に連続して操業されたと報告している。

以上のように、生産内容や出土遺物の形状から、東濃窯や常滑窯との関係を指摘されてきた永田5・6号窯跡であるが、出土遺物や窯体構造について具体的な検討がなされておらず、その位置付けは明確にされていない。本報告は、永田5・6号窯跡の遺構や遺物について整理し、東濃窯や常滑窯と比較・検討することで、技術伝播の状況や中世美濃国内における壺甕生産の初源を明らかにすることを目的としている。

3. 検出された遺構

永田5・6号窯跡では、2基の窯炉に加え工房跡とロクロピットも検出された（図2・写真1）。

(1) 5号窯の状況（図3・図4・写真2）

5号窯は地下式の窖窯で、燃烧室と焼成室の境には分炎柱が設けられる。全長約9.66m、最大幅約2.6m、焼成室床面中央の傾斜角約27°、焼成室の床面積は15.05㎡、焚口と煙道部の高低差は3.98m、主軸方位はN13°E、焚口の幅は約0.86mである。

燃烧室は焚口から分炎柱下端までが約1.12m、床面の幅は分炎柱下端で0.86mとなる。床面傾斜は、焚口から分炎柱下端までやや下る。左側壁は、残存する壁が床面から最大0.63mの高さまでみられ、そ

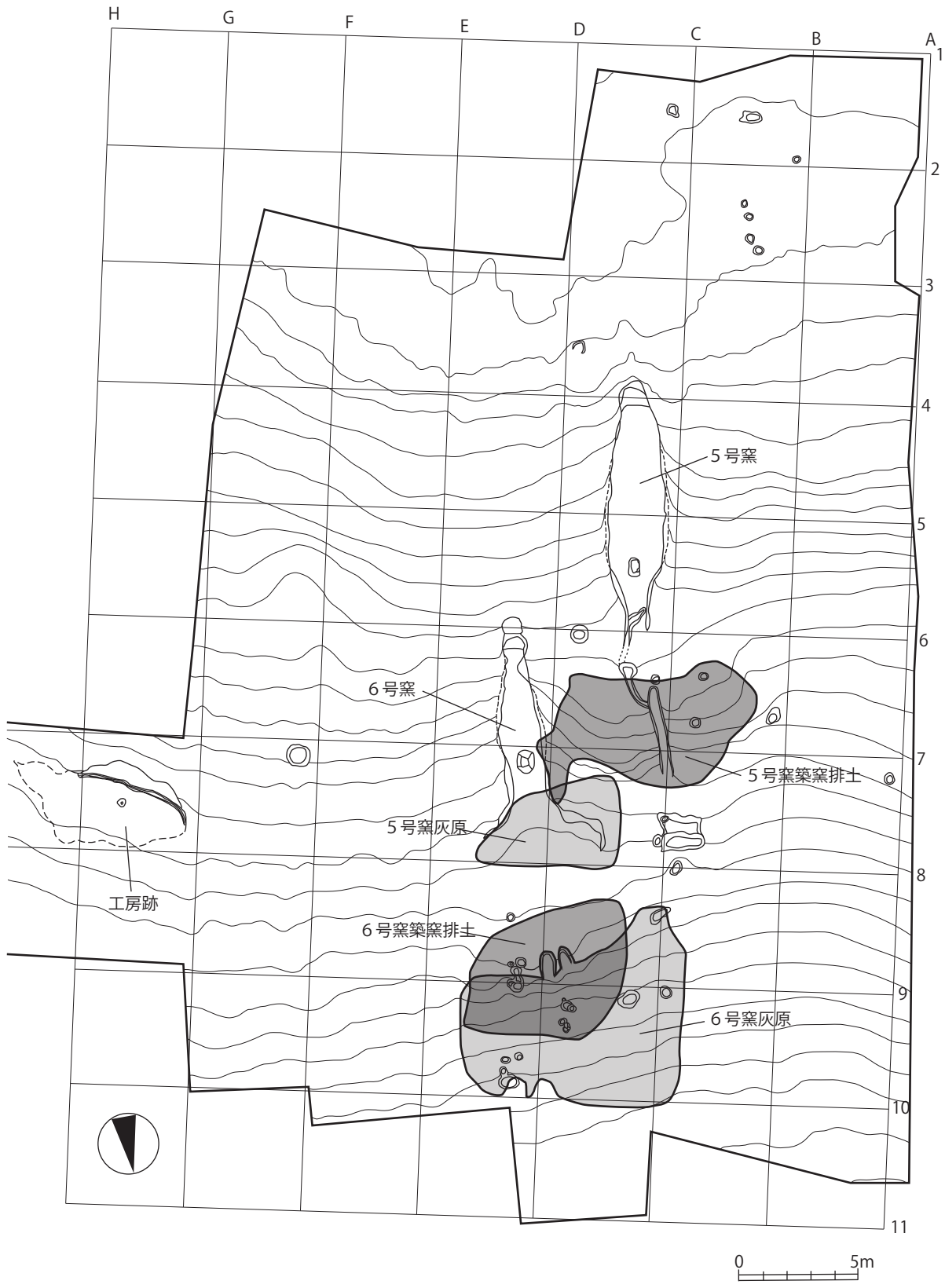


图2 永田5・6号窯跡遺構配置図

の上に赤色の被熱部分が0.75m前後の高さで残存、その上方では地山が露出する。右側壁は、残存する壁が床面から最大0.38mの高さまでみられ、その上に赤色の被熱部分が0.72m前後の高さで残存、その上には地山が露出する。また、焚口付近には排水溝が確認される。

分炎柱は、基底部で長径1.12m、短径0.62mの長円形を呈し、0.52mの高さで残存する。

焼成室は、分炎柱上端から煙道部との境まで約6.42mである。床面の幅は、分炎柱上端で2.42m、そこから0.84m上方で最大幅2.6mに達する。分炎柱上端から5.94m上方まで緩やかに、そこからは急激に狭まり、煙道部との境で最小幅0.88mに至る。床面傾斜は、分炎柱上端から1.14m地点まで約12°、そこから煙道部まで約27°である。左側壁は、残存する壁が床面から最大0.98mの高さまでみられ、分炎柱上端から3.0mの地点までは良好に残存する。赤色の被熱部分は最大で約1.2mの高さで残存、その上方では地山が露出する。右側壁は、残存する壁が床面から最大1.1mの高さまでみられ、分炎柱上端から3.0mの地点までは良好に残存する。赤色の被熱部分は最大1.22mの高さで残存し、その上には地山が露出する。



写真1 永田5・6号窯跡全景

焼成室と煙道部の境にダンパーの痕跡は確認されておらず、床面傾斜も焼成室と煙道部で変化はみられないが、上記のようにこの地点で床面の幅が最小となり、焼成室と煙道部の境が明瞭な平面形となる。

煙道部は焼成室との境から約1.10mである。床面傾斜は、焼成室との境から0.63mの地点まで約35°、そこから先は約51°となる。

また、断ち割り調査を行った結果、暗灰色ないし灰白色の床面は、焼成室中央付近まで残存しその直下に暗橙色土の被熱面が全体に認められた。焼成室から煙道部にかけては床面が剥離し被熱面が露出しており、焼成室全体の床面及び被熱面直上には焼土が薄く堆積する。焚口付近と、分炎柱上端から0.3mから1.15mの地点には炭層が検出される。分炎柱及びその周辺には改修痕が確認されたが、床面・窯壁の改修は認められなかった。分炎柱中心部の高さ約0.15mから0.3mの部分と、周囲の高さ約0.6mの部分に硬化面が認められ、中心部の高さ0.3mから0.6mの部分には赤白色に被熱した充填土が確認される。また、分炎柱の直下には青紫色の粘土ブロックが、分炎柱上端から約2.0mの床面には被熱粘土ブロックが検出された。

5号窯窯内埋土を含むC5-D5セクション(図5)は、最上層から①表土②礫を含む明黄褐色土③礫を含む茶灰色土④礫を含む黄茶灰色土⑤淡黄茶灰色土⑥明茶褐色土⑦暗橙色土⑧3~6cm大の礫を含む黄茶灰色土⑨10cm大の礫を含む黄白色土⑩3cm~6cm大の礫を含む黄白色土⑪3cm~6cm大の礫を含む脆い明橙褐色土⑫3~6cm大の礫を含む明橙褐色土⑬大量の遺物・焼土・窯壁を含む橙色土混じりの黄白色土⑭焼土層⑮炭層の計15層が確認される。⑤~⑦層は窯の天井・窯壁崩壊後の流入土、

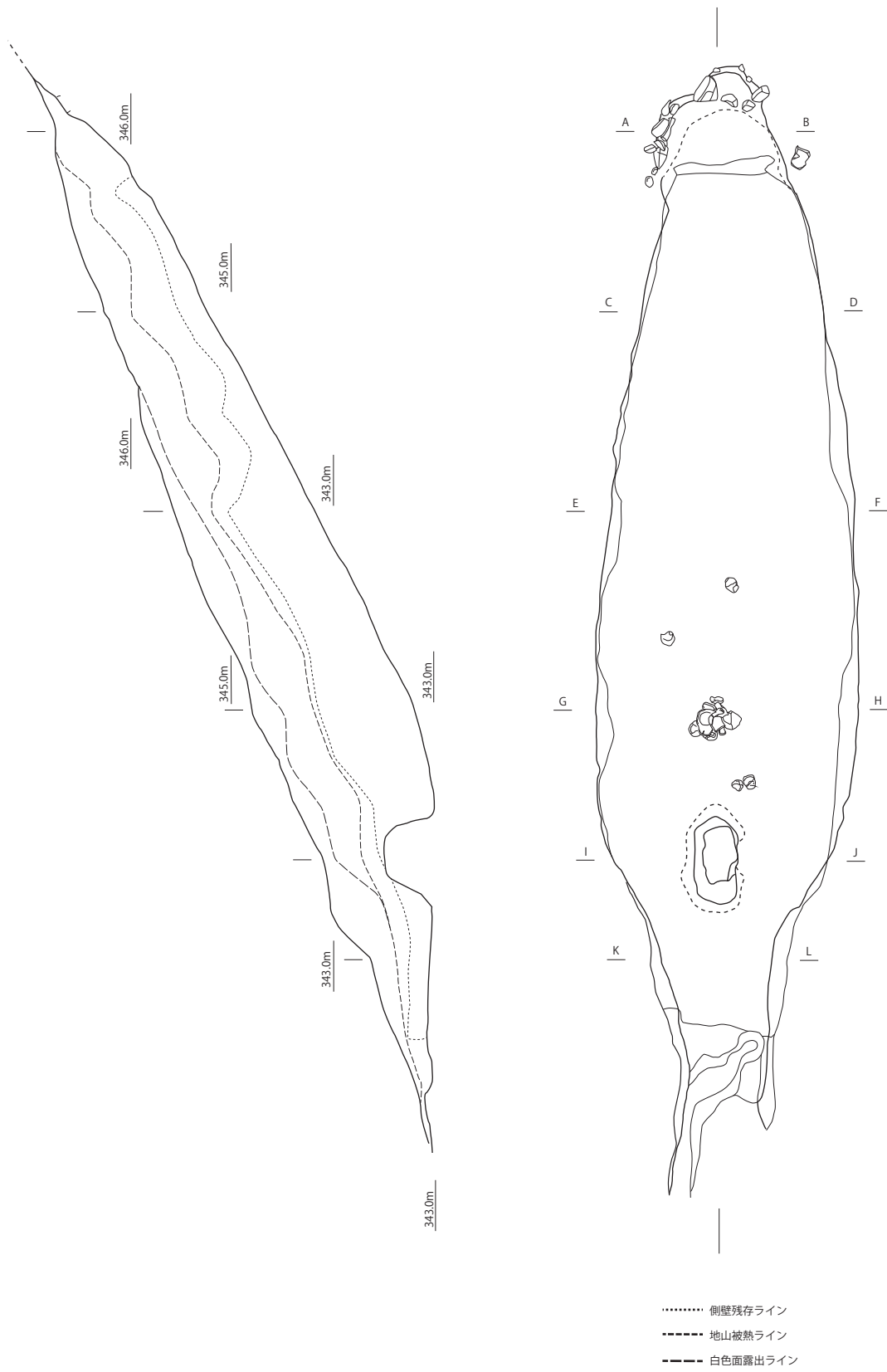
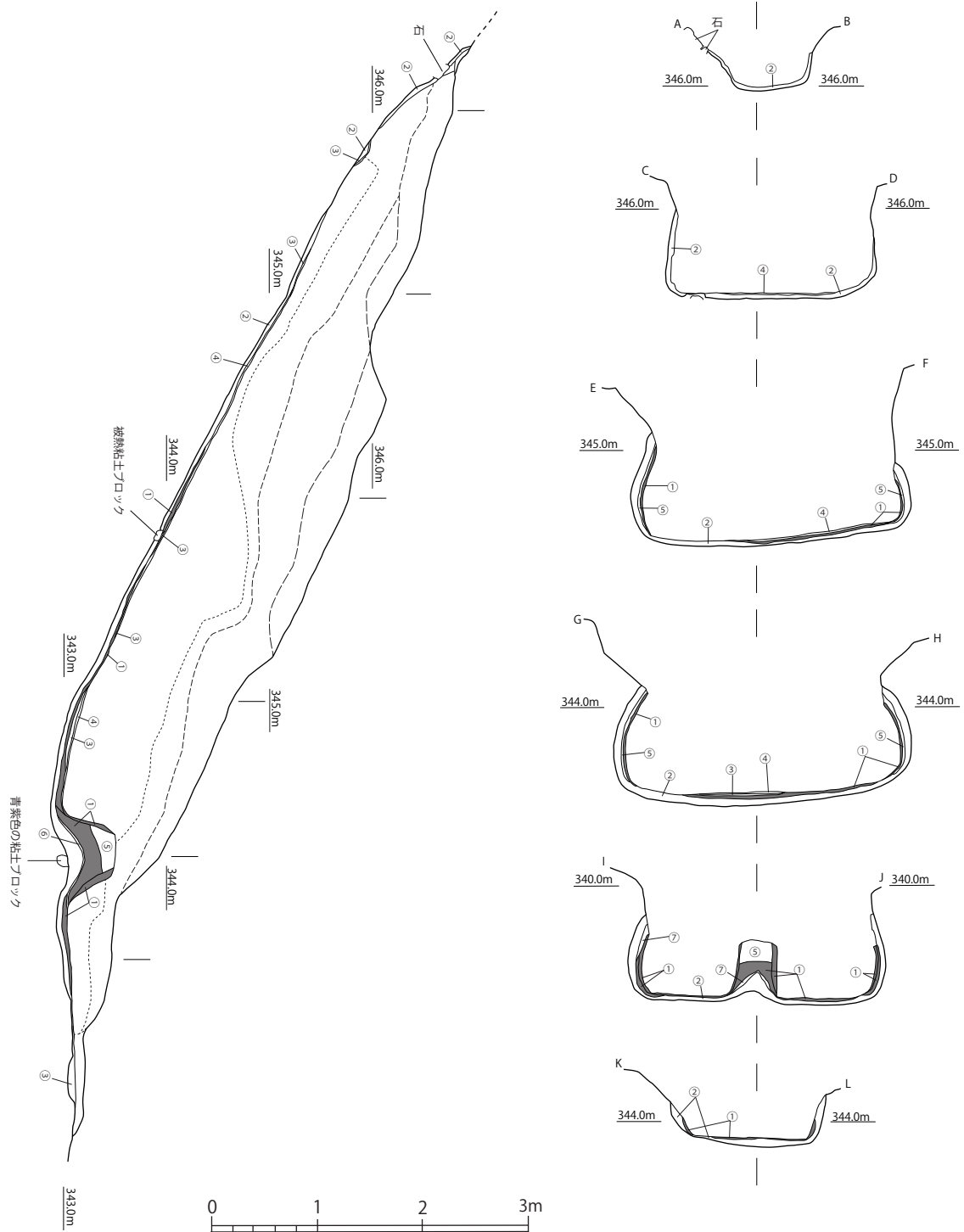


図3 永田5号窯窯体実測図(1)



- | | |
|------------|---|
| ①暗灰色・灰白色土 | 窯壁・床面。側壁は径0.1~0.2cmの長石粒等の角礫を密に含む。礫は最大で0.5cm程度。1.0~6.0cmの円礫も若干認められる。床は1.0~6.0cmの円礫をまばらに含む。 |
| ②暗橙色土(被熱層) | 地山。 |
| ③炭層 | |
| ④橙色土 | 焼土。 |
| ⑤赤白色土 | 砂質。岩盤に近い堅さ。0.5cm前後の小石を大量に含む。 |
| ⑤' 赤白色土 | ⑤層と同質だが小石を含まず黄味・茶味を帯びる。 |
| ⑥黄色土 | 砂質。 |

図4 永田5号窯窯体実測図(2)

⑨～⑫層は天井・窯壁の崩壊部、⑬層は天井・窯壁崩壊以前の堆積層と考えられる。また、左右の窯壁は床面から60cm程度の高さまで残存し、外側には被熱部分である赤白色砂質土や暗橙色土が検出される。

(2) 6号窯の状況

(図6・図7・写真3)

6号窯は地下式の窖窯で、燃烧室と焼成室の境には分炎柱が設けられる。全長約8.5m、最大幅1.94m、焼成室床面中央の傾斜角約34°で、焼成室の床面積は6.7㎡、焚口と煙道部の高低差は4.18m、主軸方位はN 9°E、焚口の幅は約1.72mである。

燃烧室は焚口から分炎柱下端までが約1.34mである。床面幅は焚口で1.72m、そこから0.32m上方で1.36mに狭まり、分炎柱下端で1.42mとほぼ一定の幅となる。床面は分炎柱下端までほぼ水平である。左側壁は、残存する壁が床面から最大約0.7mの高さまでみられ、その上に赤色の被熱部分が0.8m前後の高さで残存、その上方では地山が露出する。右側壁は、残存する壁が床面から最大約0.55mの高さまでみられ、その上に赤色の被熱部分が0.80m前後の高さで残存、その上には地山が露出する。

分炎柱は、基底部の長径が0.96m、短径が0.74mのやや長円形を呈し、約0.2mの高さで残存する。

焼成室は、分炎柱上端から煙道部との境まで約4.2mである。床面の幅は、分炎柱上端で1.79m、分炎柱上端から0.66m上方で最大幅1.94mに達する。そこから徐々に狭まり、煙道部との境で最小幅0.84mとなる。床面傾斜は、分炎柱上端から約0.36mの地点までは約8°と緩やかであるが、そこから煙道部にかけて約34°と急激に傾斜する。

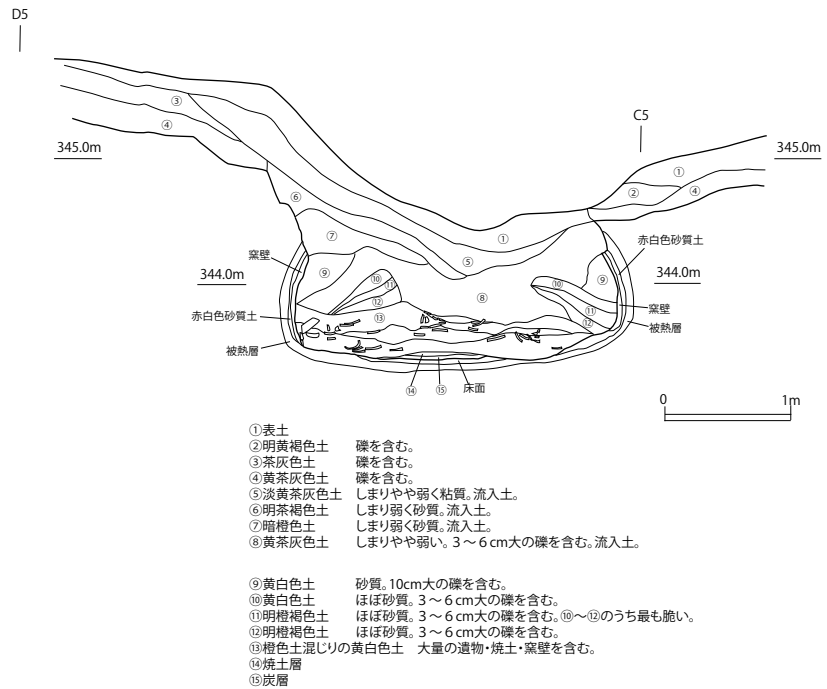


図5 C5-D5ライン土層断面図



写真2 永田5号窯全景

左側壁は、残存する壁が床面から最大0.86mの高さまでみられる。赤色の被熱部分は最大で約0.93mの高さで残存、その上方では地山が露出する。右側壁は、残存する壁が床面から最大0.74mの高さまでみられ、分炎柱上端から約3.3mの地点まで良好に残存する。赤色の被熱部分は0.88mの高さで残存、その上には地山が露出する。

焼成室と煙道部の境にはダンパーの痕跡が認められ、床面傾斜の変換点となる。床面はあまり焼き締まっておらず、焼台に似た円形のブロック及びその痕跡が横一列に等間隔で配されているが、木芯の痕跡などは確認されていない。

煙道部は、焼成室との境から約2.0mで、そこから上方0.24mまでは20～25°と緩傾斜となり、さらに0.24mから0.6mまでは約68°、それ以降は約33°と再び緩傾斜となる。

また、断ち割り調査を行った結果、分炎柱上端から1.65～3.1m地点にかけての焼成室床面と、分炎柱の南側及びその周辺の左側壁において1～2度の改修が行われた痕跡が確認される。一次床面は、分炎柱上端から1.6mから煙道部付近までの地点に残存し、分炎柱上端から0.35mまでと、2.3mから3.1mまでの範囲では改修後の二次床面が検出される。分炎柱周辺の二次床面と一次床面の間には黄色土が、焼成室の二次床面と一次床面の間には黄色土と炭層が堆積している。分炎柱上端から3.8mの地点にかけての焼成室一次床面直下には、暗青灰色土と黄色土の混合層が堆積し、燃焼室から煙道部にかけての最下層には暗赤色の被熱層が検出される。また、焼成室と煙道部の境周辺には炭層が堆積する。なお、分炎柱上端付近の左側壁には窯壁の芯材の痕が検出される。

焼成室には多数の焼台が原位置を留めており、これらは二次床面の上層で焼成室全体に広がるしまりの強い黄茶灰色土の面上に配置されていた。この層の下層には、一次床面と二次床面の間に堆積するものと同様の炭層と、粘質で焼土・炭粒混じりの暗茶橙色土が堆積し、その下層に二次床面が確認される。焼台が設置される黄茶灰色土を最終の三次床面と捉えるならば、永田6号窯は二度にわたって改修が行われたと考えられる。

6号窯窯内埋土を含むD7-E7セクション(図8)は、最上層から①礫を含む明茶褐色土②礫を含む淡黄茶色土③明黄茶色土④多量の礫を含む淡茶褐色土⑤淡黄茶色土⑥暗茶褐色土⑦淡黄茶色土(⑤層よりやや淡い)⑧黄灰色土⑨濃黄茶色土⑩暗茶褐色土(⑥層よりやや明るい)⑪明茶褐色土⑫淡明茶褐色土⑬明黄茶色土⑭淡茶褐色土⑮0.5～3cm大の礫を含む明黄白色土⑯明黄茶褐色土⑰暗黄灰色土⑱淡黄灰色土⑲暗茶褐色土(⑥⑩層より淡い)⑳黄茶灰色土㉑暗橙色土㉒明黄茶色土㉓2～5cm大の礫を含む黄褐色土㉔淡茶褐色土㉕礫を含む黄灰色土㉖淡黄茶色土㉗明黄灰色土



写真3 永田6号窯全景

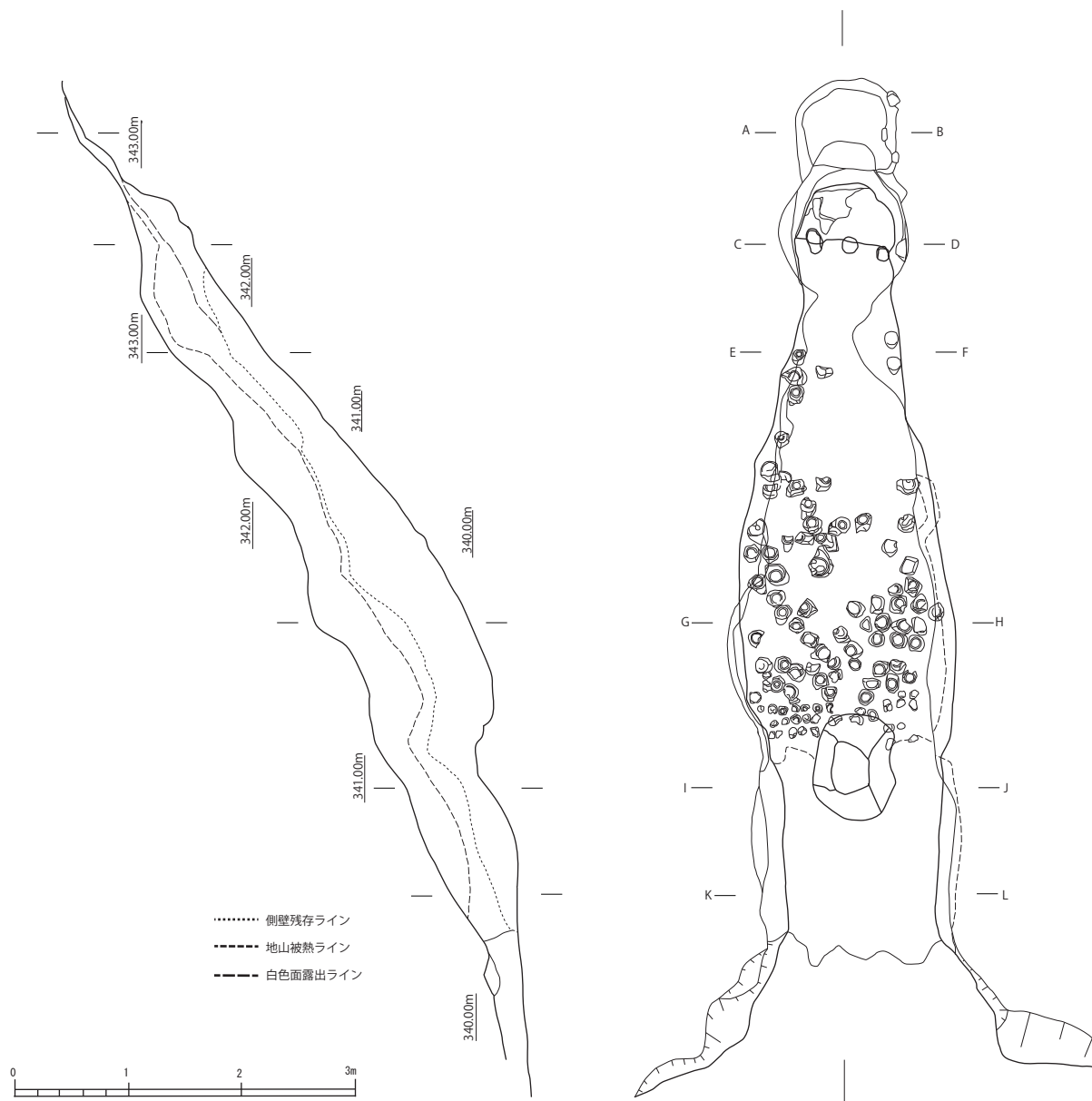


図6 永田6号窯窯体実測図(1)

⑳暗橙色土(㉑層より暗い)㉒焼土を含む明黄茶色土㉓暗黄橙色土㉔暗橙色土(㉕層より淡い)㉖炭層の計32層が確認される。⑧層は5号窯堀抜排土、⑮層は左側壁の崩落層、㉑層は右側壁被熱部分の崩落層、㉕層は天井被熱部分の崩落層と考えられ、天井(㉕層)が落下した直後に㉒㉓㉔㉖㉗㉘㉙㉚層が堆積し、その後㉛㉜層が堆積あるいは流入、さらに㉝～㉞・㉟～㊱層が堆積し、最後に㊲～㊳・㊴層が堆積したものと考えられる。

(3) 工房跡の状況(図9・図10・写真4・写真5)

6号窯の東方約14mの地点に工房跡と思われる、幅約7.5m×奥行約3.5mの平坦面が確認された。また、斜面上方側の際には全長4.4m、幅0.1～0.18m、深さ0.35m前後の排水溝、平坦面の中央付近ではロクロピット、東側では東西約3.1m×南北約1.4mの範囲で最大8cmの厚さで堆積する白色粘土面が検出されるが、攪乱を受け粘土が検出されない部分もみられる。

ロクロピットの内部及び周辺には工房跡東側で検出された粘土と同質の白色粘土が検出されている。

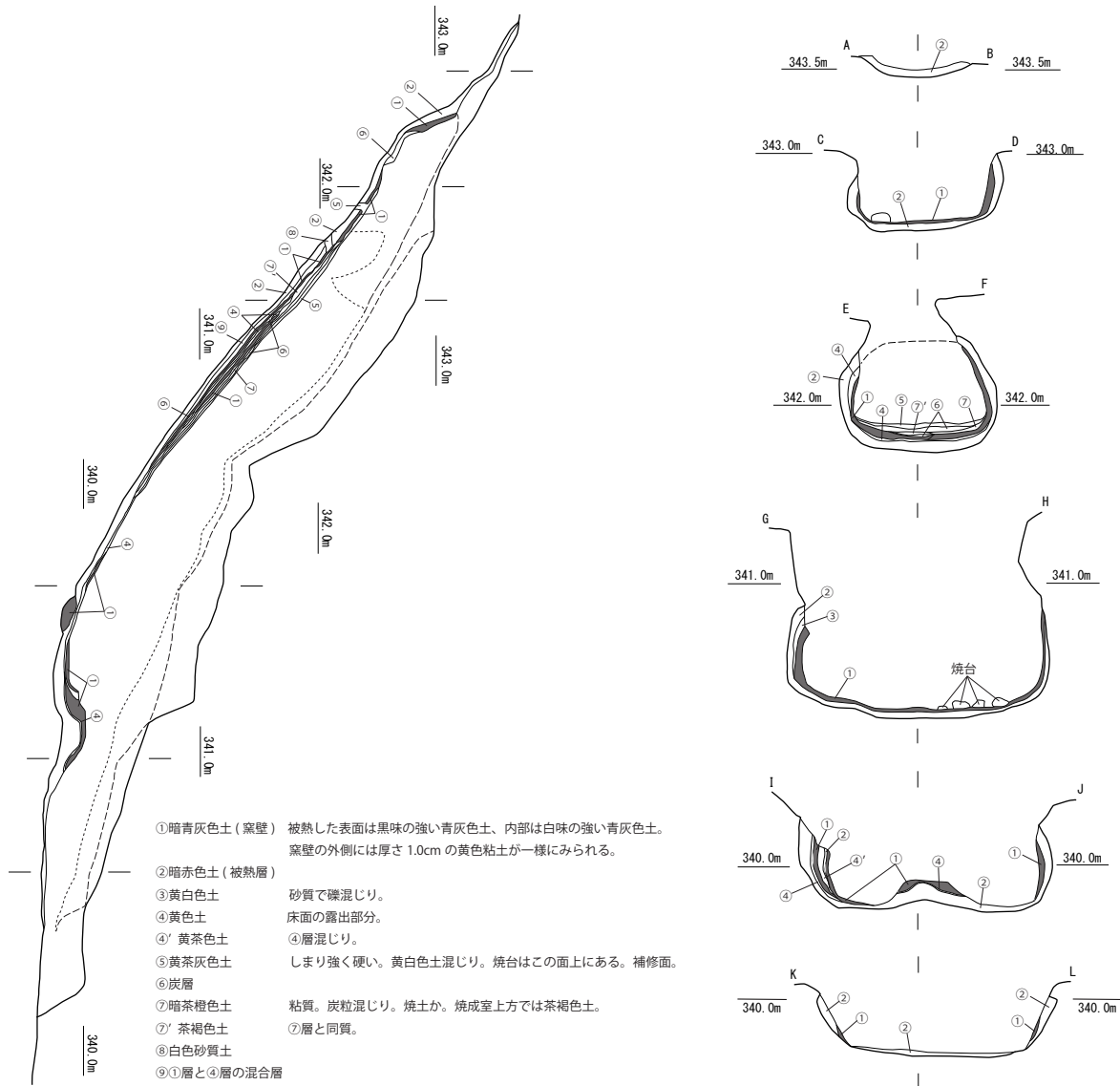


図7 永田6号窯窯体実測図（2）

ロクロピットは上段が直径約35cmの円形、下段が直径12.5cmの歪な形状をしており、下場は直径約10cmである。深さは上段が約12cm、下段が約28cmで、底部の白色粘土を完掘した状態では約32cmとなった。また、下段のピット直上には縦15cm×横8cm×厚さ3cmの礫が、その上には山茶碗（A類）が被せられた状態で検出され、その後黄茶灰色土が堆積したものである。

（4）灰原の状況

①C6-E6ライン（図11）

E6セクションポイントから西に3.1～4.04mの地点に6号窯煙道、C6セクションポイントから東に1.55～1.81m地点に5号窯排水溝が存在する。最上層から①表土②0.5～1cm大の礫をまばらに含む淡黄茶灰色土③5cm大の礫をまばらに含む暗橙色土④暗橙色土⑤地山・礫が多く混じる焼土（ブロック状に検出）⑥6号窯煙道床面⑦黒色土の計7層が確認される。④層は③層の再堆積土と考えられ、⑦層は5号窯の排水溝埋土である。

④ C8-E8ライン (図12)

最上層から①表土②遺物 (山茶碗)・炭化粒子・0.2~0.3cm 大の砂粒を少量含む黄茶灰色土③地山 (暗橙色土) ④0.2~0.8cm 大の砂粒を多く含む暗黄茶灰色土⑤遺物・多量の礫を含む明黄茶灰色土⑥遺物を含む暗黄茶灰色土 (④層と同じ色調) の計6層が確認される。

② C9-E9ライン (図13)

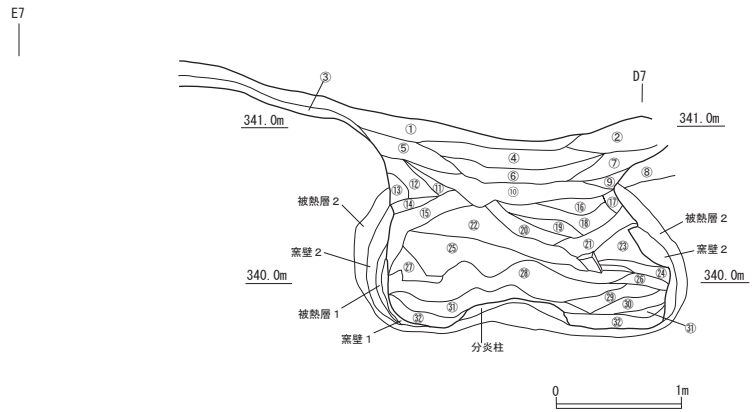
D9セクションポイントから東に0.5~1.22m 地点にピットが検出される。最上層から①表土②少量の小礫を含む暗茶灰色土③遺物・礫を含む淡茶灰色土④遺物を多く含む黒色土⑤小礫を多く含む明黄灰色土⑥黄色土粒子を多く含む暗灰褐色土⑦小礫を多く含む焼土が混入する赤褐色土⑧黒褐色土⑨地山 (暗橙色土) の計8層が確認される。④層は6号窯灰層と考えられ、⑤層は6号窯の築窯排土で前庭部の床面を形成する。⑧層はピット埋土である。

③ C6-C9ライン堆積埋土 (図14)

C6のセクションポイントから北に1.93~2.22mの地点に直径25cm × 深さ20cmのピットが検出されている。最上層から①淡黄灰色土②①淡黄茶灰色土 (①層よりやや暗い) ③淡黄茶灰色土 (②層より淡い) ③' 淡黄茶灰色土 (③層によく似ているがやや淡い) ④黄茶灰色土⑤茶灰色土⑥5cm 大の礫を含む暗橙色土混じりの黄白色土⑦5cm 大の礫・被熱ブロック・4cm 大の炭化物を含む暗茶灰色土 (黒色砂質土) ⑧黄白色土粒子を含む淡黄茶灰色土⑨暗橙色土⑩5cm 大の礫・少量の黄白色土粒子を含む暗橙色土⑪黄白色土 (④層と同様) ⑫少量の黄白色土粒子を含む暗橙色土⑬遺物 (山茶碗) を含む暗橙色土⑭3cm 大の焼土ブロック・1cm 大の礫をまばらに含む暗茶灰色土 (⑦層より暗い) ⑮3cm 大の礫を含む暗茶灰色土 (⑦層より淡い) ⑯黄白色土⑰2cm 大の焼土ブロックを含む黄茶灰色土⑱遺物・5cm 大の焼土ブロック (青灰色)・被熱土粒子をまばらに含む暗茶灰色土⑲大量の遺物・10cm 大の被熱ブロック (青灰色) を含む暗灰色土⑳遺物を大量に含む暗配色土の計20層が確認される。⑦層は5号窯の灰層及び排水溝埋土、⑧・⑭・⑮層は排水溝埋土、⑨・⑯層は5号窯の築窯排土、⑩~⑫層はピット埋土、⑰~⑲層は6号窯の灰層と考えられる。

④ D7-D10ライン (図15)

最上層から①表土②礫を含む暗黄灰色土③黄灰色土④焼成不良の遺物を含む暗茶灰色土⑤礫を含む暗黄灰色土⑥暗茶灰色土⑦茶灰色土⑧焼土 (暗緑灰色) を含む暗黄茶褐色土⑨暗黄茶灰色土⑩焼土を含む暗黄茶褐色土⑪焼土を含む灰層⑫焼土層⑬焼成不良の遺物を含む暗黄灰色土⑭暗橙茶灰色土⑮遺物・小礫



- | | | | |
|---------|-----------------|---------|----------------------------|
| ①明茶褐色土 | しまりやや強く粘質。礫を含む。 | ⑬淡黄灰色土 | しまりやや弱く粘質。 |
| ②淡黄茶褐色土 | しまり強くやや粘質。 | ⑭暗茶褐色土 | ⑥⑩層より淡い。粘質。 |
| ③明黄茶褐色土 | しまり強い。多量の礫を含む。 | ⑮黄茶灰色土 | しまり強い。 |
| ④淡茶褐色土 | ⑦層よりやや暗い。 | ⑯暗橙色土 | しまりやや弱い。⑳層より淡い。 |
| ⑤淡黄茶褐色土 | しまりやや強い。 | ⑰明黄茶褐色土 | 右側壁被熱部分崩落層。 |
| ⑥暗茶褐色土 | ⑤層よりやや淡い。 | ⑱黄褐色土 | しまりかなり弱く砂質。 |
| ⑦淡黄茶褐色土 | 5号窯掘抜排土。 | ⑲黄褐色土 | しまり弱く砂質。2~5cm大の礫を含む。 |
| ⑧黄灰色土 | しまりかなり強く粘質。 | ⑳淡茶褐色土 | しまり弱く砂質。 |
| ⑨濃黄茶褐色土 | ⑥層よりやや明るい。 | ㉑黄灰色土 | しまりやや弱い。礫を含む。 |
| ⑩暗茶褐色土 | しまりやや強くやや粘質。 | ㉒淡黄茶褐色土 | 砂質。 |
| ⑪明茶褐色土 | しまりやや強く粘質。 | ㉓明黄灰色土 | しまり弱く粘質。 |
| ⑫淡明茶褐色土 | しまり強く粘質。 | ㉔暗橙色土 | しまり強い。暗橙色の焼土の中に白色の焼土も含まれる。 |
| ⑬明黄茶褐色土 | やや粘質。 | ㉕暗茶褐色土 | ②層より暗い。天井被熱部分崩落層。 |
| ⑭淡茶褐色土 | 0.5~3cm大の礫を含む。 | ㉖明黄茶褐色土 | 砂質。焼土を含む。 |
| ⑮黄白色土 | 左側壁崩落層。 | ㉗暗黄褐色土 | しまり弱く砂質。 |
| ⑯明黄茶褐色土 | 粘質。 | ㉘暗橙色土 | ⑳層より淡い。 |
| ⑰暗黄灰色土 | しまり弱く粘質。 | ㉙炭層 | |

図8 D7-E7ライン土層断面図



図9 工房跡平面図・断面図



写真4 ロクロピット出土状況図

を多く含む淡茶灰色土⑯黄灰色土
 ⑰大量の遺物と3～4cm大の礫
 を含む暗灰色土⑱遺物を多く含む
 黒色土⑲小礫を多く含む黄配色土
 ⑳黄色土粒子を多く含む黄茶褐色
 土㉑遺物を多く含む暗灰褐色土㉒
 遺物を多く含む暗灰色土㉓遺物を
 少量含む明茶褐色土㉔茶褐色土の
 計24層が確認される。④層は5
 号窯の灰層、⑱層は6号窯灰層、
 ⑲層は6号窯の掘抜排土及び前庭
 部造成土と考えられる。

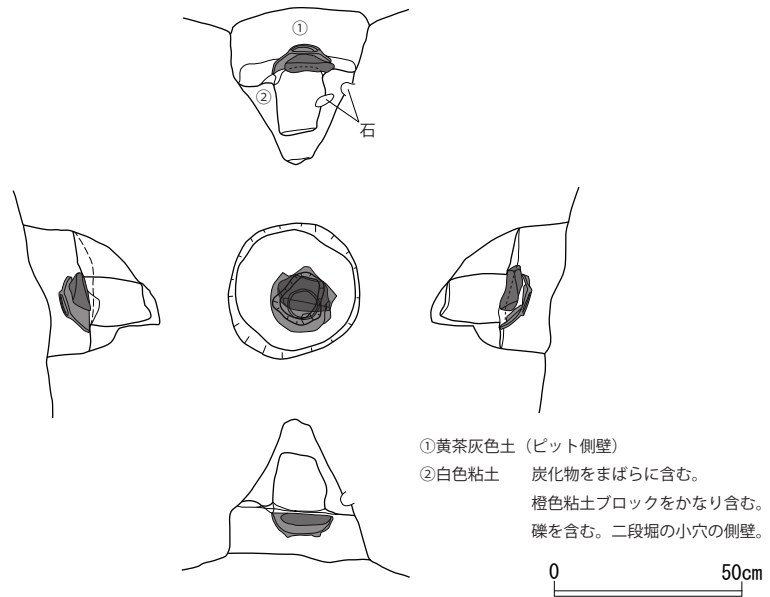


図10 ロクロピット平面・断面図

4. 出土遺物

永田5・6号窯跡で出土した遺物の個体数は、底部が1/2以上残存するものを1個体とすると、山茶碗1,021個体、小碗403個体、小皿51個体、三筋壺系壺類7個体、片口鉢I類12個体、子持器台1個体を数えた。なお、甕・広口壺については底部が1/2以上残存するものと1個体とすると、甕が18個体、広口壺が0個体となり、底部の残存率が低いため、口縁形態から判断して甕が31個体、広口壺が1個体と識別した。

(1) 甕類

①甕 (1～24・40～54)

器高38.1cm、口径22.0～42.4cm、最大胴径37.5～60.0cm、底径16.5～20.0cmである。胴部下方はやや丸みをもって立ち上がり、中央より高い位置で最大径を測る。頸部は外反しながら口縁部へ至る。口縁部が外方に伸び、端部が薄く尖るA類(40～42)、口縁部が外方に伸び、端部が薄く上面に浅い凹みをもつB類(1・5・10～15・22・43・44・47～50)、口縁部はほとんど外方に伸びず、端部が肥厚し上面に溝をもち、L字状に屈曲するものもみられるC類(2～4・6～9・45・46・51～53)の大きく三つに分類される。甕類の出土個体数はA類が3個体、B類が15個体、C類が12個体を数え、窯体のサイズに比してやや少ない印象を受ける。

底部外面には砂粒痕や藁のような繊維状の痕跡がみられるほか、多くの個体の底部外面に下駄印が確認される^(註3)。胴部から頸部にかけての外面にはヘラ掻き上げ痕がみられ、胴部内面には粘土紐輪積み



写真5 工房跡全景 (南から)

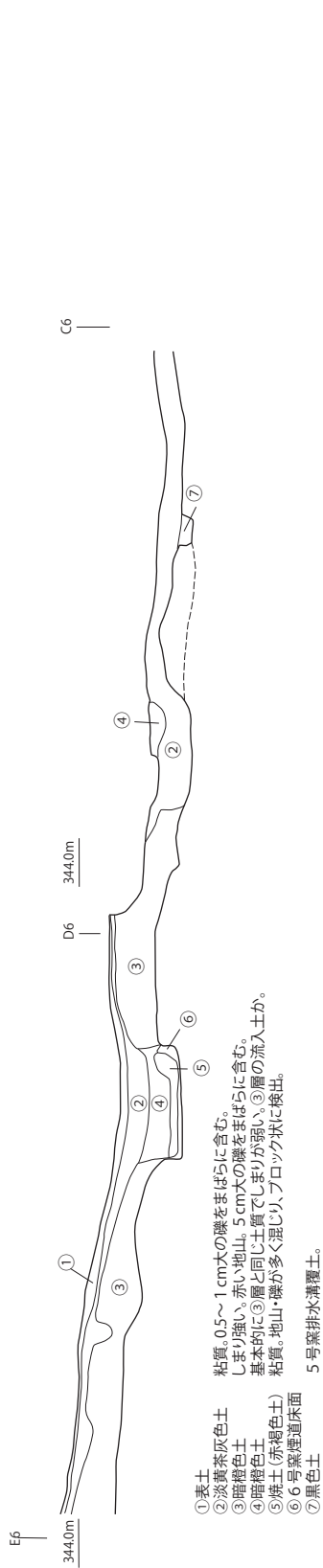


図 11 C6-E6ライン土層断面図

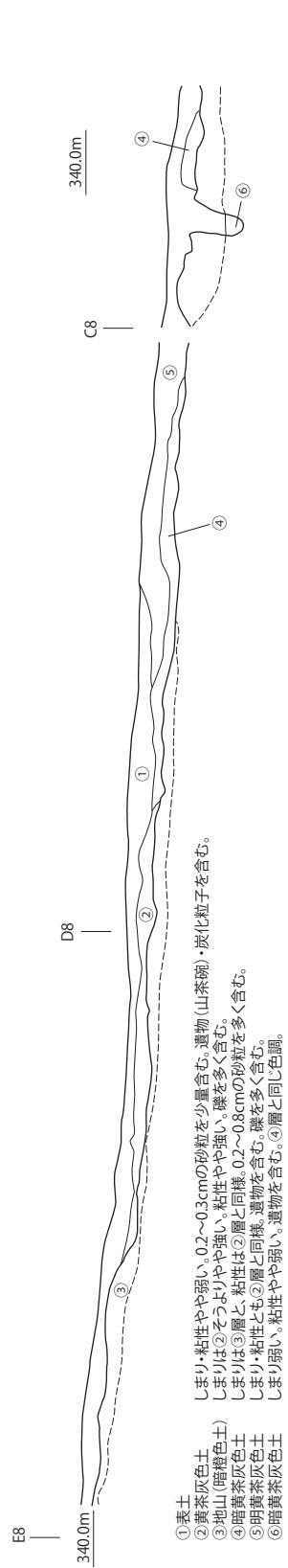


図 12 C8-E8ライン土層断面図

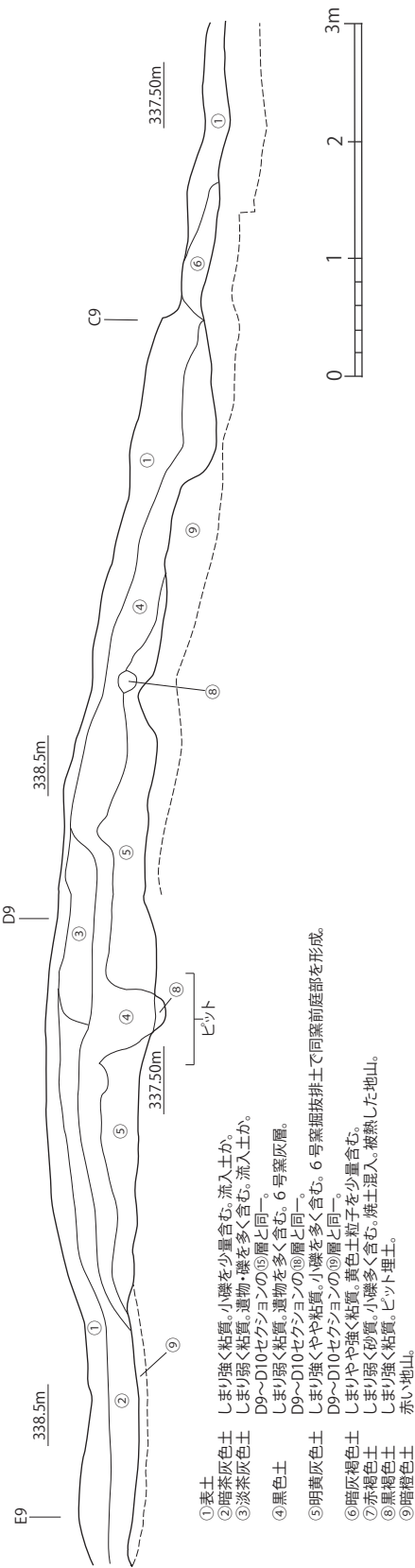


図 13 C9-E9ライン土層断面図

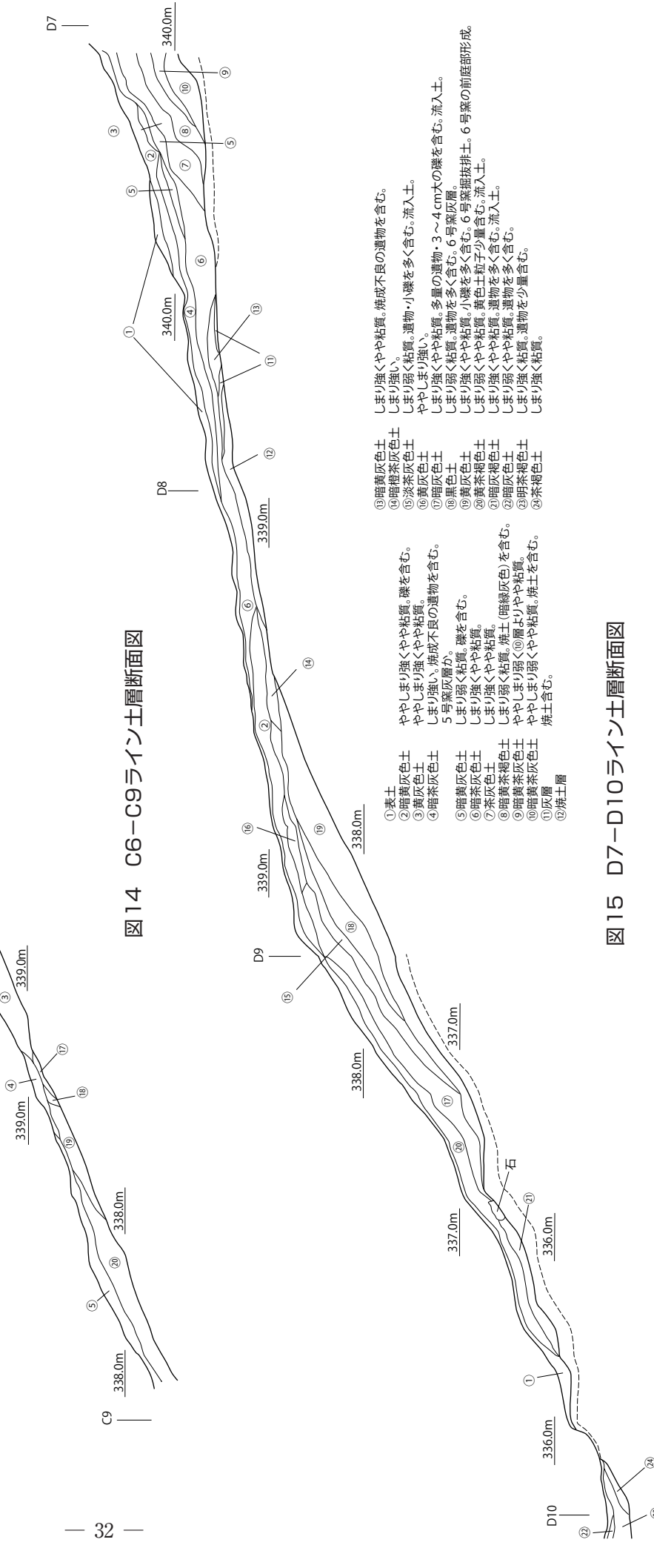
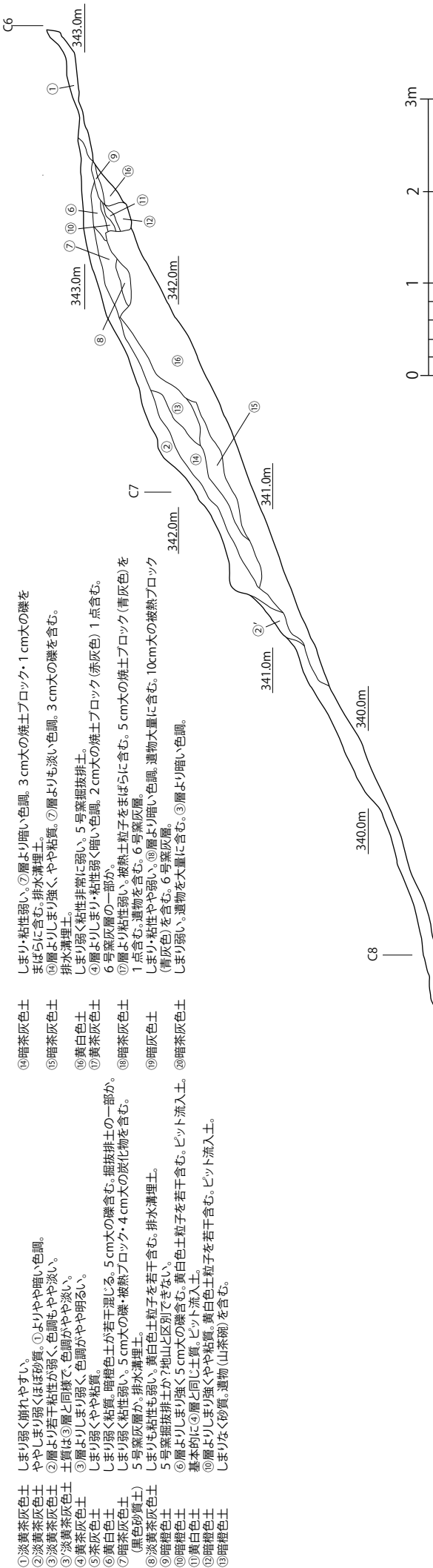


図 14 C6-C9ライン土層断面図

図 15 D7-D10ライン土層断面図

痕や指圧痕が確認される。また、5の頸部内面には縦方向の筋状の痕跡が残る。22～24の胴部内面下方には横方向のヘラナデ調整が施され、16・19・21・24の底部内面には指圧痕や指ナデ痕が確認される。なお、22については、口縁部内面から外面胴部にかけて釉薬が刷毛塗りされ、さらにその上から麻織布が押し当てられた痕跡が認められていると記されている（三宅2010）が、これは釉薬ではなく乾燥段階でヒビが入った部分に泥を塗り込め布で押さえた、補修を目的としたものと考えられ、12・14・20・22にも布目や刺突痕などの焼成前に施された補修痕がみられる。

1～24は焼成不足ないしやや焼成不足で、器表は黄白色や薄茶色を呈し、同色の5.0mm以下の礫や10.0mm以下の黒斑を含む緻密な胎土を使用している。5・38～51は焼成良好あるいは焼成過多で、器表は灰褐色・赤褐色・灰白色・茶褐色・暗灰色を呈し、4.0mm以下の礫や5.0mm以下の長石、3.0mm以下の長石粒吹出し、8.0mm以下の黒斑を含む灰白色の緻密な胎土を使用している。

また、22の胴部外面には帯状の施文が施される。胴部外面中央部・肩部の二段にわたり、下段は連続施文、上段は間隔をあけた施文である。22以外にも凶化に至らなかった胴部片の多数に同様の文様が認められた。いずれも凹部が菱形となる斜格子文で、同一の原体と考えられる^(註4)。

A類はいずれも5号窯灰原出土資料にみられ、B・C類は5号窯窯内・灰原出土資料ともに確認される。

②広口壺(18・25)

18は器高43.7cm、口径24.8cm、最大胴径40.0cm、底径16.4cm、25は口径19.8cmである。全体の調整は甕と同様であるが、明確に頸部を形成するため広口壺とした。また、口縁部は大きく外側に引き出され、端部は外面に面をもち、内面には沈線が巡る。18の底部外面には下駄印が確認され、肩部には甕と同様の文様がみられるが、一周せず1/4ほどの部分に施文され、感覚も不均等である。焼成不足で、器表は黄白色を呈し、2.0mm以下の礫を含む同色の緻密な胎土を使用している。

③三筋壺(26～28)

器高24.1～24.6cm、口径11.3～11.7cm、最大胴径17.5～19.4cm、底径8.8～9.3cmである。三筋文が施されるのは26のみで、27は二筋文、28は無文であるが、三筋壺と同一の形状であるため、ここでは文様の有無に関わらず三筋壺とした。胴部下方から中央にかけては直線的で、上方は丸みをもつ。頸部はほぼ真つすぐ立ち上がるかやや外傾気味である。口縁部は外方へ引き出され、端部は僅かに摘み上げられるが、頸部上端より低い位置におさめられる。26は最大径が小さく、27・28より肩が高い位置にあるためやや細い印象を受ける。

底部外面は未調整で砂粒痕が確認され、胴部外面はヘラ搔き上げが施される。頸部外面から内面にかけてはロクロ目がみられる。胴部内面は横方向のヘラナデ調整が施され、底部との境は強めの指ナデが確認される。底部内面は未調整である。また、26と27の胴部に施される三筋文・二筋文は、単一の沈線でヘラ状工具によって施される。27の二筋文は、沈線の間隔がかなり狭くなっている。26～28はいずれも焼成不足である。

(2) 山茶碗類

①山茶碗(31～33、60～71)

山茶碗は、高台の断面形が明瞭な方形を呈し、口径に対して器高がやや低く扁平な形状となるA類(61・63～66・68・69)、全体の形状はA類と同様であるが、高台の端部が断面隅丸方形となるか基部の幅の広い断面三角形を呈するB類(62・70・71)、高台が基部の幅の狭い断面三角形を呈し、口径に対して器高が高く深い形状となるC類(31～33)、高台をもたないD類(60)の四つに分類可能である。

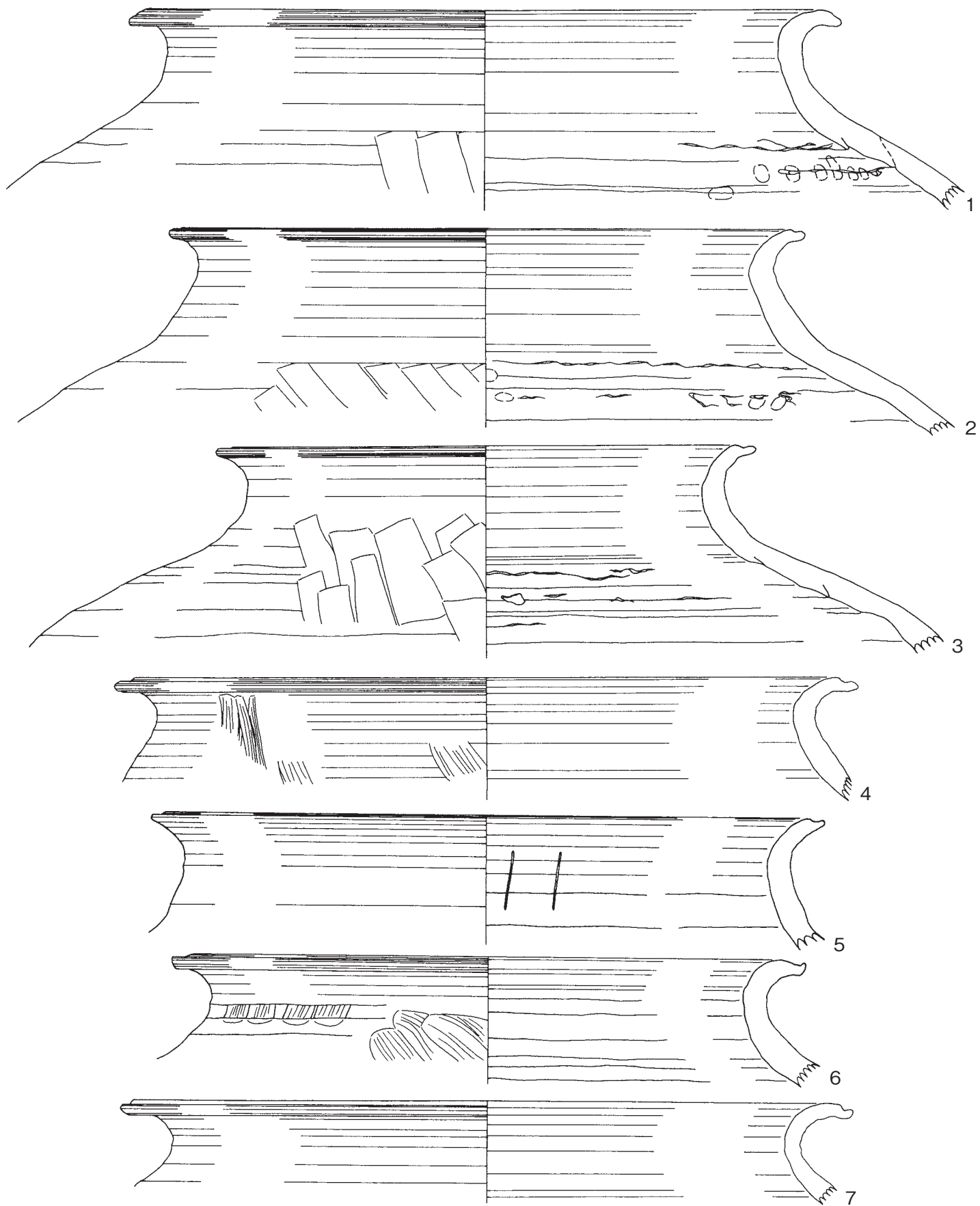


图16 永田5・6号窯出土遺物実測図(1)

全て5号窯内出土

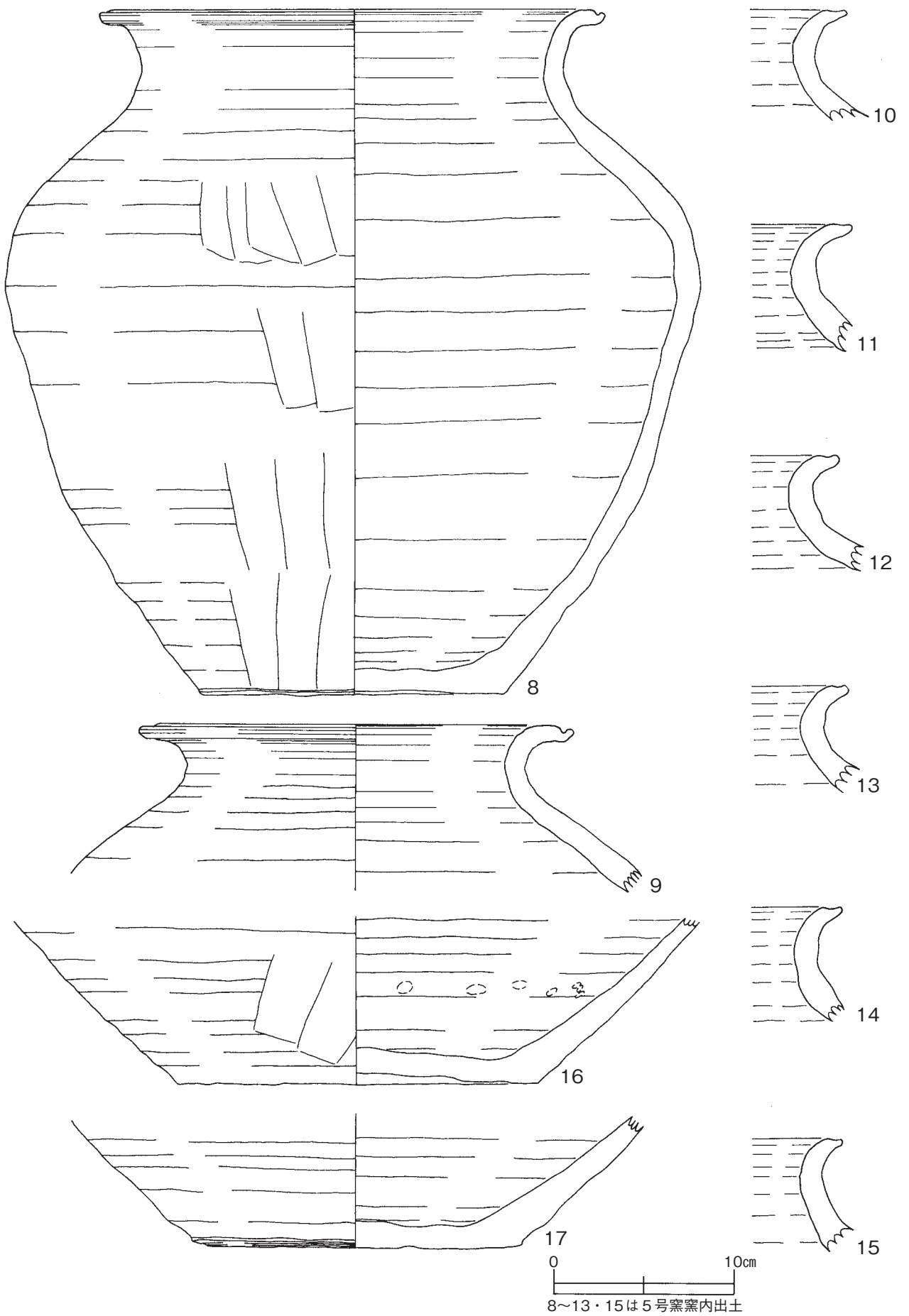
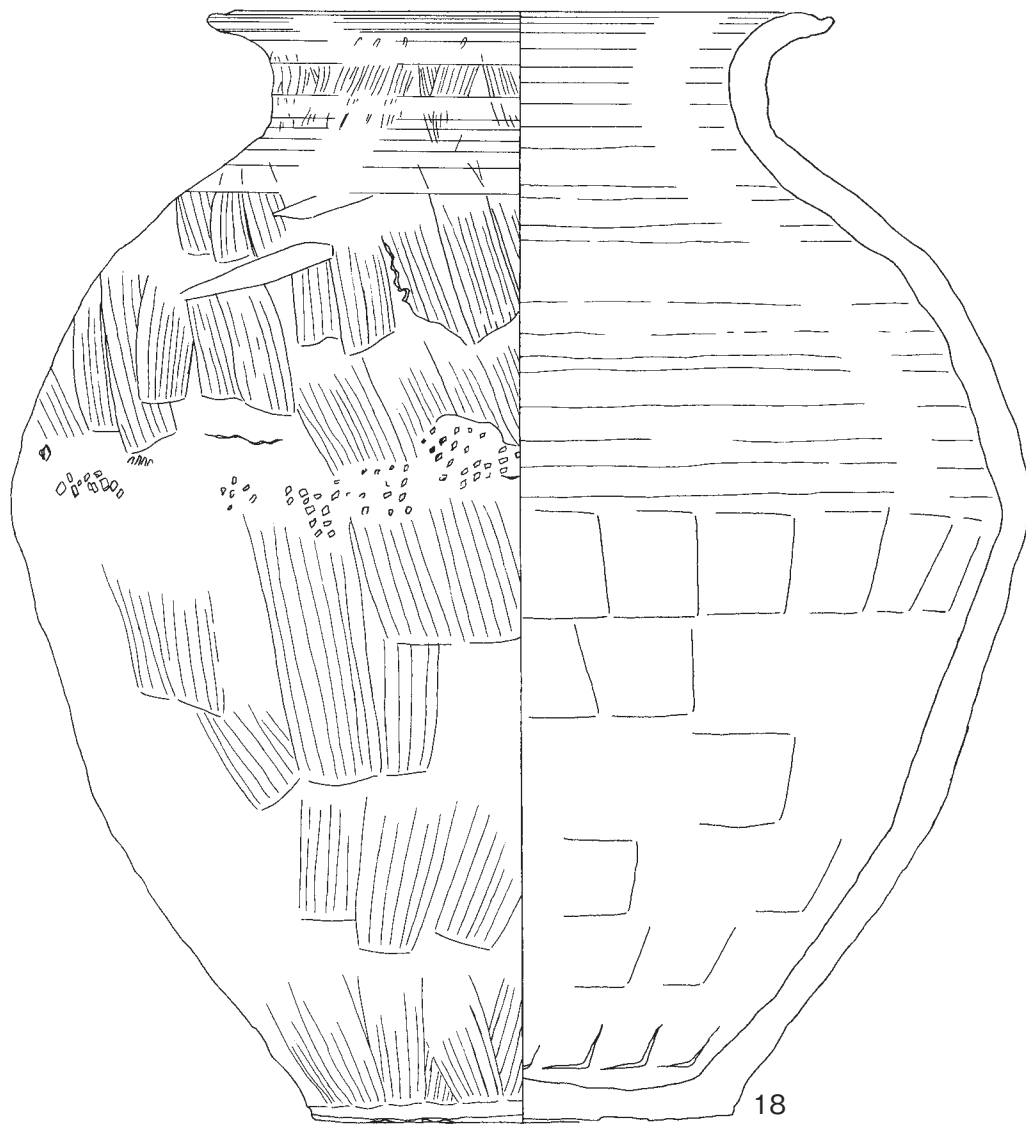
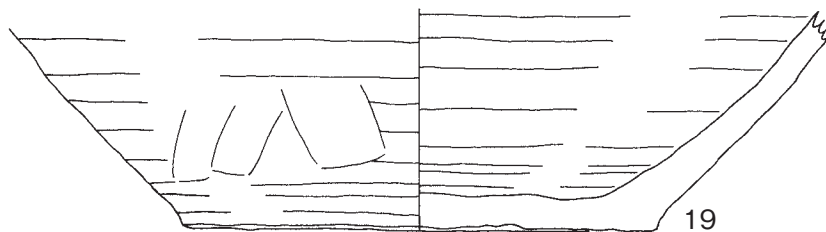


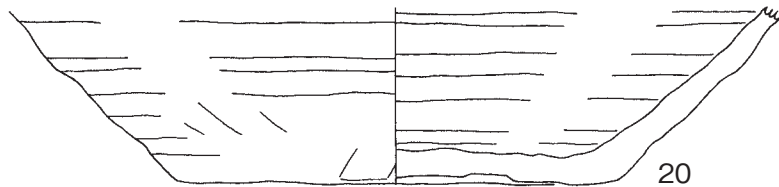
图17 永田5・6号窯出土遺物実測図(2)



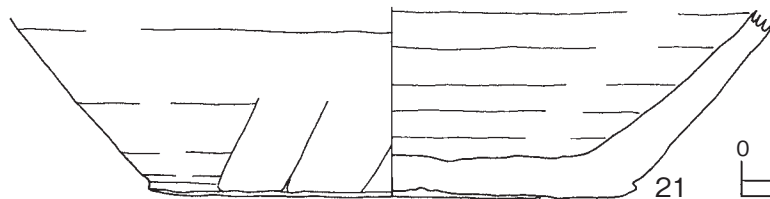
18



19



20



21

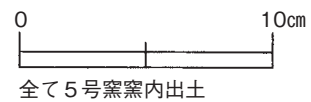


図18 永田5・6号窯出土遺物実測図(3)

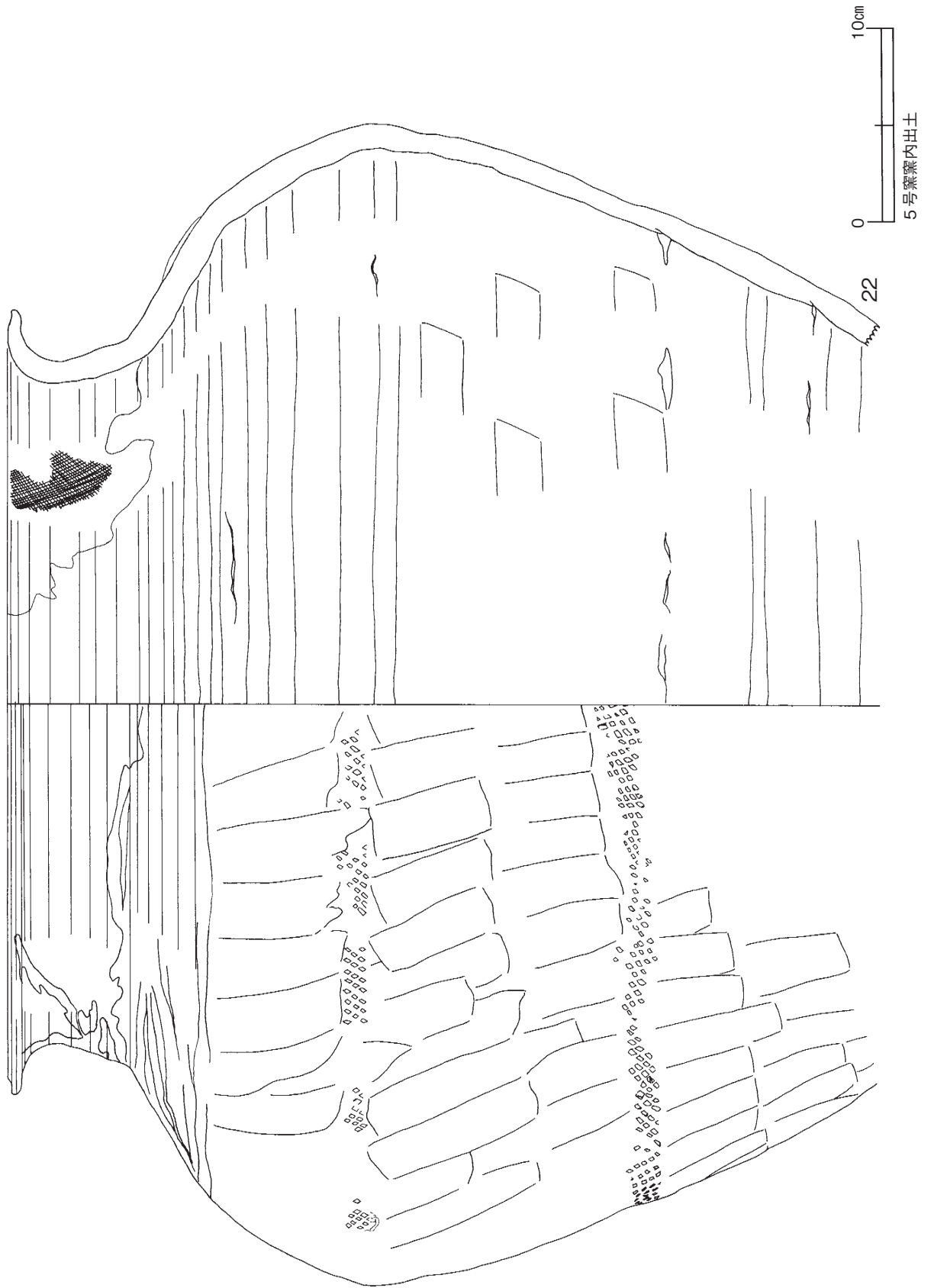


图19 永田5·6号窯出土遺物実測図(4)

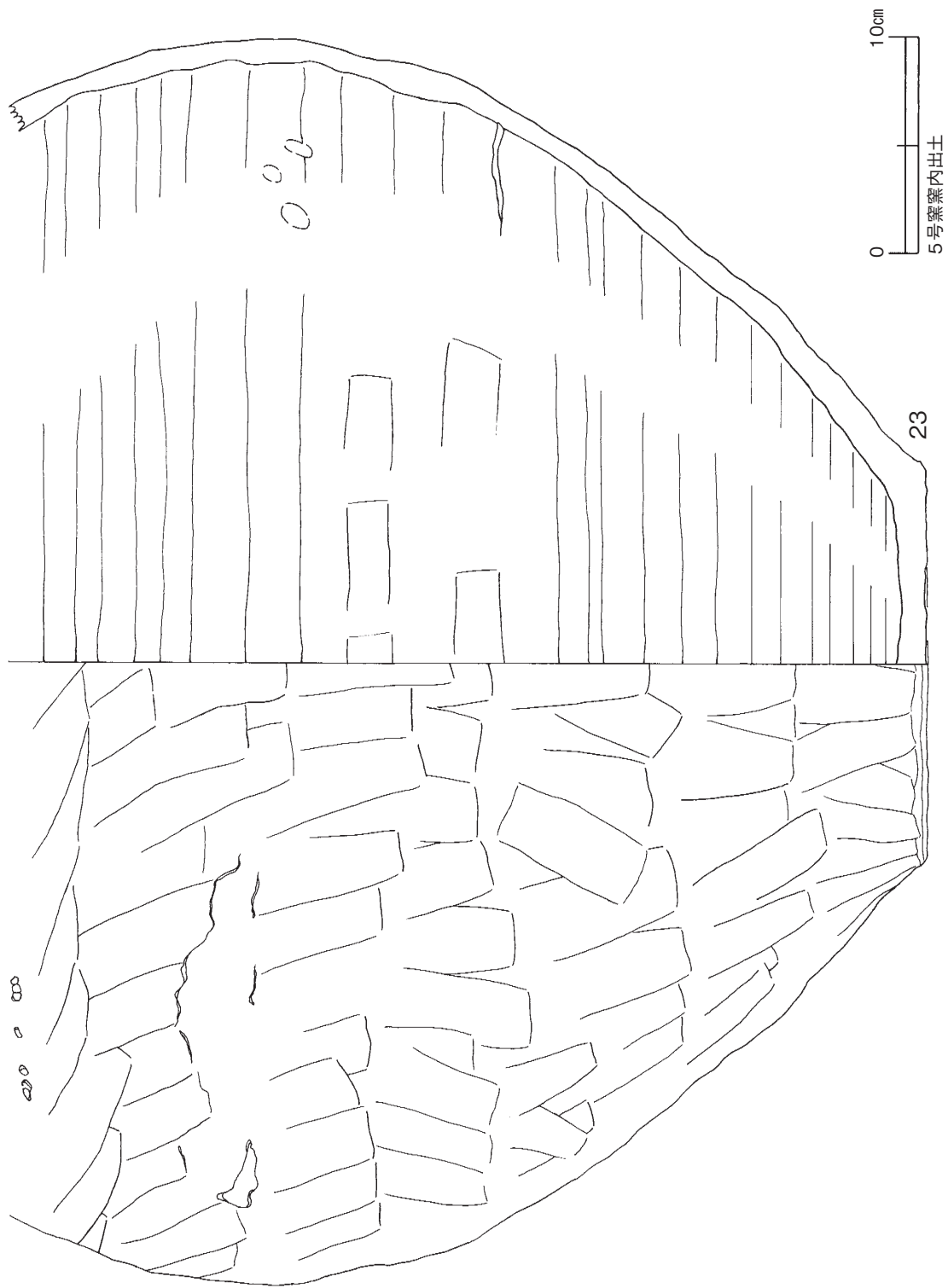


图20 永田5·6号窯出土遺物実測图 (5)

基本的な調整として、高台端部には靱殻圧痕が、底部外面には糸切痕、体部外面にはロクロ目、口縁部内外面には指ナデ痕、体部内面から底部内面にはコテナデ痕がみられる。

A類は、器高5.7~6.0cm、口径16.4~17.8cm、高台径5.9~8.2cmである。高台は基部の幅が広い断面台形を呈している。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は若干外反する。口径に対して器高が低く扁平な形状である。68・69はやや焼成不足で、黄白色か淡黄白色を呈し、同色の緻密あるいはやや緻密な胎土を使用している。61・63~66は焼成良好で、器表は黄褐色や灰白色・赤褐色・黄白色・淡橙色を呈し、10.0mm以下の礫や1.0mm以下の黒斑を含む灰白色・黄白色の密な胎土を使用している。

B類は、器高5.5~6.8cm、口径16.1~17.3cm、高台径6.3~6.8cmである。高台は基部の幅が広く、断面形が隅丸方形ないし三角形を呈する。体部の形状や胎土についてはA類と同様で、71はやや焼成不足、62・67・70は焼成良好である。

C類は、器高6.0~6.8cm、口径16.3~17.3cm、高台径6.8cmである。高台は基部の幅が広く、端部内側に丸みもち断面三角形に近い台形ないし三角形を呈する。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、端部は丸く収められる。口径に対して器高が高くやや深い。焼成良好で、器表は灰白色から黄白色を呈し、1.0mm以下の黒斑と3.0~5.0大の礫を含む灰白色の密な胎土を使用している。

D類は、器高6.5~7.0cm、口径17.0~17.2cm、高台径7.4~7.6cmである。高台は基部の幅がやや狭い断面三角形を呈し、A類に比べ小振りである。体部から口縁部にかけては直線的に開き、口縁端部はほとんど外反しない。口径に対して器高が高く深めである。いずれも焼成不足で、器表は淡薄茶色を呈し、2.0~5.0mm大の長石粒や礫を含む同色の密な胎土を使用している。

D類は、器高4.9cm、口径16.3cm、底径7.6cmである。平底で、底部外面には板目状圧痕が確認され、体部の形状はA類と同様である。焼成良好で、器表は灰白色を呈し、同色の密な胎土を使用している。

A・B類は6号窯灰原出土資料、C類は5号窯窯内出土資料にみられ、D類は6号窯灰原から出土している。なお、碗類についても施釉の可能性を指摘されているが(三宅2010)、漬け掛けの場合内外面の釉薬のラインが対応しない点、刷毛塗りの場合刷毛目が不明瞭である点、火前と思われる側の外面に多くみられる点から、これらは自然釉であると判断した。

②輪花碗・玉縁口縁碗(58・59)

輪花碗(58)は、器高5.7cm、口径17.0cm、高台径7.2cmである。全体の形状は山茶碗B類と類似するが、口縁部は外反し、口縁部の残存率が25%であるため数は不明だが輪花が施される。焼成良好で器表は灰色を呈し、同色の密な胎土を使用している。また、一部自然釉がかかる。5・6号窯灰原出土資料にみられる。

玉縁口縁碗(59)は、器高6.4cm、口径16.0cm、高台径7.0cmである。口縁部以外は山茶碗B類と同様である。口縁直下に沈線が施され、そこから端部にかけて内外面とも外湾し、玉縁状に仕上げられる。焼成良好で、器表は暗灰色から黄白色及び灰白色を呈し、灰白色で1.0mm以下の黒斑を含む密な胎土を使用している。5・6号窯灰原出土資料にみられる。

③小碗・小皿(34~37、72~79)

小碗(72~75)は、器高2.3~3.4cm、口径8.3~10.2cm、高台径3.2~4.0cmである。全体に小ぶり、高台は低く基部の幅がやや広い断面三角形及びそれが潰れた台形を呈する。体部はゆるく張り、72・74の口縁部はほとんど外反せず、73・75は僅かに外反し、いずれも端部は丸く収められる。底部外面の糸切痕は指ナデ調整によって確認できず、体部外面にはロクロ目が、口縁部内外面には締めナデ痕が、

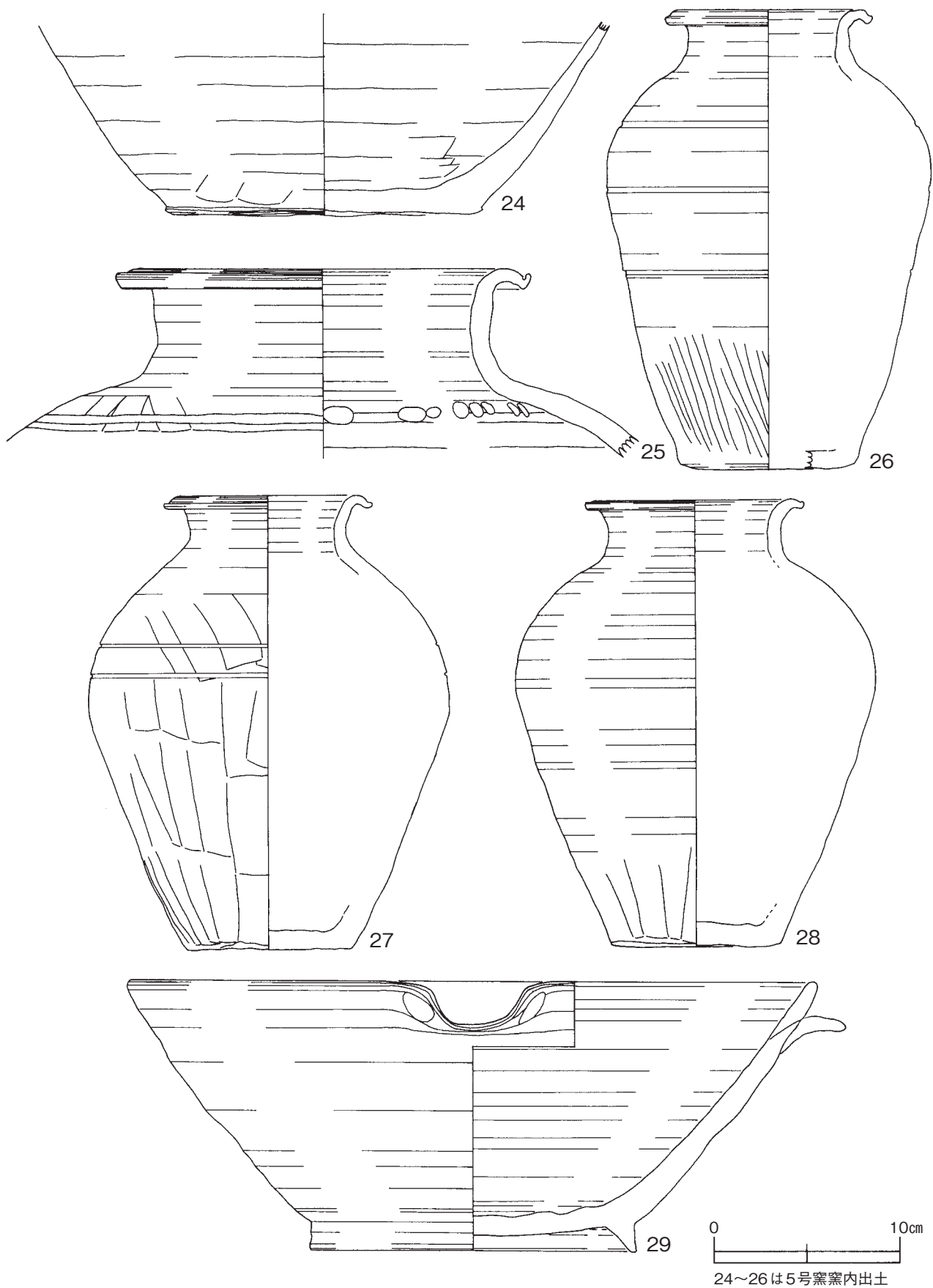


图21 永田5・6号窯出土遺物実測図(6)

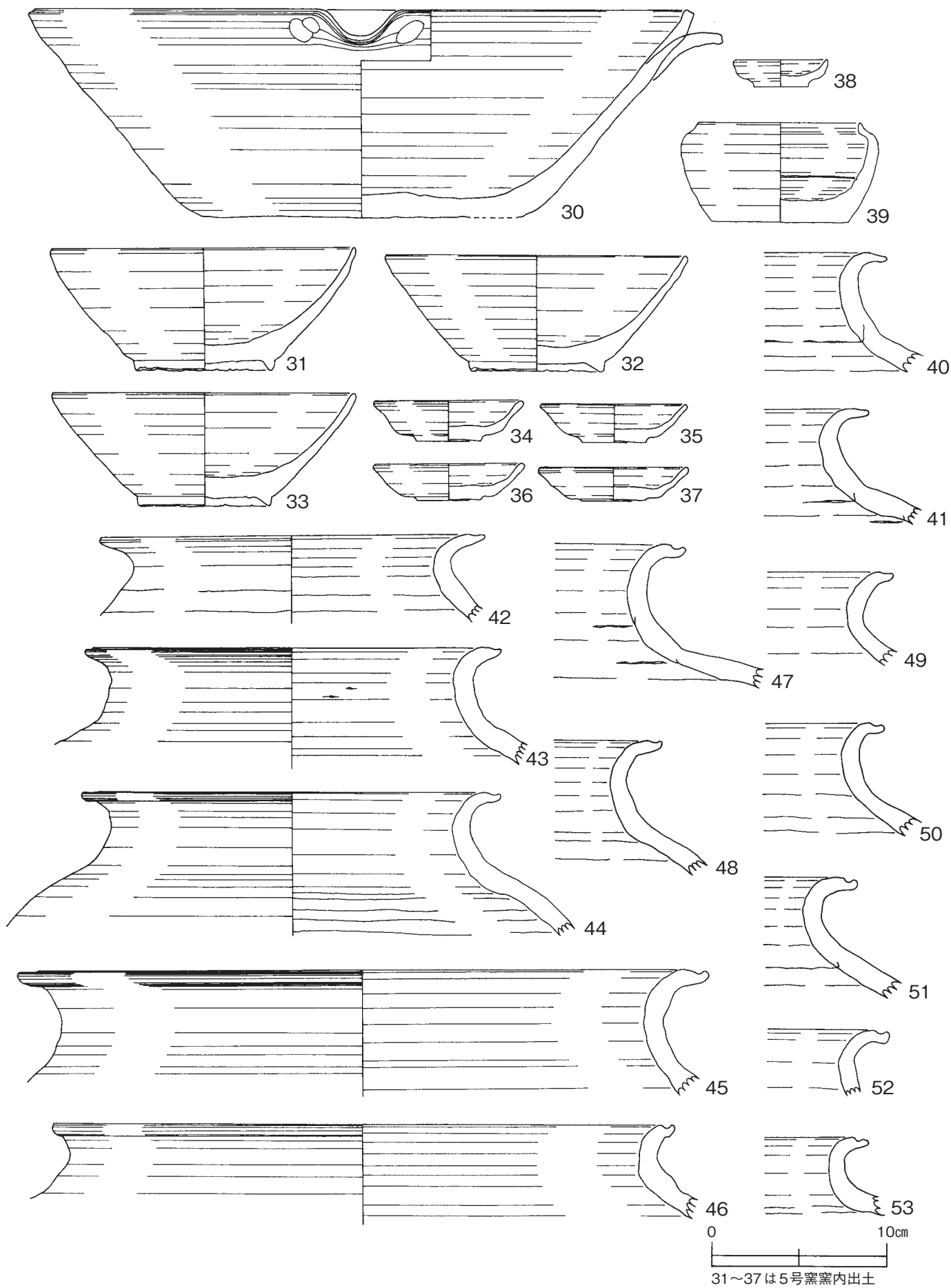


图22 永田5・6号窯出土遺物実測図 (7)

体部内面から底部内面にはコテナデ痕がみられる。74・75は70～72に対し小ぶりで器高も低い。いずれも焼成良好で、器表は灰白色・黄白色・灰色を呈し、1.0mm以下の黒斑を含む灰白色の緻密な胎土を使用している。6号窯灰原出土資料にみられる。

小皿（34～37、76～79）は、口径も底径も大きくやや深い形状となるA類（76・77）、口径も底径も小さく浅い形状となるB類（76・77・34～37）の二つに分類可能である。基本的な調整として、底部外面には回転糸切痕、体部外面にはロクロ目、口縁部内外面には指ナデ痕、体部内面から底部内面にはコテナデ痕が確認される。

A類は、器高2.3～2.4cm、口径9.2cm、底径4.5～4.8cmである。体部はやや外反気味に立ち上がり、中央に稜をもつ。口縁部はやや外反し、端部は丸く収められ、底部中央が厚くなる。高台を付されない点以外は、全体の形状は小碗と類似している。いずれも焼成不足ないしやや焼成不足で、器表は黄白色から灰白色を呈し、1.0mm以下の黒斑を含む同色の密な胎土を使用している。

B類は、器高1.9～2.5cm、口径8.2～8.4cm、底径3.7cmである。底部は柱状にやや突出し、体部下方に強い張りをもつ。口縁部にかけては直線的にひらき、ほとんど外反せず、端部は丸く収められる。

34～37は焼成不足で、器表は淡薄茶色を呈し、2.0～5.0mm大の長石粒や礫を含む同色の密な胎土を使用している。78・79は焼成良好で、器表は灰白色を呈し、同色で1.0mm以下の黒斑を含む密な胎土を使用している。

A類は6号窯灰原出土資料、B類は5号窯窯内資料及び6号窯灰原資料にみられる。

④玉縁口縁小皿(57)

器高2.2cm、口径7.8cm、底径4.1cmである。体部は丸く、口縁部は直線的で、口縁直下に沈線が施され玉縁状を成す。底部外面には糸切痕が確認され、体部外面と体部内面から底部内面にかけてはロクロ目、口縁部内外面には指ナデ痕がみられる。焼成良好で、器表は灰色から灰白色を呈し、同色で1.0mmの黒斑を含む密な胎土を使用している。5号窯窯内出土資料にみられる。

⑤片口鉢I類(29・30・55)

片口鉢I類は、付高台で口縁部の1ヶ所に指による注口を有する。体部の丸みが強いA類(55)と、直線的に開くB類(29・30)に分かれる。A類は、器高14.5cm、口径28.8cm、高台径12.2cmである。高台が断面隅丸方形を呈し、体部は丸みを持って開き、口縁直下で外反する。底部外面は未調整で、体部外面下方は回転ヘラ削り調整が施される。体部外面中央から上方と体部内面から底部内面にかけてはロクロ目が認められ、体部内面から底部にかけてはコテナデ痕が確認される。焼成良好で器表は灰白色から灰色を呈し、同色で10.0mm以下の礫や1.0mm以下の黒斑を含むやや密な胎土を使用している。6号窯灰原出土資料にみられる。

B類は、29が器高12.0cm、30は残存高11.9cmである。口径は36.2～37.2cm、高台径は17.4～18.0cmである。29は高台が断面三角形及び台形を呈し、30は高台が欠損している。口縁部の調整は、29は直線的で端部が丸く収められ、30は口縁直下で内湾し、端部が隅丸方形を呈し上面が軽く凹む。調整についてA類と同様である。焼成不良で器表は黄白色を呈し、同色で2.0～4.0mm大の礫や2.0mm大の白色礫を含む密な胎土を使用している。5号窯窯内資料にみられる。

⑥その他

38は土師質の皿で、器高1.5cm、口径5.3cm、底径3.1cmである。底部はやや柱状に突出し、体部中央に強い張りもち、口縁部はほとんど外反せず尖り気味に仕上げられる。底部外面には糸切痕、胴部

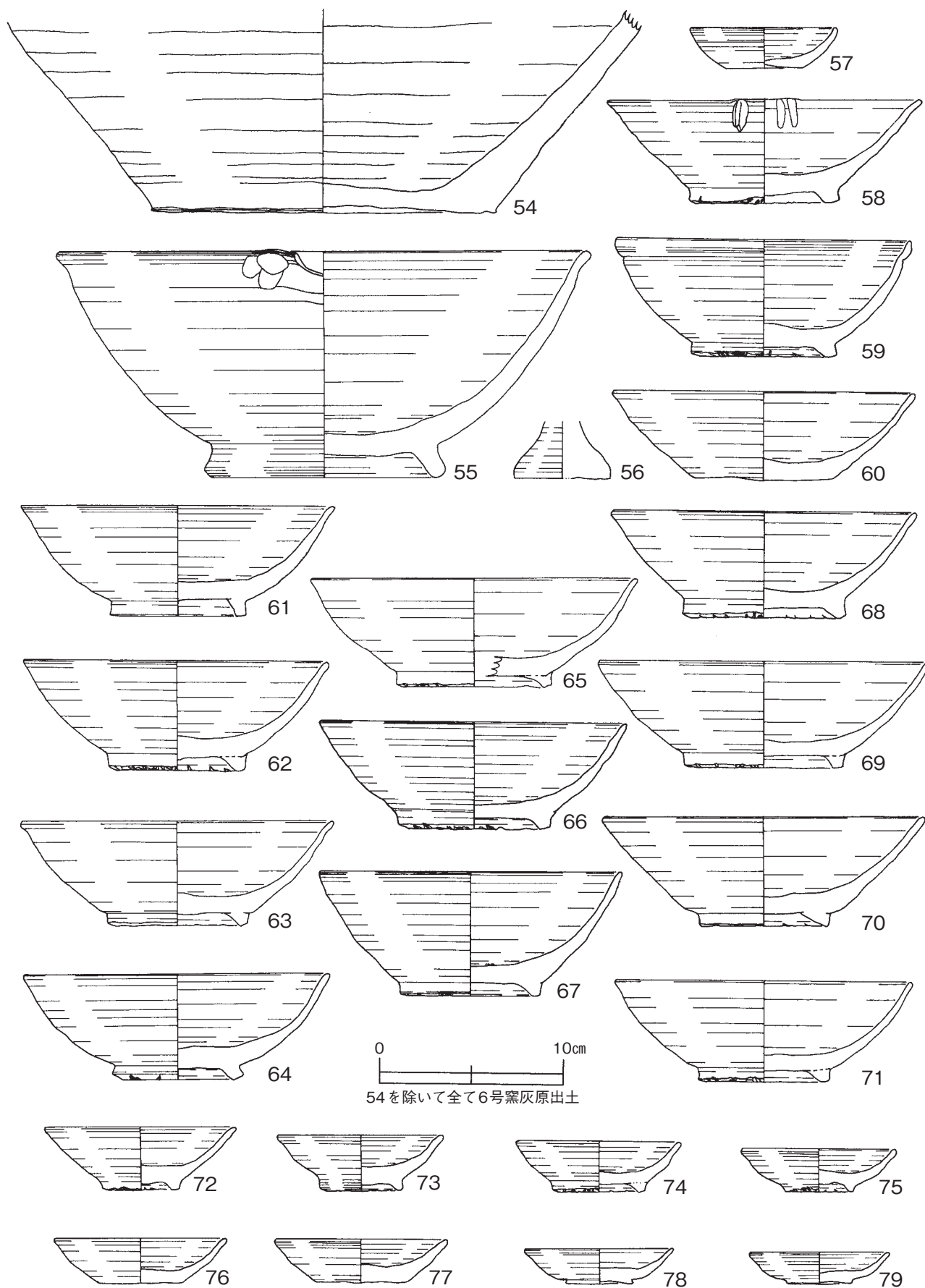


図23 永田5・6号窯出土遺物実測図(8)

外面外面にはロクロ目、口縁部内外面には回転ナデ調整、内面の底部から体部にかけてはコテナデ痕が確認され、底部内面中央はロクロ目が残る。器表は黄白色から肌色を呈し、黄白色で3.0mm以下の砂粒及び1.0mm以下の黒斑を含む緻密な胎土を使用している。

39は小壺で、器高5.6cm、口径9.3cm、底径7.8cmである。胴部はやや丸みをもって立ち上がり、口縁部直下で強く内湾する。口縁部はやや内傾し、端部は丸く収められる。底部外面には糸切痕、胴部内外面にはロクロ目、口縁部内外面には回転ナデ調整が認められる。また、内面の底部から胴部下方にかけて小さい溝が螺旋状に巡り、胴部中央には同様の溝が同心円状に一条みられる。やや焼成不足で、器表は黄白色から白色・薄茶色を呈し、黄白色で5.0mm以下の白色砂粒をやや多く含む緻密な胎土を使用している。

56は子持器台で、底径5.2cmで上部は欠損しているが、東濃窯の矢戸上野3号窯などに類例が見られることから、子持器台と判断した^(註5)。底部下方から緩やかに立ち上がり、残存部の最小径は1.9cmとなる。底部外面には糸切り痕が確認され、脚部外面にはロクロ目がみられる。1.0mm以下の黒斑を少量含む灰白色の密な胎土を使用している。6号窯表土から出土する。

5. 操業年代

以上、永田5号窯・6号窯の遺構・遺物について述べてきたが、ここで操業年代について触れていきたい。なお、D7-D10ラインにおいて5号窯灰層である④層より下に堆積する層のさらに下層に6号窯灰層である⑩層が堆積している状況や、6号窯より5号窯の方がやや高所に築かれるという両窯の立地からも、すでに指摘されているように6号窯→5号窯の順に築窯されたことは明らかである。

(1) 出土遺物について

両窯の生産器種を出土状況から整理すると、6号窯では壺甕の生産はみられず山茶碗A類・小碗と少量の碗B類・碗D類・小皿A類・輪花碗・玉縁口縁碗・玉縁口縁皿・片口鉢I類A類を生産し、5号窯では甕を主体的に少量の山茶碗C類・小皿B類・片口鉢I類B類・三筋壺・広口壺を生産する甕主体窯と考えられる。

両窯で生産が確認される山茶碗類については、碗A類・碗B類・碗D類と小碗・小皿A類が6号窯、碗C類と小皿B類が5号窯で生産されたものと考えられる。さらに、6号窯で出土した山茶碗類は碗A類・小碗が大半で、碗B類・小皿A類は極めて少ないことから、碗A類と小碗、碗B類と小皿A類はそれぞれセット関係にあると考えられる^(註6)。また、碗C類と小皿B類は5号窯でのみ生産が確認されていることから、これらもセットで生産されていたと考えられる。

表1 永田5・6号窯跡出土遺物個体数

	碗	小碗	小皿	甕類			壺類	片口鉢	子持器台	小壺	土師器皿
				A類	B類	C類					
6号窯灰原	680	276	42					3			
6号窯灰原・表土	28	17	1						1		
6号窯窯内	40	4									
5号窯窯内	14	5	3		12	5	6	5		1	1
5号窯灰原				3	6	5					
5・6号窯	6							3			
表土	135	62	1				1	1			
第2層	94	30	3								
不明	15	9	1								
計	1012	403	51	3	18	10	7	12	1		

表2 永田5・6号窯跡出土遺物計測表

No.	器種	分類	法量				出土地点	注記	口縁 残存率	底部・高台 残存率	備考		
			器高	口径	最大胴径	底径						高台径	
1	甕	B	—	40.8	—	—	—	5号窯内	NZ5FL	20	—	やや焼成不足	
2	甕	C	—	36.0	—	—	—	5号窯内	NZ5FL	35	—	やや焼成不足	
3	甕	C	—	30.6	—	—	—	5号窯内	NZ5FL	15	—	やや焼成不足, 歪み大	
4	甕	C	—	42.4	—	—	—	5号窯内	NZ5FM	40	—	焼成不足	
5	甕	B	—	38.6	—	—	—	5号窯内	NZ5FL	10	—	焼成不足	
6	甕	C	—	36.5	—	—	—	5号窯内	NZ5FL	15	—	焼成不足	
7	甕	C	—	41.8	—	—	—	5号窯内	NZ5FL	40	—	焼成不足	
8	甕	C	38.1	27.8	37.5	16.5	—	5号窯内	NZ5FL	80	100	焼成不足	
9	甕	C	—	24.1	—	—	—	5号窯内	NZ5FL	10	—	焼成不足	
10	甕	B	—	—	—	—	—	5号窯内	NZ5FL	—	—	焼成不足	
11	甕	B	—	—	—	—	—	5号窯内	NZ5FL	—	—	焼成不足	
12	甕	B	—	—	—	—	—	5号窯内	NZ5FL	—	—	焼成不足, 補修痕	
13	甕	B	—	—	—	—	—	5号窯内	NZ5FL	—	—	焼成不足	
14	甕	B	—	—	—	—	—	5号窯内	NZ5FL	—	—	焼成不足, 補修痕	
15	甕	B	—	—	—	—	—	5号窯内	NZ5FL	—	—	焼成不足	
16	甕類		—	—	—	20.0	—	5号窯内	NZ5FL	—	100	焼成不足	
17	甕類		—	—	—	18.5	—	5号窯内	NZ5FL	—	85	焼成不足, 下駄印	
18	甕	C	43.7	24.8	40.4	16.4	—	5号窯内	NZ5FL	100	75	焼成不足, 押印文, 下駄印	
19	甕類		—	—	—	18.8	—	5号窯内	NZ5FL 窯内	—	100	焼成不足	
20	甕類		—	—	—	17.5	—	5号窯内	NZ5FL	—	100	焼成不足, 下駄印, 補修痕	
21	甕類		—	—	—	19.2	—	5号窯内	NZ5FL	—	100	焼成不足	
22	甕	B	—	40.5	60.0	—	—	5号窯内	NZ5FL	95	—	焼成不足, 補修痕, 押印文	
23	甕		—	—	—	57.6	18.6	—	5号窯内	NZ5FL	—	100	焼成不足, 下駄印
24	甕類		—	—	—	—	17.0	—	5号窯内	NZ5FL 窯内	—	100	焼成不足, 下駄印
25	広口壺		—	19.8	—	—	—	5号窯内	NZ5FK	35	—	焼成不足	
26	三筋壺		24.6	11.4	17.5	9.0	—	5号窯内	NZ5FL	85	70	やや焼成不足, 三筋文	
27	三筋壺		24.5	11.3	19.4	8.8	—	5号窯内	NZ5FL	80	100	やや焼成不足, 二筋文	
28	三筋壺		24.1	11.7	18.4	9.3	—	5号窯内	NZ5FL	70	100	やや焼成不足, 無文	
29	片口鉢 I 類	B	14.5	36.2	—	—	17.4	5号窯内	NZ5FL	65	75	焼成不足, 下駄印	
30	片口鉢 I 類	B	—	37.2	—	18.6	—	5号窯内	NZ5FL	60	0	焼成不足, 高台欠損, 下駄印	
31	山茶碗	C	7.0	17.2	—	8.0	7.6	5号窯内	NZ5KM	15	100	焼成不足	
32	山茶碗	C	6.5	17.1	—	7.6	7.4	5号窯内	NZ5CL	10	90	焼成不足	
33	山茶碗	C	6.7	17.0	—	7.6	7.4	5号窯内	NZ5FL	5	100	焼成不足	
34	小皿	B	1.9	8.4	—	3.7	—	5号窯内	NZ5FL	35	—	焼成不足	
35	小皿	B	2.3	8.3	—	3.7	—	5号窯内	NZ5FL	50	—	焼成不足	
36	小皿	B	2.1	8.4	—	3.7	—	5号窯内	NZ5FL	50	—	焼成不足	
37	小皿	B	2.5	8.2	—	3.7	—	5号窯内	NZ5FL	10	—	焼成不足	
38	土師器皿		1.5	5.3	—	—	3.1	5号窯内か	NZ5FL	100	100	土師質	
39	小壺		5.6	9.3	—	—	7.8	5号窯内	NZ5FL	98	100	焼成不良	
40	甕	A	—	—	—	—	—	5号灰原か	OA102	—	—		
41	甕	A	—	—	—	—	—	5号灰原か		—	—		
42	甕	A	—	22.0	—	—	—	5号灰原か		15	—		
43	甕	B	—	23.5	—	—	—	5号灰原か	NZB11-1	20	—		
44	甕	B	—	23.8	—	—	—	5号灰原か	RLC72	10	—		
45	甕	C	—	38.8	—	—	—	5号灰原か	NZD74	15	—		
46	甕	C	—	35.1	—	—	—	5号灰原か	NZB102	5	—		
47	甕	B	—	50.0	—	—	—	5号灰原か	NZD92	15	—	焼成過多, 歪み大	
48	甕	B	—	—	—	—	—	5号灰原か	NZB91	—	—		
49	甕	B	—	—	—	—	—	5号灰原か	NZBrC2	—	—		
50	甕	B	—	—	—	—	—	5号灰原か	NZA01	—	—		
51	甕	C	—	—	—	—	—	5号灰原か		—	—	焼成過多, 歪み大	
52	甕	C	—	—	—	—	—	5号灰原か	NZB81	—	—		
53	甕	C	—	—	—	—	—	5号灰原か	NZC7K	—	—		
54	甕類		—	—	—	18.6	—	5号窯内(上層か)	NZ5FL	—	100	下駄印	
55	片口鉢 I 類	A	12.0	28.8	—	—	12.2	6号灰原か	NZC84E,NZC84K,NZB91	35	45		
56	子持器台		—	—	—	5.2	—	6号表土	NZB 9H	—	100		
57	玉縁口縁皿		2.2	7.8	—	4.1	—	6号灰原か	NZC85K,NZC87K	90	10		
58	輪花碗		5.7	17.0	—	—	7.2	6号灰原か	NZC8	—	—		
59	玉縁口縁碗		6.4	16.0	—	—	7.0	6号灰原か	NZC84K	40	100	歪み大	
60	山茶碗	D	4.9	16.3	—	7.6	—	6号灰原か	NZC84K	25	70		
61	山茶碗	A	6.0	17.0	—	—	6.5	6号灰原か	NZC85K	40	100		
62	山茶碗	B	6.0	16.4	—	—	6.5	6号灰原か	NZC84K	15	55		
63	山茶碗	A	5.7	16.8	—	—	6.8	6号灰原か	NZC84K	45	100		
64	山茶碗	A	5.8	16.4	—	—	5.9	6号灰原か	NZC85K	45	100		
65	山茶碗	A	5.9	17.6	—	—	7.4	6号灰原か	NZC84K	40	45		
66	山茶碗	A	5.8	16.7	—	—	7.2	6号灰原か	NZB84K	40	100		
67	山茶碗	B	6.8	16.3	—	—	6.8	6号灰原か	NZD93	50	100		
68	山茶碗	A	5.8	16.5	—	—	8.2	6号灰原か	NZC84K	35	50	やや焼成不足	
69	山茶碗	A	5.8	17.8	—	—	7.4	6号灰原か	NZC84K	30	50	やや焼成不足	
70	山茶碗	B	6.0	17.3	—	—	6.8	6号灰原か	NZC84K	35	100		
71	山茶碗	B	5.5	16.1	—	—	6.3	6号灰原か	NZC84K	2	55	やや焼成不足	
72	小碗		3.4	10.2	—	—	3.5	6号灰原か	NZD94K	100	100		
73	小碗		3.0	9.1	—	—	4.0	6号灰原か	NZC96K	75	100		
74	小碗		2.7	8.8	—	—	4.4	6号灰原か	NZC86K	90	50		
75	小碗		2.3	8.3	—	—	3.2	6号灰原か	NZC96K	60	100		
76	小皿	A	2.4	9.2	—	—	4.5	6号灰原か	NZC95K	40	100	やや焼成不足	
77	小皿	A	2.3	9.2	—	—	4.8	6号灰原か	NZ83K	25	55	焼成不足	
78	小皿	B	1.9	8.0	—	—	3.7	6号灰原か	NZC64K	5	100		
79	小皿	B	1.7	7.5	—	—	3.4	6号灰原か	NZC64K	55	100		

碗A類は、高台は基部の幅が広い断面方形ないし三角形を呈し、体部は丸みをもって立ち上がり口縁部は外反するものが多く端部が丸く収められるという特徴から、東濃型山茶碗編年における第4型式後半に相当するものと考えられる(表3)。6号窯で生産される小碗については、全体に小形で、高台が低く基部の幅がやや狭い断面三角形及び台形を呈し、口縁端部が丸く収められることから東濃型第4型式期の特徴を備え、12世紀第3四半期に生産されたものと考えられる(山本2017)。

碗B類は、碗A類と比べて高台の形状がややシャープさに欠け、退化傾向にあることから、これに後出するものとして東濃型山茶碗第5a型式期に位置付けられる。また、小皿A類は、体部の形状が小碗と類似することから、同様に第5a型式期に比定できる。

碗C類は、碗A・B類と比べて器高が高く深くなる点において、東濃型山茶碗第5b型式期の特徴を備えているが、当該期の東濃窯の碗の形状と比較するとかなり深い形状である。とはいえ、6号窯で生産された碗B類に続く形状であることは間違いのないため、小皿B類とセットで生産されたものと捉えたい。

東濃窯と瀬戸窯で生産された第5型式期の東濃型山茶碗は、体部の形状などから体部に丸みを帯びる碗1類、体部が直線的に開く碗2類、口径に対して器高が低く浅い碗3類、高台が体部下端に付される碗4類の4系統に分けることができるが(山本2017)、碗C類はどの系統にも素直に一致しない。唯一、高台周辺の形状に関しては第5b型式期の旧土岐郡域にみられる碗3類に似ているが、浅い形状の碗3類とかなり深い形状の碗C類とは器高が全く異なっている。とはいえ、底部や体部下方が分厚く口縁部にかけて薄くなる点、高台がやや高く小さくなる点は先述したように東濃型山茶碗第5b型式期に通じるものがあるため、12世紀後葉に生産されたものと考えたい。

碗C類とセットで生産される小皿B類について、第5b型式期の東濃型小皿と比較していく。この時期に底部が柱状に突出するものは編年表には掲載していないが、窯跡の資料では少量確認されることがある。しかし、小皿B類は東濃窯・瀬戸窯のものより器高が低く浅く、全体的に小さい。したがって、第5b型式期の小皿とは形式的に一致しない。小皿B類が5号窯独自のものであるのか、東濃型の小皿に別系統として分類できるのかは検討する必要があるが、碗C類と共に焼成不足の状態で窯内から出土していることから、両者が同時期に生産され且つ5号窯の最終焼成に関わるものであることは間違いのない。そのため、ここではひとまず碗B類と同じ12世紀後葉に生産されたものと位置付けておきたい。

次に、5号窯で生産された甕類の口縁形態については、甕A類は焼成良好で灰原のみ確認される。甕B類・甕C類は灰原と窯内で認められるが、窯内で出土したものについては焼成不足であることから最終焼成時のものと考えられる。そのため、甕A類→甕B類・甕C類という変化を辿ったものと考えられる。さらに、甕B類と甕C類をみると、甕C類が灰原資料のなかにほとんど含まれないことや、形状的にみても、甕B類から形式的に連続するものであろう。また、一型式に収めるには形状の差が大きいため甕A類・甕B類・甕C類はおおよそ常滑編年の第2型式期(1150～1175年)及び第3型式期(1175～1190年)に併行する時期に変遷するものと考えられ(図24)、12世紀後葉とする5号窯の山茶碗の編年観と矛盾しない^(註7)。

ただし、甕類の胴部外面に施される帯状の施文については、常滑編年の2型式期・3型式期とは異なる様相を示している。2型式期では、成形の区切りに合わせるように帯状に施文され、文様は通常大形のもので5段、小形のもので4段にわたって施され、広口壺への押印はみられなくなる。続く3型式期から4型式期にかけては、2型式期と比べて大きな違いはみられないが、時期が降るほど徐々に簡略化

表3 東濃型山茶碗編年表 (山本017より転載)

	碗1類・小碗・小皿1類	碗2類・小皿2類	碗3類
1150	<p>第4型式期</p>		
1167	<p>第5a型式期</p>		
	<p>第5b型式期</p>	<p>第5c型式期</p>	<p>第5d型式期</p>
1200	<p>第5e型式期</p>	<p>第5f型式期</p>	

	碗1類・小皿1類	碗2類・小皿2類	碗3類
	<p>第4型式期</p>		
	<p>第5a型式期</p>		
	<p>第5b型式期</p>	<p>第5c型式期</p>	<p>第5d型式期</p>
	<p>第5e型式期</p>	<p>第5f型式期</p>	

の傾向が現れ、明確に甕の帯状連続施文が崩れ始めるのは5型式期に入ってからという。5型式期では、5段施文のものは残るものの肩部のみ施文されたものや押印文を施さないものが現れ、2段階で文様が施されなくなった広口壺の肩部へ装飾的な押印文が施されることもあるといわれる(中野2014)。

これを念頭に置いて永田5号窯の甕類をみると、常滑窯の甕類と同様に帯状に連続施文が施されるものが確認されている。しかし、確実に施文が認められる甕は多くて2段、少ないと肩部のみ1段で形成される点、確実に無文の甕が認められる点などにおいて、同時期の常滑窯に比べて施文の簡略化が進んでいるように見受けられる。しかし、2型式期に比定される出地田窯跡、三ツ池4号窯や、3型式期に比定される槍場・御林B2・4号窯、3型式期から4型式期に比定される夏敷窯跡などで出土した甕類にも無文のものが認められることから、おそらく常滑窯においても帯状連続施文が施されないものが少なからず生産されており、永田5号窯の甕類の状況と同じ様相を示す可能性が指摘できよう。

片口鉢I類は、A類については断面隅丸方形を呈する高台や、体部下方に強い丸みをもつ体部、口縁部が外反するなどの形状が、矢戸上野2・3号窯や大藪迫間洞4号窯のものと近似していることから、やはり東濃型山茶碗第4型式期に生産されたものと考えたい。また、B類は、断面三角形を呈する高台や、直線的な体部などの形状から、尾張型山茶碗第5型式期の特徴を備えていると考えられる。

続いて三筋壺についてみていく。常滑窯の三筋壺には製作者による個体差が大きくみられ、作り手の好みや癖が反映される可能性が指摘されている(中野2014)。三筋壺は、常滑編年の2型式期に出現し、三筋文は大半が三本一単位の櫛状工具によるものと、二本一単位の施文具によるものである。3型式期には急速に生産量が増加し、三筋文は単線のものが増え、肩の張りが弱くなり、全体的に粗雑化・乱雑化が進む。4型式期には大きくバランスを崩した形状のものが増え、文様も単線三筋文に加えて二筋や無文のものもみられる。

永田5号窯の三筋壺は、胴部の形状は肩部の位置が低くやや鈍臭い印象を受け、同時期のものに類似する。常滑窯のものに比べて頸部上端が強く折り返されるものが多く、口縁端部は常滑窯の三筋壺の典型的な形状に合致するものはみられない^(註8)。また、二筋及び無文のものについては全体の形状・文様の状況とも4型式期の特徴を備えており、やはり甕類と同様に同時期の常滑窯と比べて早い段階で形状の崩れや簡略化が進んでいるが、甕との共伴関係も加味すると、常滑編年の3型式期におおよそ併行するものと捉えたい。

(2) 窯体構造について

ここで、窯体構造についても検討していきたい。東濃窯の谷迫間2号窯期(東濃型山茶碗第4型式期)の窯体構造は全長が9.3~9.85m程度、分炎柱は太く床面最大幅の平均は2.8m、床面傾斜は平均41°と急であるという(図25・長瀬1994a・b)。また、煙道部の構造として、床面がほぼ水平になった後垂直に近い傾斜で立ち上がるという特徴が挙げられ、焚口には段が設けられ燃焼室が一段低い位置にある。

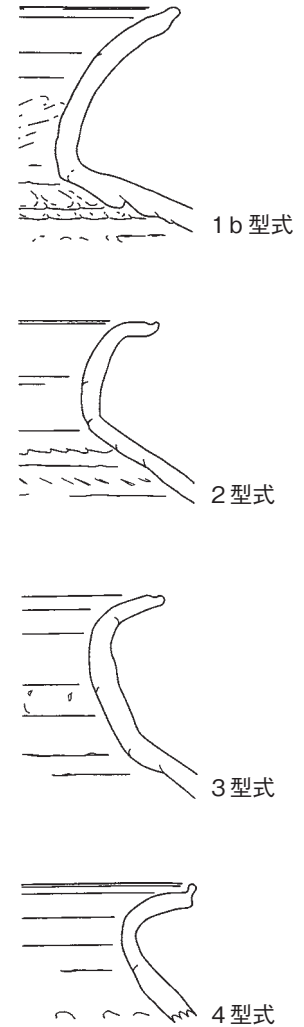


図24
常滑窯産甕口縁部の変遷
(中野2012より転載)

続く浅間窯下期（東濃型第5a型式期）の窯体構造については、焼成室の床面傾斜は35°前後で、煙道部はそれより緩い傾斜となる（図26）。また、浅間窯下期と次の丸石期（東濃型第5b型式期）には床下に碗などを埋設した排水施設が設けられるという。続く丸石3号窯期には、焼成室の中央部に張りをもたず、煙道部が長く全長が12.0m前後となる（岩下1999・2001）。

この特徴を踏まえて両窯の構造をみると、永田6号窯は全長8.50m、最大幅1.94mと当該期の窯と比べると一回り小さい。床面傾斜も34°とやや緩いが、同時期の大藪迫間洞4号窯（東濃型第4型式後半～第5a型式期）の床面傾斜は34°と同等である。浅間窯下期や丸石期にみられる床下の排水施設は設けられない。また、焚口に段は認められないものの、分炎柱がたい点や煙道部の構造からも、永田6号窯は谷迫間2号窯期の窯体構造の特徴に類似するものである。

一方、壺甕類を主体的に生産した5号窯の窯体構造をみると、東濃窯の浅間窯下1号窯期から丸石3号窯期に特徴的な、焼成室に床下施設をもち煙道部が長くなる窯体構造とは異なっている。そのため、常滑編年2～4型式期の窯体構造と比較検討してみた。2型式期は、全長10.0m弱、最大幅は2.2～2.6mで、焼成室前半の床面が平坦となり、焼成室後半の床面傾斜は35°前後である。3型式期は、全長は山茶碗主体窯が10.0m強、甕主体窯が12.0m程度、最大幅は山茶碗主体窯が2.5m前後、甕主体窯が3.0m近くとやや大きくなり、焼成室基部に狭い平坦面をもつ。床面傾斜はいずれも20～30°となる。4型式期は、全長がさらに伸び、最大幅も3.0m近くなる。焼成室基部の平坦面はなくなり、床面傾斜は25°前後と緩くなっている。また、長大で床面傾斜が緩い甕窯は、5型式期には山茶碗窯から明確に分離でき、窯体変化の兆候は4型式期から現れ始めるとされてきた（中野1994）。

一方で、12～13世紀（1a～6b型式）における常滑窯の山茶碗主体窯と甕主体窯の窯体構造について、焼成室長と焼成室最大幅、焼成室長と床面傾斜を相互に比較し5型式期以前の段階で分離することができるか検討が行われている（図27・早野2007）。その結果、2型式期・3型式期については両者を明確に分離することはできないが、4型式期の段階では明確に分離可能であることが明らかとなった。提示された窯体変遷図をみると、2型式期は、焼成室に張りがなく、分炎柱背後に広い平坦面をもつ。3型式期は、焼成室に張りをもち、中央付近で最大幅を測り、分炎柱背後に狭い平坦面をもつ。4型式期は、胴部の最大幅が分炎柱周辺まで下がり、分炎柱背後の平坦面をもたない。

永田5号窯の構造をみると、焼成室中央に張りをもち、その付近で最大幅を測る。

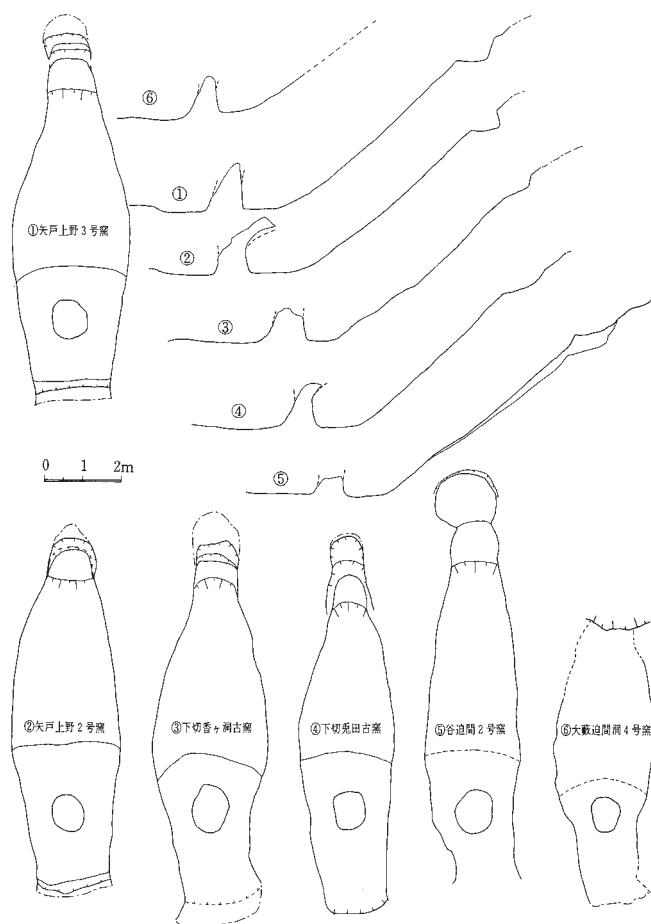
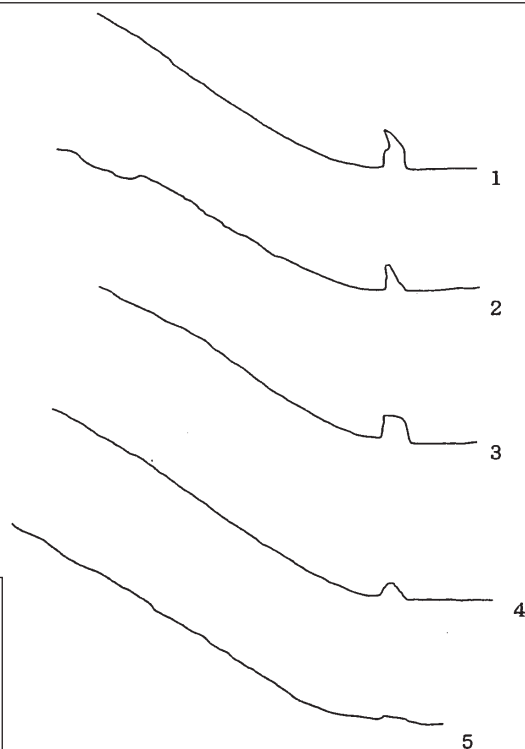
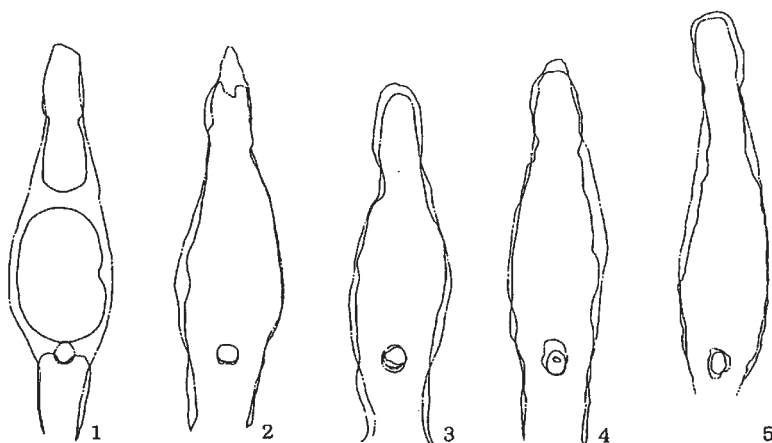


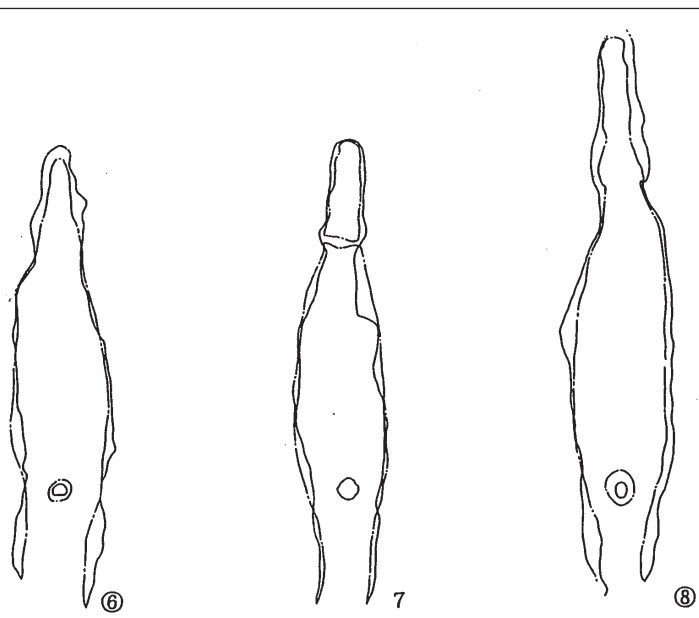
図25 谷迫間2号窯期の窯体構造（長瀬1994より転載）

窯体平面図・断面図

浅間窯下期



丸石期



- 1. 北丘9号窯
- 2. 大藪迫間洞1号窯
- 3. 大藪西山2号窯
- 4. 深山1号窯
- 5. 大針塩井戸1号窯
- 6. 松坂7号窯
- 7. 大森奥山2号窯
- 8. 松坂4号窯
- 9. 大針2号窯

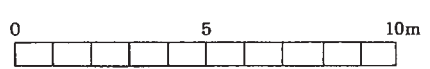
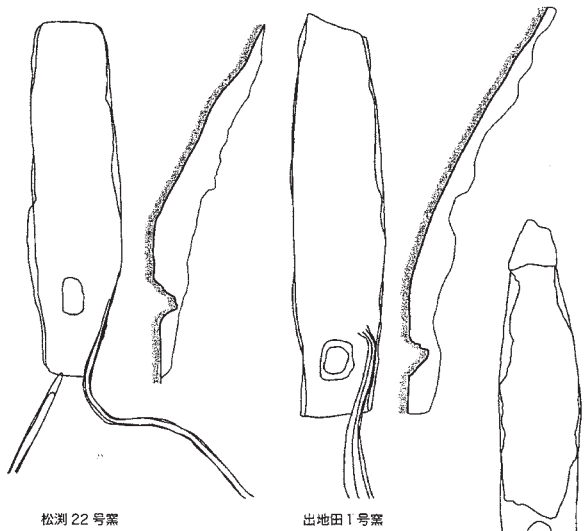


図26 東濃型山茶碗窯変遷図(浅間期・丸石期) (岩下1999より転載)

【竈主体窯】

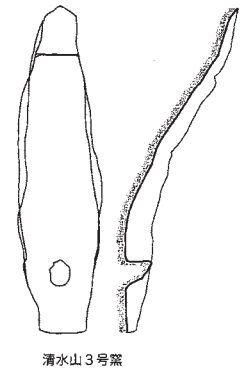
2 型式



松測 22 号窯

辻地田 1 号窯

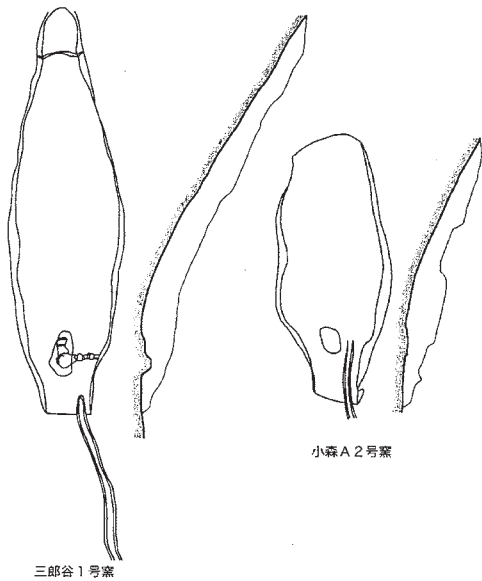
【山茶碗主体窯】



清水山 3 号窯

1175

3 型式

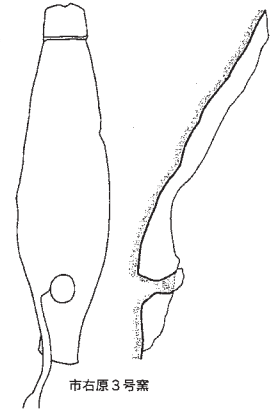


三郎谷 1 号窯

小森 A 2 号窯

二ノ田 1 号窯

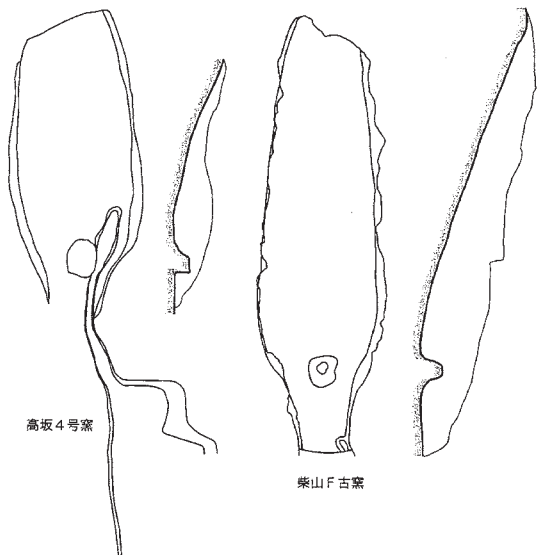
二ノ田 5 号窯



市右原 3 号窯

1190

4 型式

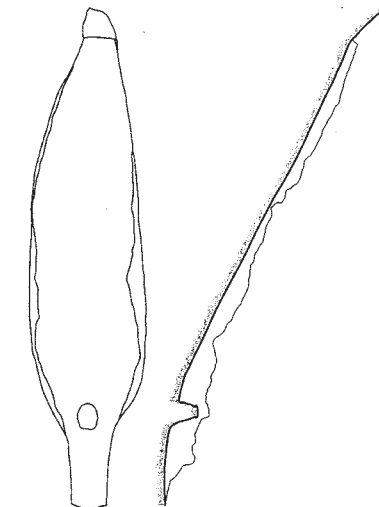


高坂 4 号窯

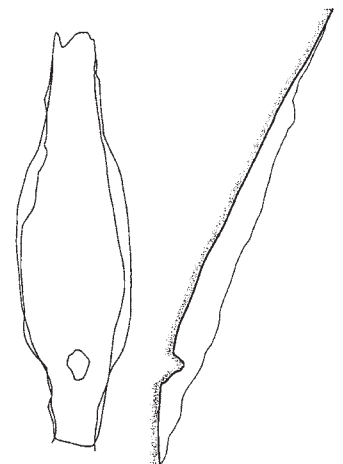
柴山 F 古窯



夏敷古窯



ピンガメ 1 号窯



丸池山 4 号窯

(1:200)

図 27 常滑窯における窯体構造の変遷 (第 2 型式期～第 4 型式期) (早野 2007 より転載)

また、分炎柱背後は平坦ではないが傾斜は緩くなっていることや、焼成室長や床面傾斜・最大幅の数値からみると、常滑編年の3型式期の山茶碗・甕併焼窯や山茶碗専焼窯の窯体構造の特徴に一致するものである。

以上のことを踏まえて永田5・6号窯の操業期間を整理すると、6号窯が5号窯に先行して築かれ、山茶碗・小碗を中心に生産を開始する。6号窯廃絶後、常滑の甕工人によって5号窯が築かれ、壺甕類を中心に生産する一方で東濃窯の山茶碗工人により少量の碗・皿が生産され、永田6号窯・永田5号窯とも12世紀後葉に稼働したものと考えられる（山本2015・2017）。

ただし、6号窯の灰層と5号窯築窯排土の間にある程度の土層が堆積している状況や、碗A類・小碗に続く碗B類・小皿A類の生産量が極めて少ない点から、6号窯廃絶から5号窯の築窯までは僅かに期間がおかれた可能性もある。

おわりに

永田5・6号窯跡は、中世恵那中津川窯において非常に重要な遺跡である。本報告で永田5・6号窯跡の遺構・生産内容を詳細に検討することで、永田6号窯は東濃窯、永田5号窯は常滑窯から直接的な技術導入を受けて操業されたことが明確となった。永田5号窯に時期的に連続する窯は残念ながら確認されていないが、恵那中津川窯の壺甕生産における初源となる重要な窯である。

最後に、恵那市教育委員会並びに伊藤英晃氏・三宅唯美氏の両氏には出土遺物の実測及び遺構・遺物実測図の作成・掲載について多大なる便宜を図っていただいた。また、愛知学院大学の藤澤良祐氏、中野晴久氏、瀬戸市埋蔵文化財センターの青木修氏には貴重なご教示を受けた。出土遺物の実測にあたっては、愛知学院大学大学院修士生の小山美紀氏・甕澤里奈氏、出土遺物の個体数カウント作業にあたっては同大学院生の森まどか氏・高野夏姫氏の協力を得た。この場を借りて深く御礼申し上げます。

註1 山茶碗類の口縁部には灰釉漬け掛けが施されると記される（三宅2010）。

註2 大形製品については、最も大型のものは口縁部内面から外面胴部にかけて釉薬が刷毛塗りされ、さらにその上から麻織布が押し当てられた痕跡が認められていると記されている（三宅2010）。

註3 甕類の底部外面に確認される下駄印については、常滑編年1b型式期に比定される大知山B古窯群でも類例が確認されている（愛知県2012）。

註4 永田5号窯で出土した甕類の口縁部片・胴部片を確認したところ、未接合ではあるが少なくとも胴部下方に帯状連続施文を確認することはできず、多くても三段ほどに留まるものとみられ、5段に亘って帯状連続施文が行われた可能性は低いとみられる。

中野氏は常滑窯で確認される押印文をA～J類に大別し、考察を行っている（中野2014）。永田5号窯の甕類には斜格子文が施されるが、斜格子文を基本とする文様は中野分類におけるE類で、斜線文に縦線文や横線文を重ねたEa類、斜線文と斜線文を重ねたEb類、斜格子文に縦線文などを組み合わせたEc類、斜格子文に縦線文や×文を組み合わせたEd類の四つに細分される。E類は常滑窯で27例確認されており、全体の3%強に留まる。永田5号窯の甕類の斜格子文はEb類に該当し、第1b型式期から第2型式期に比定される小鈴細谷窯跡や、第6a型式期に比定される菅廻間8号窯・大砂1号窯などに類例がみられるが、永田5号窯の押印文と原体が一致するものは残念ながら確認できなかった（猪飼英一1960頃・中野1992・中野2014）。

註5 上部は皿状でその上にミニチュアの碗が3個配された痕跡が認められる。底部は欠損しているが、下切ヶ洞窯跡でも矢戸上野3号窯と同様の形状をもつ子持器台が出土しており、皿部の内面にミニチュアの碗が2個配された痕跡が認められる。また、矢戸上野2号窯でも子持器台が確認されるが、同3号窯や永田6号窯のものと脚部の形状が異なっている（長瀬1994a・1994b）。

註6 なお、無高台で体部の形状が碗A類に類似する碗D類も同時期と考えたい。

註7 常滑編年の1b～4型式期は、口縁端部より頸部の形状を重視した分類基準で、5号窯出土の甕類は口縁部の形状を重視して分類したためこの基準には必ずしも一致しない（中野2012・2014）。また、常滑編年2型式期にみられる頸部が連続して湾曲、外反するのに対して、3型式期には頸部が湾曲せず直線的に立ち上がって折れ曲がるように外反して端部に至る「コ」の字状のものや、頸部が内傾しつつ立ち上がった後外反する「く」の字状のものがみられ、大型のものは前者、小型のものは後者が多いという。永田5号窯の甕は、2型式期のものと比べると湾曲・外反度が小さく外方への伸びも短い。3型式期の甕に類似するもの（8・9）も認められるが、該当しない個体の方が多くみられることから本報告において主たる分類基準とするには

至らなかった。

註8 中野晴久氏の御教示による。

参考文献

- 小山富士夫 1958「中津川の古窯址群」『陶説 67 十月号』日本陶磁協会
- 猪飼英一 1960頃『常滑古窯渥美古窯押型文拓影集 第一集』
- 猪飼英一 1960頃『知多古窯甕押型文拓影集 第二集』
- 植崎彰一 1976「美濃古陶の流れ」『美濃の古陶』美濃古窯研究会
- 恵那市史編纂委員会 1980『恵那市史 史料編 考古・文化財』恵那市
- 恵那市史編纂委員会 1983『恵那市史 通史編 第一巻』恵那市
- 齊藤孝正 1983『正家1号窯発掘調査報告書』恵那市教育委員会
- 中野晴久 1992「中世知多古窯址群の押印文—マイクロ流通史のための予備的研究—」『知多半島の歴史と現在 No.4』日本福祉大学 知多半島総合研究所
- 藤澤良祐 1993「9. 恵那・中津川窯」『東海の中世窯』(助瀬戸市埋蔵文化財センター)
- 中野晴久 1994「赤羽・中野「生産地における編年について」『「中世常滑焼を追って」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所
- 長瀬治義 1994a「第4章 考察とまとめ」『下切香ヶ洞古窯』可見市教育委員会
- 長瀬治義 1994b「第4章 考察とまとめ」『矢戸上野2・3号窯』可見市教育委員会
- 中野晴久 1996「瓷器系中世陶器の生産」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～ 資料集』(助瀬戸市埋蔵文化財センター)
- 岩下英治 1999「第8章 結語 第3節 遺物の埋設を伴う床面下施設における考察」『松阪3～7号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会
- 岩下英治 2001「第9章 総括 第6節 窯体構造の変化についての考察」『北小木 北小木古窯跡群第2次発掘調査報告書』多治見市教育委員会
- 早野浩二 2007「第4章 考察とまとめ」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第152集 夏敷古窯跡 蛇廻間古窯跡』財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
- 三宅唯美 2010「永田窯 東野窯 上平窯 才坂窯」『中世のやきもの—六古窯とその時代—』愛知県陶磁資料館
- 愛知県 2012『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』愛知県史編纂委員会
- 中野晴久 2012「常滑窯」『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』愛知県史編纂委員会
- 山本智子 2013「付編2 古城山窯跡の出土遺物について」『上県2号窯跡 第7時発掘調査概要報告書』愛知学院大学文学部歴史学科
- 中野晴久 2014『中世常滑窯の研究』
- 山本智子 2015「美濃国産山茶碗編年の現状と暦年代—中世前半を中心に—」『第34回 中世土器研究会 中世土器研究中軸資料の再検討—畿内系土器類と東海系陶器類の並行関係—』日本中世土器研究会
- 山本智子 2017「初期四耳壺生産の成立過程—東濃型山茶碗第5型式期に関して—」『文研会紀要 第28号』愛知学院大学大学院 文学研究科 文研会

付編2 牟田洞窯跡第2次調査3グリッド出土の窯道具類について

はじめに

愛知学院大学では、平成25・26年に岐阜県可児市久々利柿下入会に所在する牟田洞窯跡の発掘調査を行っている。平成26年度に実施された第2次調査の3グリッドは、牟田洞1号窯の上方に設定された調査区で、平坦面と排水溝が確認され、その溝の中から匣鉢をはじめ窯道具類が並べられた状態で検出され、1号窯に付随する作業場であったと想定されている（愛知学院大学2016）。

3グリッドの出土遺物については、時間的な制約から前回の報告書では製品を中心に報告したが、平成30年度によく整理作業が完了したので窯道具類について報告する。（高野夏姫）

1. 平底匣鉢（1～14・22～28）

匣鉢類は平底匣鉢と丸底匣鉢に大別され、平底匣鉢は法量、特に器高からⅠ～Ⅴ類の5種に分類した。

Ⅰ類（1）は器高4.8cm、口径13.2cm、底径8.2cmである。底部内面に輪ドチの付着が認められる。法量からみて全面施釉の丸皿を単独で焼成していたものと思われる。

Ⅱ類（2～4・6～8・14）は、器高7.4cm、口径15.3cm、底径13.3cm前後である。2・14には体部外面下端にロクロから取り上げる際の指痕が残り、2の底部内面に「千」の窯印が認められる。4は底部外面にヨリ輪が付着している。7の底部外面には小判形の匣鉢蓋の痕跡が認められる。Ⅱ類は器高が低いため後述する長脚ピンとハサミ皿を使用せず、輪ドチを挟んで小皿類（主に折縁皿）を重ね焼きしたものと思われる。

Ⅲ類（5・12）は、器高8.5cm、口径15.3cm、底径13.2cm前後である。5の底部内面には輪ドチ痕が認められ、いずれも体部外面下端にロクロから取り上げる際の指痕が残る。

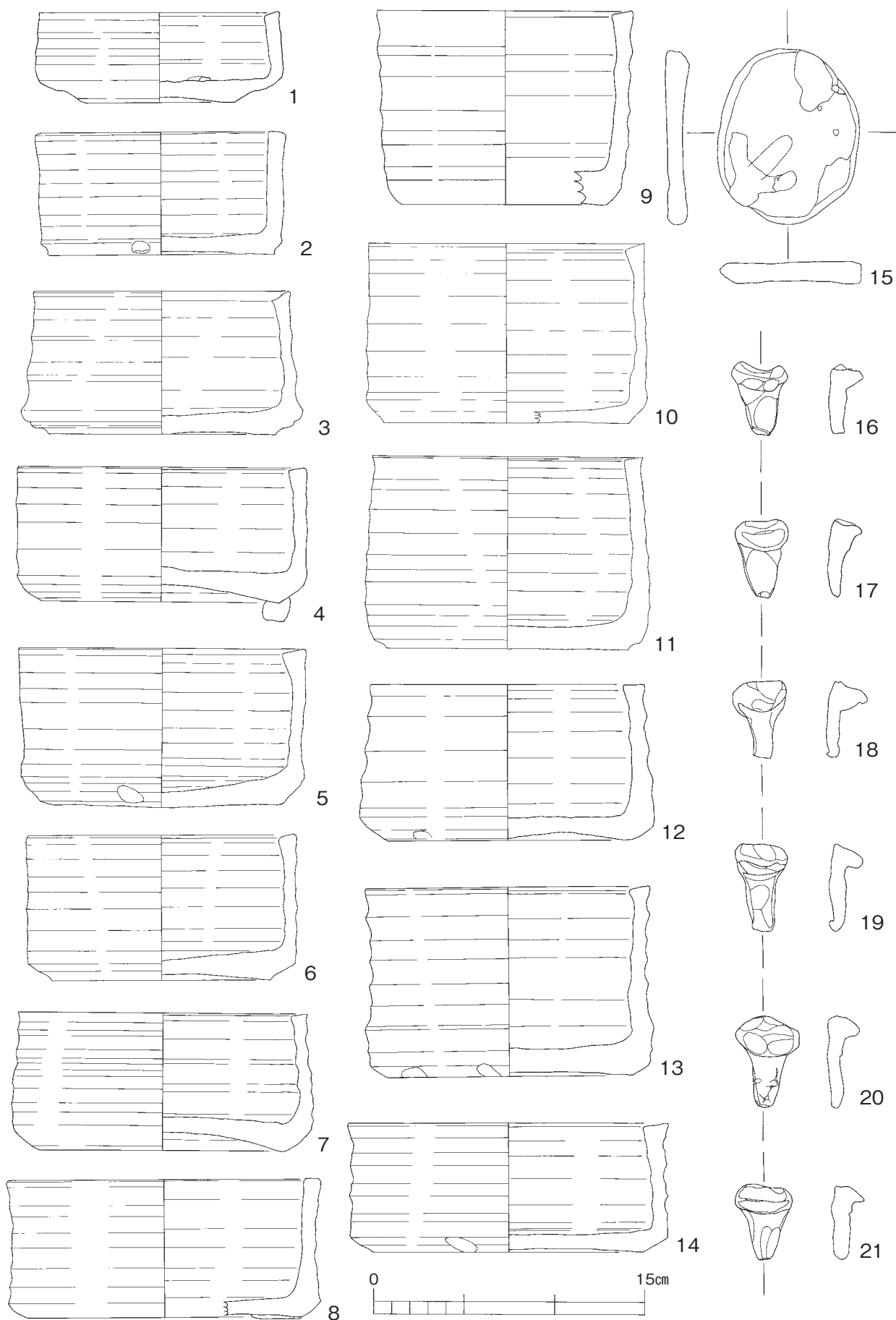
Ⅳ類（9～11・13・22～27）は、器高10.2cm、口径15.1cm、底径13.3cm前後である。13には体部外面下端に指痕、25には底部内面に輪ドチの痕跡、26の底部内面には「千」の窯印が認められる。なお、Ⅲ類とⅣ類は、Ⅱ類とは異なり器高が高いため、長脚ピンとハサミ皿を使用して匣鉢内の上下2段で小皿類の焼成が可能である。

Ⅴ類（28）は、器高10.5cm、口径19.5cm、底径は16.6cmの隅丸方形の匣鉢である。匣鉢の内面四方（底部と体部との境から体部下方にかけて）を2本の指で撫で上げることにより、円形のを隅丸方形にしている。痕跡はないが、形状からみて向付類を焼成していたと思われる。

なお平底匣鉢は、底部外面に糸切り痕が残り、体部内外面にはロクロ目が顕著で、底部内面はコテで押圧され、口縁部は回転ナデ調整されている。無釉で側面には自然釉が掛かる。やや粗めの胎土が使用され、0.2～0.5cmの鉄分の噴き出しや礫を含む。（山田美咲）

2. 丸底匣鉢（32～41）

丸底匣鉢は、器高8.5cm、口径15.5cm、底径13.2cm前後である。平底匣鉢と同様、底部外面は糸切り痕が残り、体部内外面にはロクロ目が顕著で、底部内面はコテで押圧され、口縁部は回転ナデ調整されている。唯一異なるのは、コテの押圧後、さらに底部内面をコテ・指・拳のようなもので底部を丸く押し出している。底部は強く押し出されることなく、あまり丸みをもたないものが多い。35・38～41には、底部外面にコテで押し出された際についた掌の痕が薄く残る。底部内外面はロクロ目が残り、口



第1図 牟田洞窯跡第2次調査3グリット出土窯道具類(1)

縁部は回転ナデ調整が施される。底部内面に34には輪ドチ、34・41には鉄釉が付着しており、輪ドチを敷いて天目茶碗を単独で焼成したものと思われる。無釉で側面には自然釉が掛かる。やや粗めの胎土が使用され、0.2～0.5cmの鉄分の噴き出しや礫を含む。(万年美紀)

3. 匣鉢蓋 (15・29～31)

匣鉢蓋には、皿状のものと板状のものがある。皿状のもの(29～31)はロクロ成形で、器高3.1cm、口径18.5cm、底径9.2cm前後である。いずれも糸切り痕が残る平底で、体部は直線的に開く。31は口縁端部を内側に折り返し上端を浅く窪ませている。体部外面にはロクロ目がみられ口縁部は回転ナデ調整が施される。底部内面から体部内面下方はコテで押圧されている。なお、31は底部の器厚が特に厚い。無釉でやや粗目の胎土を使用し、0.2～0.7cmの鉄分の噴き出しや礫を含む。(下田大真)

板状のもの(15)は、長径9.5cm、短径7.8cm、厚さ1.0cmで楕円形を呈する。下面は糸切り痕が残り、上面はコテの押圧が行われ、側面全体が磨滅することから、匣鉢の底部を加工したものと思われる。上面は剥離痕や指ナデ痕があり、鉄釉が付着するが、下面には釉薬の付着や剥離痕がみられない。無釉でやや粗目の胎土をしており、0.5cm程の小石を含む。(福田治也)

4. ハサミ皿 (42～45)

ハサミ皿は、器高2.1cm、口径10.7cm、底径5.3cm前後である。糸切り痕が残る平底で、体部は直線的に開き、口縁端部は薄く仕上げられるものが多い。体部外面にはロクロ目が認められ、内面にはコテで押圧され、口縁部は回転ナデ調整が施される。43は体部内面に輪ドチの痕跡が認められる。いずれも無釉で、やや粗めの胎土が使用され、0.1～0.5cmの鉄分の噴き出しや礫を含む。(子安優翼)

5. 輪ドチ (47～56)

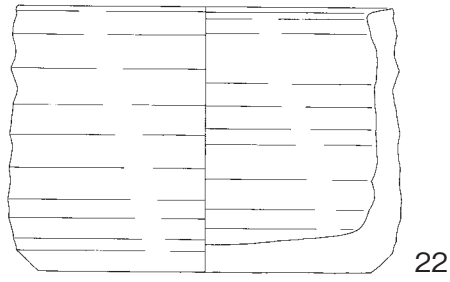
輪ドチは、製品を重ね焼きする際に溶着を防止するために使用されたものである。高さ0.7～1.0cm、直径は47～55が3.4～4.1cm、56が5.5cmと大形である。粘土を紐状に延ばし輪状にしたもので手捏ね成形である。50・54には、直径3.0～3.5cmの高台の痕跡が残っており、小碗などの下に敷かれたものと思われる。0.1～0.4cm大の鉄分の噴き出しがみられ、無釉で密な胎土が使用されている。(坂井航)

6. 長脚ピン (16～21)

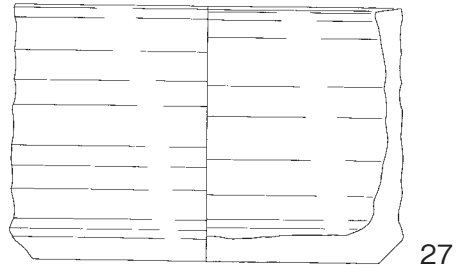
長脚ピンは3個一組にして匣鉢内に入れ、その上にハサミ皿を載せ全面施釉の小皿類を上下2段で焼成するためのものである。ハサミ皿を載せるための張り出し部(横ピン部)と長脚部からなる。16～19・21の高さは4.1cm前後、張り出し部の幅は3.0cm前後、20はやや大形で高さ5.0cm、幅3.5cmである。指圧痕がみられることから手捏ね成形で、張り出し部は上面と下面を指で押さえており、断面形はくちばし状になっている。外面(平面図の裏面)には匣鉢の体部内面下方に接着させた際のロクロ目がみられる。無釉で破断面は薄茶色を呈し、胎土に0.1～0.3cm大の礫を含む。(加藤 怜・高野夏姫)

7. 焼台 (46)

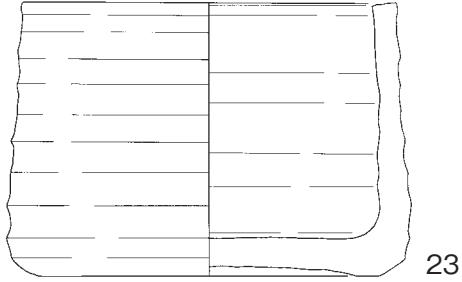
焼台とは、傾斜のある焼成室床面に水平面を作り、製品や匣鉢を積み重ねるために置かれた粘土塊である。上面の径は10.5cm、床面傾斜が24°である。1.0～2.0cm大の礫を含むやや粗目の胎土が使用され、



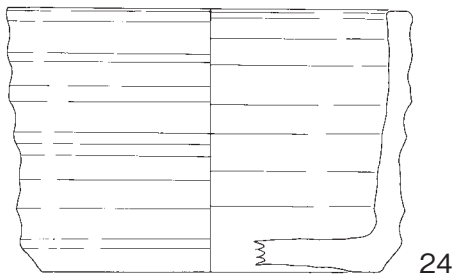
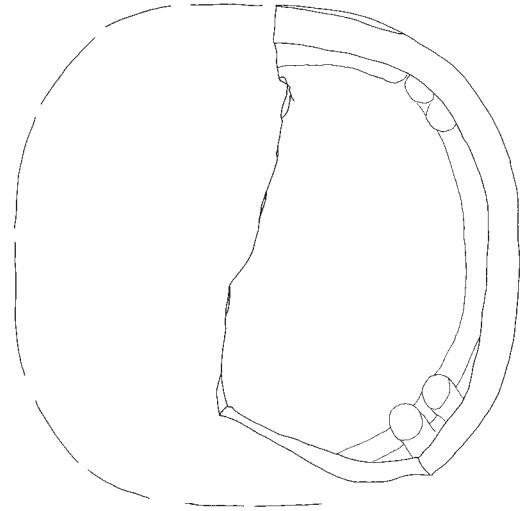
22



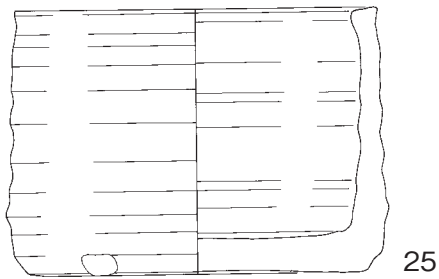
27



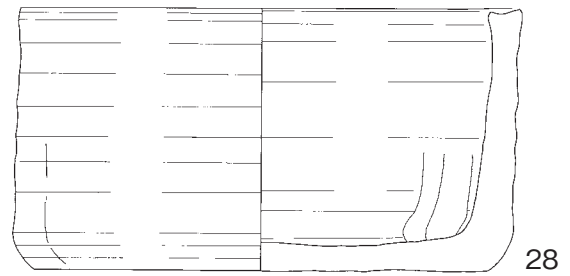
23



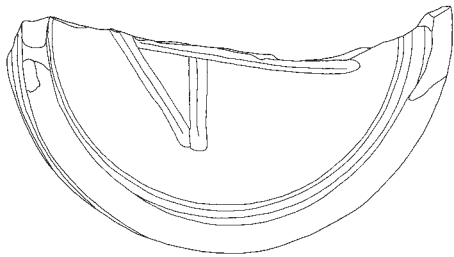
24



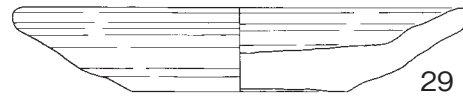
25



28



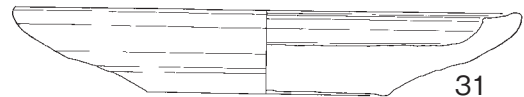
26



29



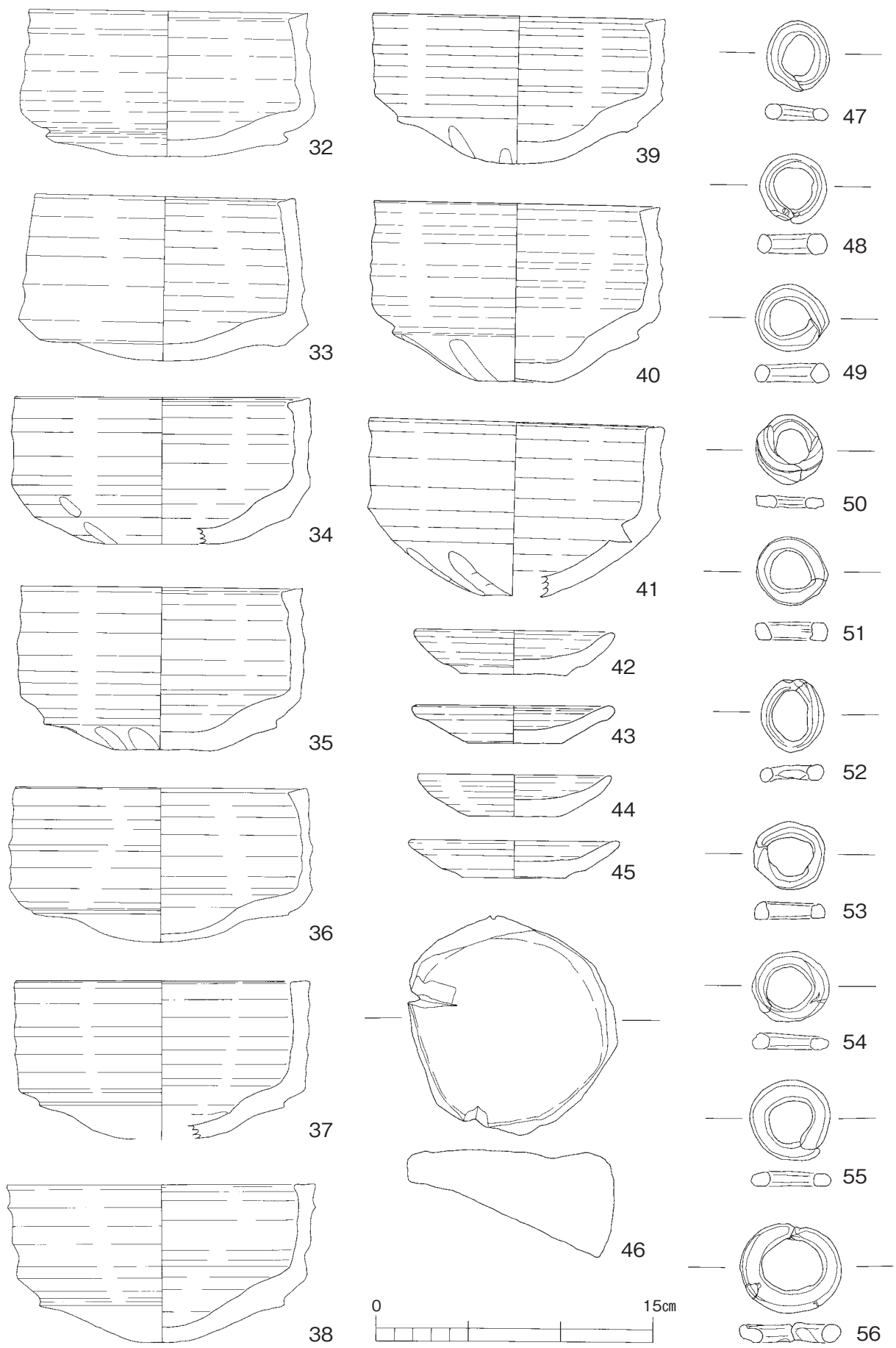
30



31



第2図 牟田洞窯跡第2次調査3グリット出土窯道具類 (2)



第3図 牟田洞窯跡第2次調査3グリット出土窯道具類 (3)

側面に自然釉が掛かり破断面は薄茶色を呈する。(福田治也)

おわりに

牟田洞1号窯に付随する作業場と考えられる第2次調査3グリッドの出土遺物には、志野製品がほとんど認められず、その他の器種にも大窯第4段階後半と確実にいえるものがないことから、大窯第3段階後半から第4段階前半(16世紀後葉)に位置付けられている(愛知学院大学2016)。今回報告した窯道具類においても、大窯第4段階前半に登場する丸底匣鉢が一定量出土するのに対して、第4段階後半に出現する円錐ピンが出土していないことから、第4段階前半を中心とする一括性の高い窯道具類といえる。ここでは匣鉢詰め方法について纏めておく。

平底匣鉢のI類は、輪ドチを敷き全面施釉の丸皿を単独で焼成している。II類は器高が低いため長脚ピンやハサミ皿を使用することが不可能であり、3グリッドにおける製品の重ね焼きの出土例からみて、折縁皿を数枚と丸皿1枚を輪ドチで挟んで直接重ね焼いたものと思われる。それに対してIII類・IV類は器高が高いため、長脚ピンとハサミ皿を組み合わせ上下2段で全面施釉の小皿類を焼成することが可能である。ただし、長脚ピンやハサミ皿の出土数の少なさから、II類と同様、小皿類の直接重ね焼きにも多用されたものと思われる。V類は、形状から向付製品を入れて焼成された可能性が高い。丸底匣鉢では、輪ドチを敷き天目茶碗を単独で焼成している。

ところで、丸底匣鉢や匣鉢蓋・輪ドチなどは、同じ大萱窯跡群の初期連房式登窯である弥七田窯跡でも出土している。弥七田窯跡では、丸底匣鉢は底部が突出し掌痕が明瞭なものが、匣鉢蓋は小判形が主体となっており、3グリッドのものとは大きく異なる。また弥七田窯跡では、3グリッドでみられた平底匣鉢、長脚ピンやハサミ皿は出土していない(愛知学院大学2018)。今後とも窯道具の変遷には注視してゆく必要がある。

最後に、3グリッドでは、匣鉢詰め用の窯道具以外では焼台が3個とハリが48個出土している(表1)。ハリとは積み重ねて窯詰めされた匣鉢が、焼成時に倒壊しないように匣鉢と匣鉢の間を固定する粘土塊で、粘土の状態を固定するため一旦焼成されると収縮し固まり(凝固し)再利用できないものである。出土数の多さからみて、窯出しはハリが付着したまま行われた可能性が高く、第2次調査3グリッドは窯出し後に選別を行った空間であった可能性が高い。(高野夏姫・藤澤良祐)

表1
3グリッド窯道具類個体数表

器種名		個体数
平底匣鉢	I～IV類	21
	V類	1
丸底匣鉢		11
匣鉢蓋	皿状	3
	板状	2
ハサミ皿		6
輪ドチ		28
長脚ピン		22
焼台		3
ハリ		48
合計		145

※ヨリ輪を除く

引用・参考文献

- 愛知学院大学文学部歴史学科2016『大萱窯跡群牟田洞窯跡第1・2次発掘調査概要報告書』
- 長江真和他2016『大萱古窯跡群発掘調査報告書I』可児市教育委員会
- 愛知学院大学文学部歴史学科2017『大萱窯跡群弥七田窯跡第1次発掘調査概要報告書』
- 愛知学院大学文学部歴史学科2018『大萱窯跡群弥七田窯跡第1・2次発掘調査概要報告書』
- 長江真和他2018『大萱古窯跡群発掘調査報告書II』可児市教育委員会

表2 牟田洞窯跡第2次調査3グリッドの窯道具類計測表

図	器種	分類	法量 (cm)			注記番号	口縁残 存率%	底部残 存率%	釉薬	備考
			器高	口径	底径					
1	平底匣鉢	I類	4.8	13.2	8.2	No.15	45	85	無	内部に輪ドチの付着あり
2	平底匣鉢	II類	6.6	12.2	12.4	MT2A	5	50	無	「千」の窯印あり
3	平底匣鉢	II類	7.8	14.0	12.4	No.12	30	50	無	
4	平底匣鉢	II類	7.3	15.8	13.0	No.15	40	50	無	ヨリ輪付着あり・鉄釉?付着
5	平底匣鉢	III類	8.5	15.6	13.4	MT2C・MT2D	50	60	無	輪ドチ痕あり
6	平底匣鉢	II類	7.9	14.6	12.0	No.22	35	30	無	
7	平底匣鉢	II類	7.5	15.9	13.2	MT2C・MT2F	50	70	無	自然釉
8	平底匣鉢	II類	7.5	17.2	15.0	MT2A	25	25	無	自然釉
9	平底匣鉢	IV類	10.4	14.4	11.0	No.15	25	20	無	自然釉
10	平底匣鉢	IV類	9.8	15.0	13.4	No.28	30	40	無	
11	平底匣鉢	IV類	10.5	14.8	13.2	No.34	100	100	無	
12	平底匣鉢	III類	8.5	15.0	13.3	MT2B	45	50	無	
13	平底匣鉢	IV類	10.3	15.4	13.4	No.9	20	50	無	自然釉
14	平底匣鉢	II類	7.0	17.4	14.8	No.8	40	50	無	
15	匣鉢蓋	板状	8.3	11.6	—	D 3 No.32	80	100	無	焼成不足・長石付着
16	長脚ピン	—	3.5	3.1	—	No.3	—	—	無	
17	長脚ピン	—	4.1	2.9	—	No.3	—	—	無	
18	長脚ピン	—	4.1	3.0	—	No.4	—	—	無	
19	長脚ピン	—	4.7	2.9	—	MT2	—	—	無	
20	長脚ピン	—	5.0	3.2	—	No.5	—	—	無	
21	長脚ピン	—	4.0	3.1	—	No.19	—	—	無	
22	平底匣鉢	IV類	10.4	14.8	13.2	No.32	40	40	無	
23	平底匣鉢	IV類	10.7	14.6	13.2	No.4	50	45	無	自然釉
24	平底匣鉢	IV類	10.2	16.0	13.4	MT2B・MT2C	45	40	無	ヨリ輪痕あり・自然釉
25	平底匣鉢	IV類	10.4	14.4	13.5	MT2F	40	65	無	輪ドチ痕あり
26	平底匣鉢	IV類	9.4	17.4	15.4	No.12	40	40	無	内面に「千」の窯印
27	平底匣鉢	IV類	10.0	15.2	13.7	No.33	100	100	無	
28	平底匣鉢	V類	10.5	19.5	16.6×9.0	No.1	—	—	無	自然釉
29	匣鉢蓋	皿状	3.3	17.4	8.6	No.7	15	30	無	
30	匣鉢蓋	皿状	2.9	18.2	9.4	No.19	10	90	無	
31	匣鉢蓋	皿状	3.3	20.0	9.8	MT2E	30	—	無	
32	丸底匣鉢	—	7.8	15.0	13.0	MT23G	50	100	無	
33	丸底匣鉢	—	8.7	14.0	13.2	MT23G	20	50	無	内部に鉄釉付着、輪ドチ痕あり
34	丸底匣鉢	—	7.7	15.8	13.8	MT23GNo.18	20	30	無	内部に鉄釉付着、輪ドチ痕あり
35	丸底匣鉢	—	8.6	15.2	13.2	MT2B	30	100	無	
36	丸底匣鉢	—	8.3	15.7	13.7	MT23G② No.77?	90	100	無	
37	丸底匣鉢	—	8.5	15.8	13.3	MT2C	20	30	無	
38	丸底匣鉢	—	8.5	16.6	13.2	MT23GNo.30	40	55	無	
39	丸底匣鉢	—	7.9	15.7	13.0	MT2B	55	100	無	自然釉
40	丸底匣鉢	—	9.5	15.4	13.2	MT2E	50	100	無	
41	丸底匣鉢	—	9.2	15.8	13.2	MT23GNo.23?33?	40	40	無	
42	ハサミ皿	—	2.3	10.5	5.7	MT2	90	100	無	
43	ハサミ皿	—	2.0	11.0	5.0	MT2A	30	100	無	輪ドチ痕あり
44	ハサミ皿	—	2.2	10.4	4.9	MT2F	5	100	無	焼成不足
45	ハサミ皿	—	2.0	11.1	5.6	MT2A	80	100	無	
46	焼台	—	1.4、5.4	10.5	—	MT23GNo.9	95	100	無	自然釉
47	輪ドチ	—	0.7~1.1	3.4	—	MT23GNo.18	100	100	無	
48	輪ドチ	—	1.0~1.1	3.7	—	MT23GNo.8	100	100	無	
49	輪ドチ	—	0.9~1.0	4.1	—	MT23GNo.12	100	100	無	
50	輪ドチ	—	1.0~1.1	3.8	—	MT23GNo.12	100	100	無	高台の痕あり
51	輪ドチ	—	0.9	3.9	—	MT23GNo.9	100	100	無	
52	輪ドチ	—	0.8	3.4	—	MT2	100	100	無	
53	輪ドチ	—	0.8~1.0	3.8	—	MT23GNo.10	100	100	無	
54	輪ドチ	—	0.7~0.9	4.1	—	MT2A	100	100	無	
55	輪ドチ	—	0.7~0.8	4.3	—	MT23GNo.19	100	100	無	
56	輪ドチ	—	1.0	5.5	—	MT23G② No.27	100	100	無	



調査前 1号窯・2号窯 (西から)



調査前 2号窯 (東から)



調査前 1号窯・3号窯全景 (西から)



調査前 1号窯 (東から)



調査前 2号窯 (西から)



Aトレンチ 調査前 全景 (北から)

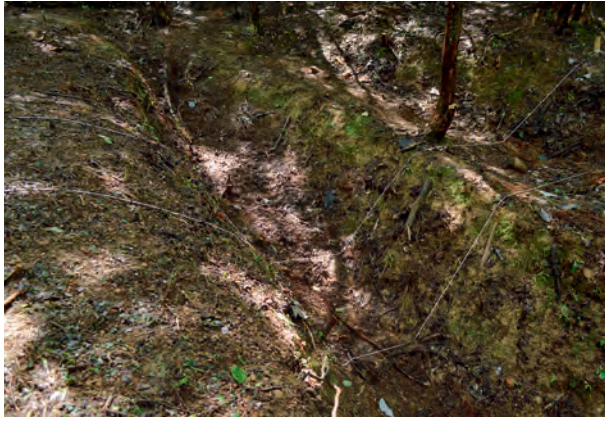


調査前 1号窯 (西から)



Aトレンチ 1号窯・2号窯付近 (西から)

図版1 古城山窯跡遺構写真(1)



A トレンチ 調査前 1号窯付近 (北西から)



A トレンチ 南側 (西から)



A トレンチ 北側 (西から)



B トレンチ 調査前 2号窯付近 (南西から)



A トレンチ 2号窯 (西から)



B トレンチ 1号窯付近 (南西から)



A トレンチ 1号窯 (西から)



B トレンチ 北側 (西から)

図版2 古城山窯跡遺構写真 (2)



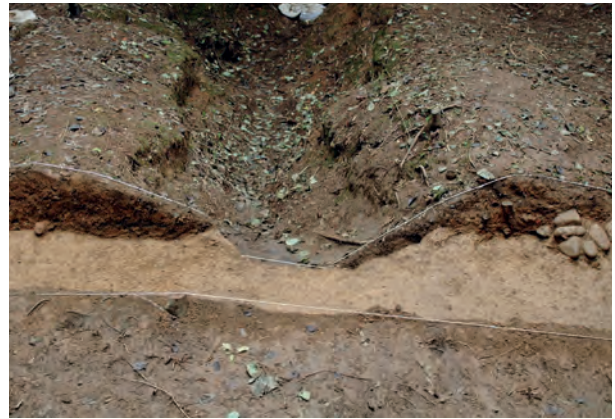
B トレンチ 2号窯付近 (西から)



C トレンチ 全景 (北から)



B トレンチ 1号窯付近 (西から)



C トレンチ 2号窯周辺 (西から)



B トレンチ 南側完掘後 (西から)



C トレンチ 2号窯焚口か (東から)



C トレンチ 調査前 全景 (北から)

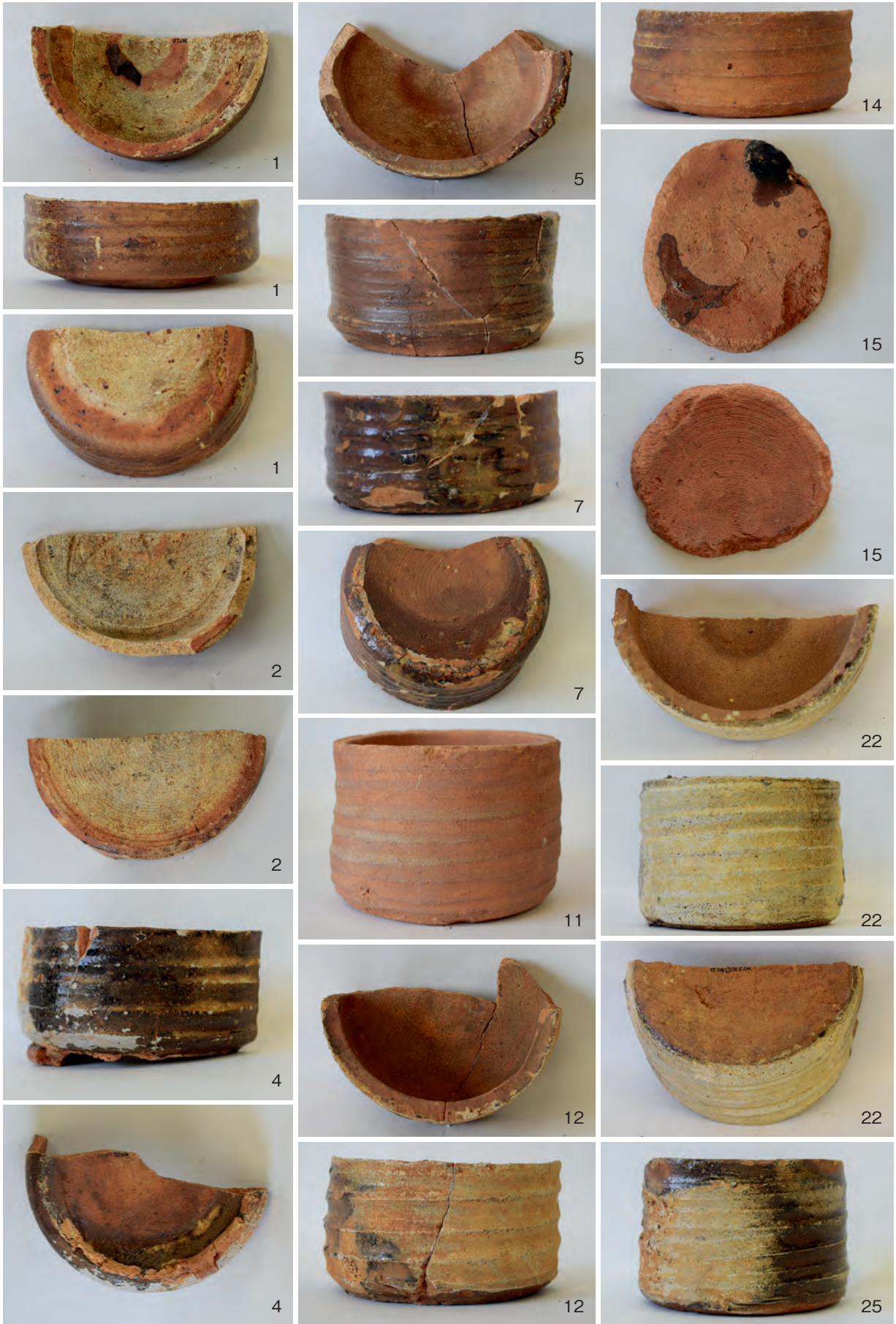


C トレンチ SX01 (西から)

図版3 古城山窯跡遺構写真(3)



图版4 古城山窯跡遺物写真



図版5 牟田洞窯跡第2次調査3グリッド出土窯道具類（1）



図版6 牟田洞窯跡第2次調査3グリッド出土窯道具類(2)



図版5 牟田洞窯跡第2次調査3グリッド出土窯道具類 (3)

報 告 書 抄 録

ふりがな	こじょうごんかまあと							
書名	古城山窯跡第1次調査発掘調査概要報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知学院大学考古学発掘調査報告							
シリーズ番号	28							
編著者名	藤澤良祐・山本智子・森まどか・高野夏姫・赤山純里・猪飼充・大森裕朗 大矢敬子・糟谷貴幸・川端ちえ美・田浦舞衣・西森睦月・安田彩音・山田紗希 加藤怜・子安優翼・坂井航・下田大真・福田治也・万年美紀・山田美咲							
編集機関	愛知学院大学文学部歴史学科							
所在地	〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12 TEL 0561-73-1111							
発行年月日	平成31年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
古城山窯跡	岐阜県可児市 兼山古城山 1418番10・11	21214	4476	35度 27分 19秒	137度 06分 27秒	20170814~ 20170827	約41.4㎡	学術研究
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
古城山古窯跡	生産遺跡	鎌倉時代	窯体2基 (1号窯) (2号窯)		甕・片口鉢・焼台			

広久手F窯跡

窯体再実測および範囲確認調査報告

目次

はじめに	71
1. 立地と環境	71
2. 瀬戸窯広久手地区の研究史	72
3. 発掘調査の経過（発掘調査日誌）	74
(1) 第1次調査	74
(2) 第2次調査	75
4. 検出された遺構	76
(1) 窯体部	76
(2) A トレンチ	80
(3) B トレンチ	80
5. 出土遺物の概要	80
(1) 椀類	80
(2) 皿類	82
(3) その他	82
6. 小結	84
(1) 遺構	84
(2) 遺物	85
おわりに	85
引用参考文献	86
写真図版	89

例 言

- 1 本書は、瀬戸市広久手町1（海上の森内）に所在する広久手F窯跡の窯体再実測および範囲確認調査の概要報告書である。
- 2 発掘調査は、瀬戸市教育委員会の指導のもと、愛知学院大学文学部教授藤澤良祐および同文学研究科大学院生森まどかを担当者として、文学研究科研究員山本智子、同大学院生の林麦人・伊藤真央・高野夏姫、学部生の脇田遼・加藤竜生・井上雄介・大森裕朗の参加のもと、平成30年2月8日から2月17日にかけて第1次調査を実施した。
第2次調査は、学部2年次の大平悠希・荻野貴史・梶浦剛史・加藤悠華・栗山美里・杉村有亮・洲崎拓真・寺井崇浩・兵藤美江・水野啓吾・森本帆乃夏、学部4年次の大森裕朗・安田彩音の参加のもと、平成30年8月13日から19日にかけて実施した。
- 3 発掘調査にあたっては、調査区域となる県有地を管理している海上の森センターの小林 敬・大村宏・澤田正明・杉崎千恵氏には、調査に対してご理解をいただき格別に便宜を図っていただいた。また、瀬戸市文化課の服部郁・佐野元、瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センターの岡本直久・松澤和人・河合君近氏には調査に対し貴重なご助言・ご指導をいただいた。なお、発掘調査には本学非常勤講師の中野晴久氏、本学歴史考古学専攻卒業生の石川博堂・森村知幸氏の参加を得た。
- 4 出土遺物の整理は平成30年9月から平成31年1月にかけて実施し、本書の執筆・編集は森が行った。
- 5 発掘調査に関わる記録類および出土遺物は、愛知学院大学文学部歴史学科考古学整理室に保管している。

はじめに

現在、瀬戸窯広久手地区の灰釉陶器は、猿投窯の古代灰釉陶器生産が10世紀を境に衰退し、窯の数が減少していくのに代わり、美濃国の東濃窯と同様に10～11世紀の灰釉陶器生産を担っていくことが知られている。また、猿投窯編年の10～11世紀の標式窯に当てられるなど、灰釉陶器末期の窯として注目される重要な資料である。しかし、百代寺窯式の標式窯とされている広久手E窯、広久手F窯、百代寺窯は1960年代前半に調査が行われたこともあり、精密な調査図面が残されているとは言い難い。今回、瀬戸市教育委員会および瀬戸市文化財埋蔵センターの協力のもと、その一つである広久手F窯跡の窯体の再実測および周辺の調査を行う機会を頂いた。今後の研究が発展するよう、調査成果を提示したい。

1. 立地と環境

広久手F窯跡の位置する愛知県瀬戸市は旧尾張国の北東部に位置し、西は尾張旭市・名古屋市・春日井市、南に長久手市、東に豊田市、さらに北側では岐阜県多治見市・土岐市に接している。

瀬戸市東部には尾張国・三河国・美濃国にまたがる三国山（標高701m）や猿投窯（標高629m）を中心として東部山地がそびえ、そこから北部山地へと続いており、これらの内側に標高100～300mの低丘陵地帯が広がる。市内には東部山地を水源とする四つの河川が、北から蛇ヶ洞川、水野川、瀬戸川、矢田川の順で東西に流れており、これらにより開析された丘陵地は北から穴田丘陵、水野丘陵、菱野丘陵、幡山丘陵である。

本窯跡は矢田川南部の幡山丘陵に立地している。幡山丘陵には灰釉陶器末期の窯跡や初期山茶碗を焼成した窯跡が広く分布し、西から大草地区、南山地区、そして広久手地区と呼称される。幡山丘陵内でも灰釉陶器末期窯と初期山茶碗窯はやや立地を異にし、灰釉陶器末期窯は東に位置する広久手地区に多く認められる（図1）。広久手F窯跡はその広久手地区の中でも最も東側に立地する窯跡である。

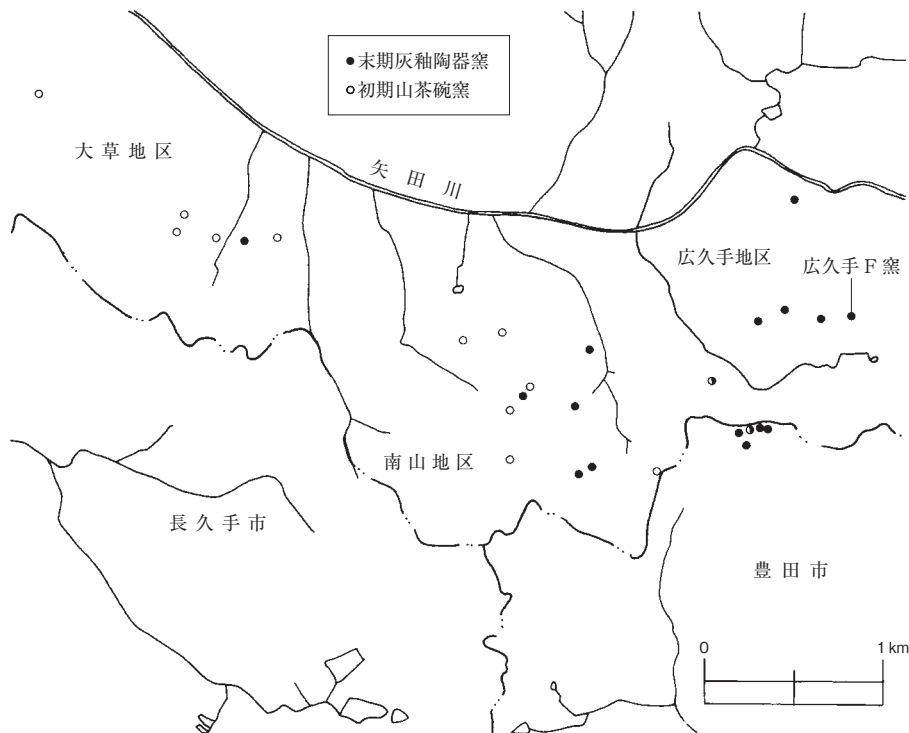


図1 瀬戸窯幡山区南部の末期灰釉陶器・初期山茶碗窯分布図

2. 瀬戸窯広久手地区の研究史

瀬戸窯広久手地区の窯跡について初めて取り上げたのは赤塚幹也氏である。赤塚氏は灰釉陶器の椀から山茶碗へと変化していくことを想定し、製作技法の精粗から前期の山茶碗を上手、中期の山茶碗を中手、後期の山茶碗を下手の三つに大別し、さらに各々を上級・中級・下級に細分した（赤塚1969）。赤塚氏は、当時発見されていた上手山茶碗を焼成した広久手1号窯（後のC1号窯）、広久手2号窯（後のC3号窯）、広久手E窯、広久手F窯、百代寺窯の5窯について、最初に操業されたのは1号窯であり、少し間を経て2号窯が、その後E窯・F窯・百代寺窯の3窯がそれぞれ操業し始めたことを述べている。そして、上手中級期を過ぎるまでには、1号窯を除く4窯は転出してそこでの操業を終了するが、1号窯のみ中手上級期まで操業を続けていたと推測した。

また田中稔氏は、広久手E窯の灰釉陶器を山茶碗の系列に位置付けて、尾張・三河の山茶碗を広久手E様式・大アラコ様式・社山様式・石根様式・露根様式・山新田様式の6様式に設定し（田中1957）、広久手E窯を山茶碗の初源に位置付けている。

広久手F窯跡の発掘調査は、1963年に宮石宗弘氏を中心とした瀬戸市教職員考土サークルによって行われ、その際の調査では窯体部と灰原が発掘され、それぞれ遺構と遺物に関して報告がなされている

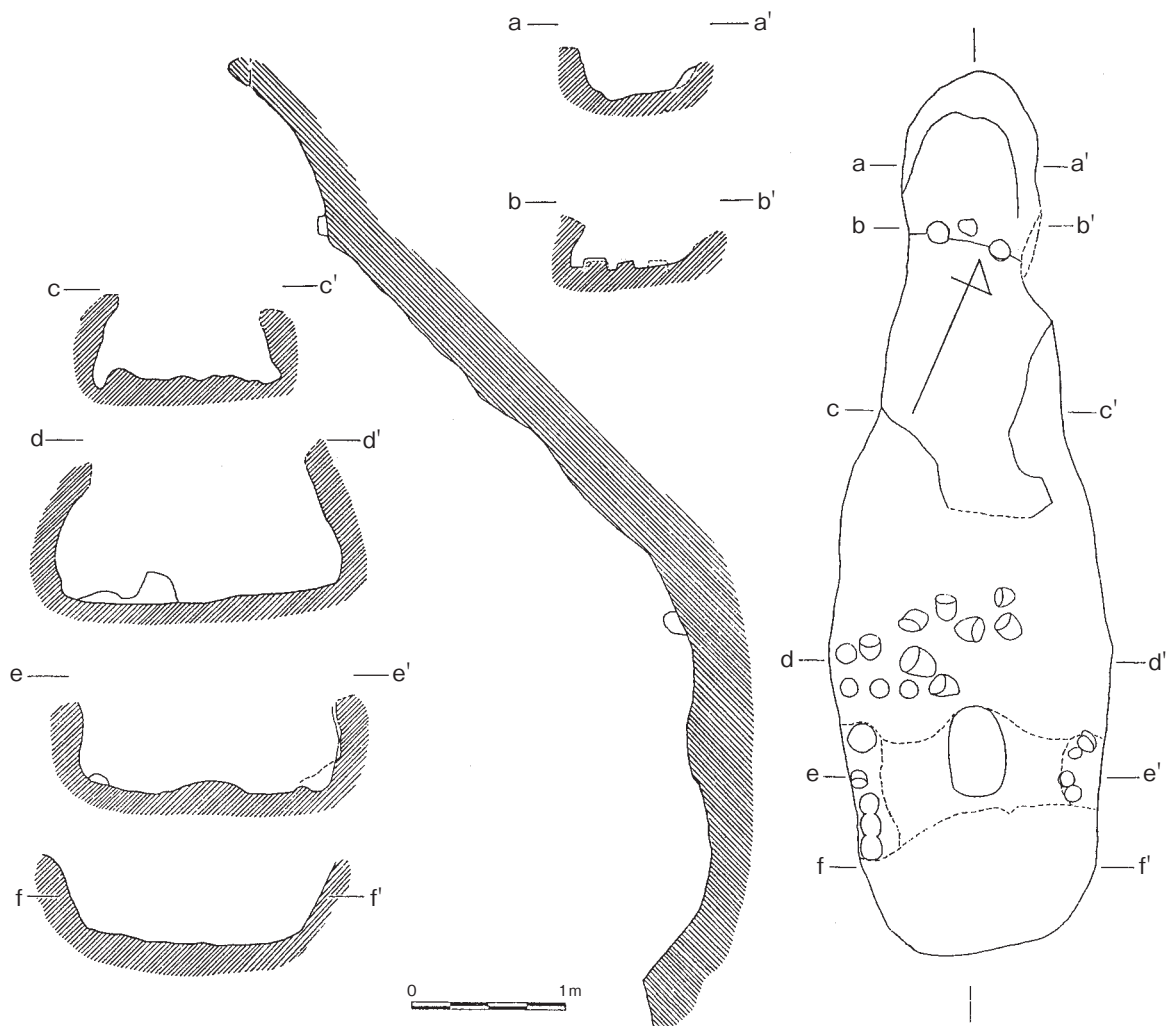


図2 昭和36年調査時窯体実測図

(水野・小川他1966)。窯体は全長5.6m、最大幅1.8m、傾斜角約50°で、東向き斜面に造られており、天井や分炎柱は既に壊れていたが、焼成室に不規則な起伏があること、焚口部の前端が盛り上がっていることなどが述べられている(図2)。灰原は南北7m、東西10mに広がり、発見時より露出状態であったためか、酷く荒らされていたという。遺物は大型碗・輪花碗・小形碗・縁付皿・耳皿・縄手付長頸壺・大型盤が紹介されており、施釉が確認されている。遺物の年代観は、渥美半島の大アラコ窯出土のものと同様、技法ともに酷似していることからこれらに並行する考えを示している。

その後、灰釉陶器研究は猿投窯を中心に行われていくことになり、瀬戸の灰釉陶器窯は猿投窯の一部という認識のもとに、評価されることがなくなっていく。広久手地区の灰釉陶器は山茶碗の始まりとして田中氏や赤塚氏など一部の研究者には注目されていたが、両氏の研究は引き継がれなくなってしまった。

ところで、尾張における古代灰釉陶器の編年は1961年に榑崎彰一氏により猿投窯編年として確立された。当時、灰釉陶器は黒笹14号窯式・黒笹90号窯式・折戸53号窯式の3小期に区分され(榑崎1961)、この際には、広久手地区の灰釉陶器は知られていたものの、猿投窯の本流としては認められておらず、編年には位置付けられていなかった。

しかしその後、愛知県の古窯分布調査およびその報告が齊藤孝正氏や藤澤良祐氏らによって行われ(榑崎他1981)、さらに藤澤氏は分布調査報告書には載せていなかった広久手C1号窯の資料や広久手C3号・E・F窯および百代寺窯のより多くの資料の提示を行った(藤澤1982)。その結果として、灰釉陶器末期様相を示す良好な資料として見直されるようになる。

また1970年代に、高島忠平氏によって平城京の発掘調査によって榑崎氏の編年の年代観がおおよそ100年ずれることが指摘され、その後も消費地遺跡において得られた研究成果によって高島氏の意見に近い見解が示され、支持されていた。こうした年代観の齟齬や、尾北窯や東濃窯の調査・研究が進み猿投窯との併行関係における齟齬を埋めるために、齊藤孝正氏は折戸53号窯式を前期・中期・後期の三つに細分を行った(齊藤1981)。その際に、中期の標式窯として広久手C3号窯を、後期の標式窯として百代寺窯と広久手F窯を取り上げ、広久手地区の灰釉陶器窯が猿投窯の灰釉陶器末期に位置付けられたのである。

さらに同年に、愛知県陶磁資料館でシンポジウムが開かれ、折戸53号窯式以降に新しく鳴海NN82号窯式・百代寺窯式の2窯式を追加し、折戸53号窯式→鳴海NN82号窯式(後に東山72号窯式)→百代寺窯式→白瓷系陶器という新編年が提示された(榑崎・齊藤1981、榑崎1983)。この際、東山72号窯式の実質的な標式窯として広久手C1号窯・C3号窯が示され、百代寺窯式には百代寺窯を始め広久手E窯・F窯が標式窯と挙げられている。

一方で、藤澤良祐氏は瀬戸における灰釉陶器の出現を、中世へとつながる瀬戸窯の初期に位置付けて考察を行っている。藤澤氏は中世瀬戸窯の山茶碗編年を組むに当たり、タイポロジーを重視し型式分類・型式組列を明確にし、田中稔氏と赤塚幹也氏の研究を引き継ぐ形で瀬戸窯の灰釉陶器末期に出現する椀が山茶碗の祖形であること示した(藤澤1982)。そして、形態や製作技法等の特徴から4段階10型式に分類を行い、その内の第1段階は灰釉の施釉が行われている段階で、広久手F窯の椀を第1段階2型式に比定した。齊藤氏と藤澤氏は瀬戸でみられる古代灰釉陶器について、猿投窯に含めるか、瀬戸窯に含めるか考えが異なっているものの、相対的な年代の位置付けでは同じ考えである。

その後、1992年に広久手20号窯の発掘調査が行われ、広久手C1・C3号窯よりも古く、瀬戸窯最古の窯として位置付けられた(藤澤1992)。さらに瀬戸窯の灰釉陶器末期の遺物に関しては、瀬戸市埋蔵

文化財センターの研究紀要において1994年には広久手C1窯跡・同C3窯跡が、1995年には広久手E窯跡・同F窯跡・百代寺窯跡・南山12号窯跡の遺物の報告が詳細に成されている（松澤・河合1994・1995）。また、2001年には広久手30号窯の調査が行われ、広久手30号窯の方が広久手20号窯よりも先に操業を開始し、その後20号窯へと移行したとの見解が出された（青木2001）。

古代灰釉陶器研究では、近年、尾野善裕氏が尾張・西三河・東濃における灰釉陶器生産を「猿投窯系」という概念で捉え、新たな編年観を提示している（尾野2008）。尾野氏は猿投窯・尾北窯・瀬戸窯・東濃窯の4窯について、窯の相対順序や併行関係を示しており、瀬戸窯では広久手30号窯が最も古く、その後に広久手C1・C3号窯や来姓1～3号窯が位置付けられた。しかし、その後はおよそ50年の間を持って、広久手E窯・百代寺窯・広久手F窯等が位置付けられている。

以上のように、広久手の灰釉陶器については遺物による検討がされ続けてきた。しかし、遺構に関しては調査自体が古く、精密な図面が残されていないため、正確な考察がされづらくあった。また、瀬戸窯における灰釉陶器の変遷に関しても、研究者によって編年観が異なり、その結果、瀬戸窯と同じく10・11世紀に盛行する東濃窯との併行関係を求める上で、検討の余地を残すこととなっている。

猿投窯における瀬戸地区は他の地区と明らかに分布を異にしており、中世では独自に発展・盛行することなどから、瀬戸窯の初期として認識できよう。そのため、猿投窯の一部としてではなく、別の窯業地として古代瀬戸窯の編年を見直し、瀬戸窯の成立過程を考察していく必要があるだろう。

今後瀬戸窯のみならず、東海地方における古代灰釉陶器末期の様相を検討していくにあたり、窯体構造を含め、再度検討していく必要があるだろう。そのため、窯体図を正確に取り直し、新たな図面の提示を行う必要が生じてきている。

3. 発掘調査の経過（発掘調査日誌）

（1）第1次調査

平成30年2月8日（木）晴れ

午前9時にあいち海上の森センターに集合し、現地に向けて出発した。到着後、調査前の全景写真を撮影し、周辺の清掃を行った。清掃後、さらに全体の写真を撮影した。そして、窯体の中軸線上に中軸杭を設定し、窯体の中軸杭から東西に1.5mずつ杭を設け、東西3m、南北7.5mの窯体調査区を設定して、煙道部側（北側）から表土剥ぎを開始した。

2月9日（金）晴れ

引き続き表土の除去を行い、窯体外では地山の検出を目指した。窯体内では床面と側壁の検出を目指し腐植土の除去を進めた。窯体外北側では地山が確認されたものの、窯体部脇では層が厚く堆積していたため、検出には至らなかった。

2月10日（土）曇りのち雨

窯体外では地山の検出を目指し、さらに掘り下げを進めた。窯体外南側では地山が検出されたが、昨日に続き窯体部脇の地山の検出には至らず、次回の調査に譲ることとなった。窯体内では床面を検出し、上方では一部床面が剥落していた。側壁では一部に窯壁が残存していた。

2月11日（日）晴れ

窯体外では一応、地山の検出を終了し清掃を開始した。窯体内では床面と側壁の検出を行い、清掃を開始した。清掃終了後、写真撮影を行った。

2月12日(月) 晴れ

図面作成のために、割付けを南北1mごとに行った。割付作業と併行して、地形測量図の作成を行った。

2月14日(水) 曇り

平面図、横断面図、縦断面図および見通し図の実測を開始し、平面図と縦断面図および見通し図はほぼ実測を終了した。

2月15日(木) 曇り

残っていた横断面図および地形測量図の実測を終了させ、土嚢造りを行った。

2月17日(土) 晴れ

午前と午後に行われる現地説明会のために調査区の清掃を行った。現地説明会終了後、遺構保護のため窯内にシートを掛け、土嚢を埋設し発掘現場から撤収した。

(2) 第2次調査

平成30年8月13日(月) 晴れ

午前8時に大学に集合し、発掘道具を積み込んでから広久手F窯跡に向けて出発した。現地に到着後、第1次調査終了後に遺構保護の為に埋設した土嚢およびシートを引き上げ、周辺の木を除去を行った。

8月14日(火) 晴れ

窯体部前方に東西方向1.0×10.0mのトレンチと、南北方向0.5×10.4mのトレンチを設定し、東西トレンチをAトレンチ、南北トレンチをBトレンチとした。さらに、Aトレンチでは窯体の中軸杭から西側をA1トレンチ、中軸からBトレンチと接する幅0.5mのベルトを残して東側をA2トレンチとし、A1トレンチから地山の検出を目指して掘削を開始した。Aトレンチの作業と併行して、第1次調査時に掘り残した窯体部脇の地山の検出を行った。

8月15日(水) 曇りのち雨

Aトレンチでは引き続きA1トレンチの掘り下げを行い、西側で地山面が検出された。A2トレンチでは地山の検出を目指して掘削を開始した。Bトレンチでも同様に、地山の検出を目指して掘削を開始した。窯体部では地山の検出が終了し、土層断面図の作成に取り掛かる。

8月17日(金) 晴れ

A1トレンチでは掘り下げを進め、東側でも地山を検出した。A2トレンチでは西側で一部地山が検出され、東側の腐植土の除去に取り掛かった。Bトレンチでは地山を検出し完掘した。清掃を開始し、

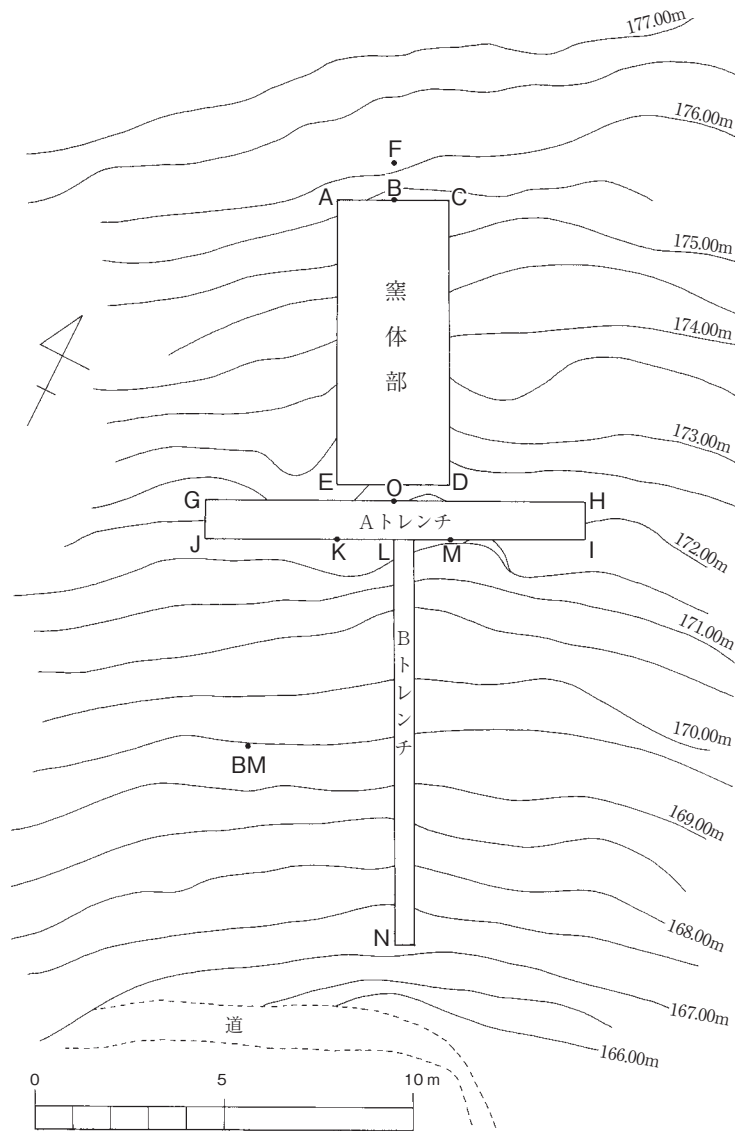


図3 調査区地形測量図

終了後に写真撮影を行った。窯体部では土層断面図が完成した。また、谷側の地形測量図を開始した。
8月18日(土) 晴れ

A1トレンチでは地山の検出が終了し、清掃を開始した。A1トレンチとA2トレンチの間付近で平坦面が検出され、残っていた幅0.5mのベルトを除去し、さらに検出を進めた。A2トレンチでは東側でも地山が検出された。Bトレンチは土層断面図の実測を開始し、完成させた。Bトレンチで灰原らしきものは見当たらなかった。

8月19日(日) 曇り

午前と午後に現地説明会が行われるため、窯体部およびAトレンチとBトレンチの清掃を行った。清掃終了後、各々の完掘写真を撮影した。Aトレンチでは土層断面図と平面図の作成を開始し、完成させた。また地形測量図も終了した。現地説明会終了後、瀬戸市教育委員会の指導のもと、遺構保護のため窯内にシートを掛け、土嚢を埋設し発掘現場から撤収した。

4. 検出された遺構

(1) 窯体部 (図5・6)

本窯は分炎柱を有する窖窯である。地山を溝状に掘り下げ、天井部を架構して半地下式に構築されているが、既に天井部は崩落していた。全長5.6m、最大幅1.7m、傾斜角45°で、平面形による燃烧室・焼成室・煙道部はほぼ良好である。また、床面や側壁は貼床や貼壁が行われているが、大半は剥落していた。分炎柱は崩壊しており、その基底部を僅かに残すのみである。

焚口は燃烧室が掘り込まれていることもあり不明瞭であるが、燃烧室の先端を焚口とすると、幅1.2mあったと考えられ、平面形は燃烧室から比較的真っ直ぐ開いている。なお、焚口中央には直径約75cmの穴が認められ、1963年時の図面には確認されないことから、それ以降に掘られたものである。

燃烧室は、焚口から分炎柱下端までで、床面の長さは0.8m、最大幅は1.3mである。床面の傾斜は、焚口から10°の傾斜で緩やかに分炎柱の方へと下がり、焚口から約20cm奥で水平になって、分炎柱基底部もほぼ水平である。燃烧室は被熱状態が悪く、茶褐色を呈し硬化部分は認められない。また、炭や灰も確認されない。壁面では焚口から20cm奥より、床面から約12cm上方に赤色の被熱部分がみられ、さらに上方には地山が認められる。

分炎柱は基底から僅かに高さ8cmを残すのみである。また、残存している分炎柱の後方も残っていないが、基底部で長径42cm、短径37cmと東西に若干長い楕円形を呈していたと考えられる。造り付けの分炎柱で、分炎孔は左側壁側で幅58cm、右側壁側で幅52cmである。

焼成室は、分炎柱下端付近に焼台がみられることから、分炎柱下端から煙道部との境までを燃烧室とし、床面の長さは3.62mとなる。床面の幅は分炎柱下端の位置で1.51m、その約76cm後方で床面最大幅1.7mとなった後、後方にかけて徐々にすぼまり、煙道部との境で0.74mとなる。床面の傾斜は分炎柱下端から後方に80cmまではほぼ水平だが、それ以降から煙道部との境まで45°という急傾斜となる。床面は、分炎柱下端1.4mまでは一部剥離した部分を除いて貼床が確認されるが、焼成室後方では広く剥落している。側壁はやや内傾して立ち上り、大部分は貼壁が剥離してしまっているが、一部被熱硬化し、自然釉が掛かる壁が残る。剥離した壁面では黄色土の壁裏が確認され、上方に赤色の被熱部分が確認される。さらにその上には地山が認められる。なお、床面との境は丸みを帯びて不明瞭であった。

煙道部は、床面の傾斜角に変化が認められる部分以降と考えられ、焼成室境から煙道部上端までの長

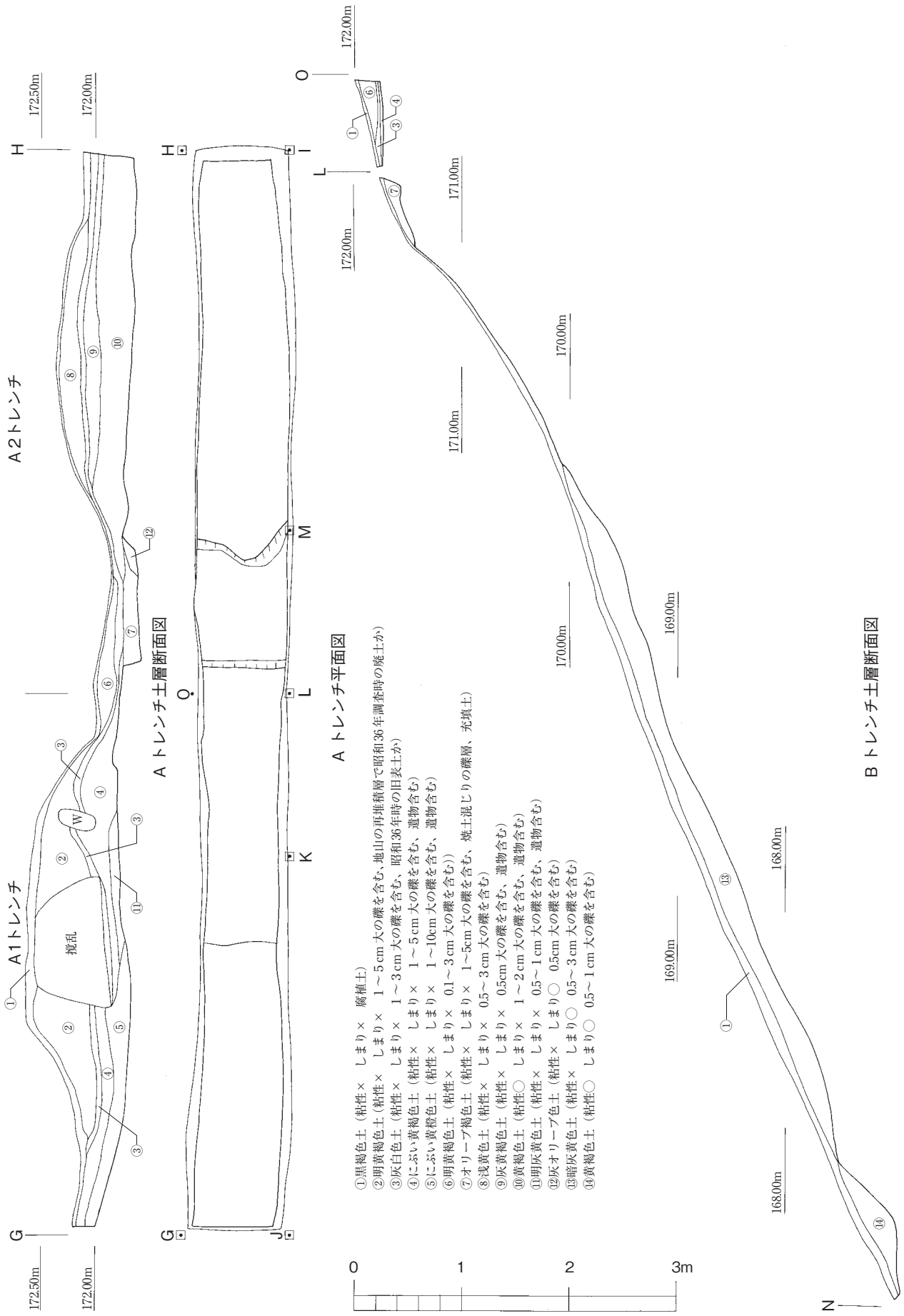


図4 広久手F発跡トレンチ実測図

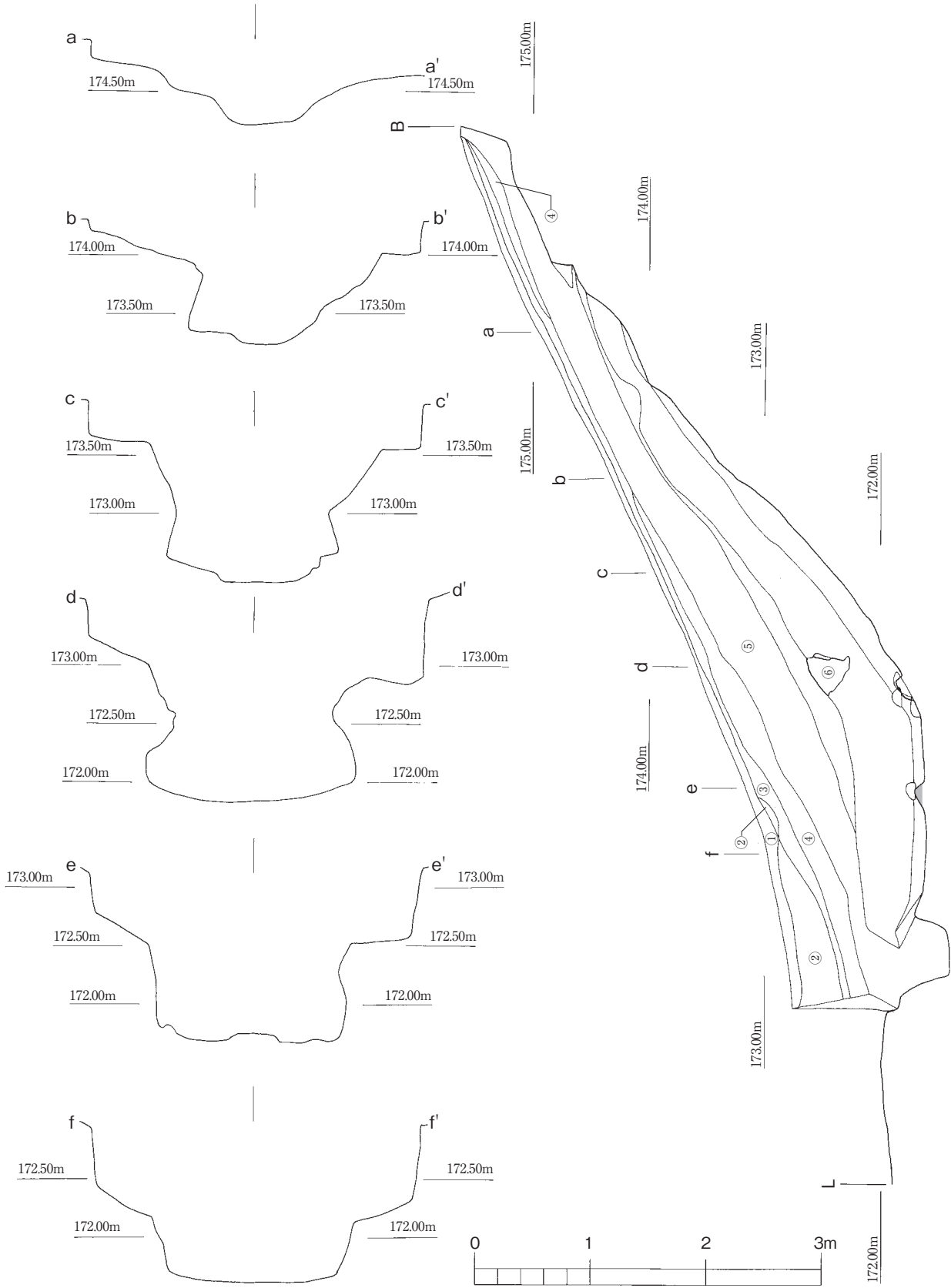


图5 广久手F窯窯体実測図(1)

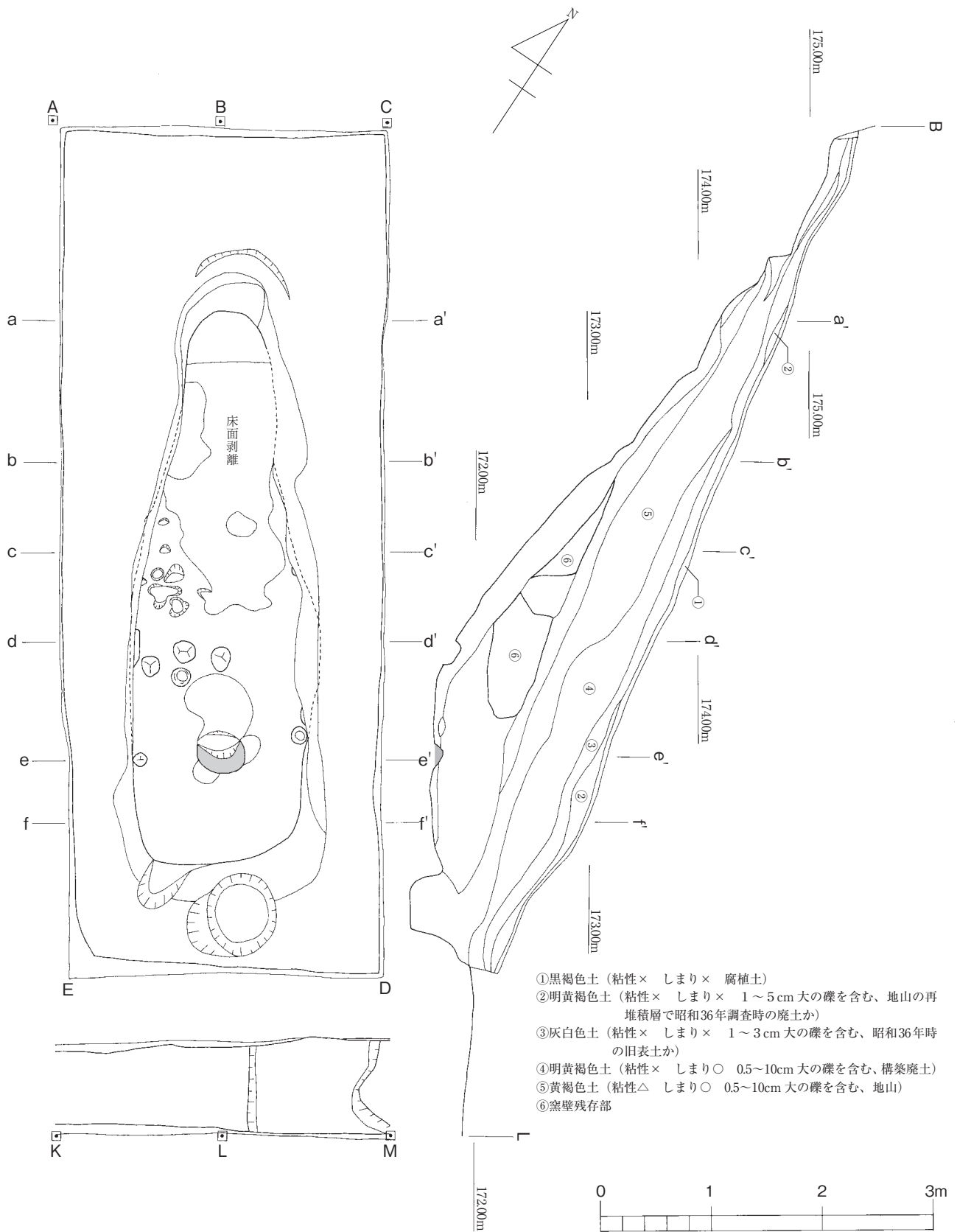


図6 広久手F窯窯体実測図(2)

さが0.8mあり、床面幅は燃焼室との境が最も広い。煙道部の床面は焼成室との境から47cmまでは27°で、その後50°の傾斜で上昇して煙出しへと至っている。床の貼床は剥落し、表面は茶褐色や灰色を呈している。左右の側壁の立ち上がりはごく僅かである。

なお、窯体脇の土層堆積状況は、上層から①腐植土がみられ、②層は明黄褐色土が厚く確認され、地山の再堆積層で昭和36年調査時の廃土、③層は灰白色土で薄く堆積がみられ、昭和36年時の旧表土と考えられる。④層も地山の再堆積層であるが、窯構築時の排土と想定される。⑤層が窯体側壁の赤色の被熱部分上方にみられる地山である。なお、⑥は平安期に構築された窯体の貼壁が確認される部分である。

(2) Aトレンチ (図4)

Aトレンチは前庭部と工房跡の検出を目指して、窯体部の前方に東西10.0m、南北1.0mの調査区を設定した。G地点の標高は172.22m、H地点の標高は172.10mである。M地点から西に3.8mあたりまで平坦面を造るための盛土が確認され、整地を行った痕跡が認められた。

Aトレンチの土層断面図は北壁を提示した。北壁では①～⑫の12層が確認された。A1トレンチでは上層から①層が確認され、②層⑥層と続き、③層・④層・⑪層・⑤層の順番で堆積している。①層は黒色土で現在の腐植土である。②層は明黄褐色土が厚く確認され、地山の再堆積層で昭和36年調査時の廃土、③層は灰白色土で薄く堆積がみられ、昭和36年時の旧表土と考えられる。④層はにぶい黄褐色土、⑤層はにぶい黄橙色土、⑪層は明灰黄色土でいずれも遺物含む。⑥層はA1トレンチとA2トレンチの中心に堆積しており、明黄褐色土である。なお、A1トレンチの②③④層は盗掘により攪乱している。

A2トレンチではA1トレンチ同様に上層に①層が確認され、次いで⑧層・③層・⑨層・⑩層の順番で堆積しており、③⑩層の下から⑦層と⑫層を検出した。⑧層は浅黄色土で、③層上層に堆積していることから②層と同様、昭和36年調査時の廃土と思われる。⑨層は灰黄褐色土、⑩層は黄褐色土で、いずれも遺物含む。⑦層はオリーブ褐色土で焼土混じりの礫層である。⑫層は灰オリーブ色土で、⑦⑫層は整地した際の充填土である。

(3) Bトレンチ (図4)

Bトレンチは物原の範囲確認のため、L地点から東に0.5m、南北に10.4mの調査区を設定した。L地点は標高171.80mで、N地点は標高166.96mである。遺物は表採のみで、出土しておらず、物原は確認されなかった。

Bトレンチの土層断面図は西壁を提示した。西壁では①⑦⑬⑭層の4層が確認された。上層には①層の腐植土が確認され、上層から①層が確認され、L地点付近ではAトレンチに確認された⑦層の充填土がみられる。その下方では地山直上に①腐植土が薄く堆積し、中央付近では①層下に③層暗灰黄色土を、N地点付近では⑭層黄褐色土が確認された。なお、遺物はいずれも検出されていない。

さらにBトレンチ西壁の延長で、AトレンチのL地点とO地点の土層断面図も提示した。上層から①層・⑥層・③層・④層が確認されたが、⑥③④層はBトレンチ西壁には確認できず、平坦面上に堆積した層である。

5. 出土遺物の概要

(1) 椀類 (図7・8・9)

椀類は付高台で、底部外面には回転糸切り痕が残る。体部外面はロクロ目が残り、体部内面はコテによって調整がされ、口縁部は回転ナデ調整が行われている。施釉が確認されるものは、漬け掛けによっ

て施されている。胎土は密や緻密なものが使用され、0.1～1.0cm 大の黒斑が認められる。器表・破断面は焼成不良のものは淡黄色を、焼成良好のものは灰白色や灰色を呈している。椀類には椀・輪花椀・沈線をもつ椀・玉縁椀・小椀がある。

①椀(1～22)

椀は器高5.35～6.2cm、口径15.1～17.5cm、高台径6.1～7.6cmで、体部外面はやや丸みをもって開き、口縁部は丸く収められる。椀は高台の形状からA～C類の三つに分類される。A類(2・

4～8)は高台の内側が外傾し外側がほぼ直立するもので、高台端部が尖る断面三角形を呈する。口縁部は僅かに外反する。B類は高台の内外側が外傾し、端部が丸く収められるものである。B類はさらに口縁部の調整から1類と2類に細分される。B1類(9～16)はA類と同じく口縁部が僅かに外反するものである。B2類(17～19)は口縁直下が強くと締められ、大きく外反するものである。C類(3・20～22)は内外側が外傾し、細く高い高台をもつものである。

3～6・9～16・18～21には確実に施釉が行われており、1・2・7・8・17は不明で、22は施釉されている可能性がある。2～5・7・9～16・18は底部内面に重ね焼きによる高台痕が確認され、6・17は内面全面に自然釉とボロが付着しており天場で焼成されたものと思われる。

②輪花椀(37～39)

輪花椀は高台から口縁部まで残存するものはなく、口縁部周辺のみが認められた。口径15.4～17.0cmで、体部はやや丸みをもって開き、口縁部は僅かに外反する。37・39には施釉が確認されるが、38は不明である。いずれも口縁残存率が低く、輪花数については不明であるがおそらく四輪花と考えられる。輪花は体部下方から口縁部にかけて、指で摘まんで引き上げられており長く施されている。

③沈線をもつ椀(40・41)

沈線をもつ椀は、口縁部内面に沈線が一周施されるものである。40は口径17.4cm、41は口径13.7cmで、基本的な形態は椀と同じである。口縁部はあまり外反しない。いずれも施釉が行われており、沈線は串状の道具によって付けられている。

④玉縁椀(42～44)

玉縁椀は口縁部外側を回転ナデ調整によって面取りしているものである。高台から口縁部まで残存するものはない。口径15.6～17.4cmで、42・43は体部が玉縁部分まで直線的に開く。44は体部に丸みを持って、玉縁直下でやや締められている。また玉縁の幅が42・43に比して、44は縦に長く作られている。43・44は確実に施釉が認められ、42は不明である。

⑤小椀(23～27)

小椀は全形が判るものはないが、高台周辺部および体部下方から口縁部まで残存するものが確認される。23は口径10.1cmで、体部は丸みをもって立ち上り、口縁直下で締められて口縁部はやや外反する。体部内面には全面に自然釉やボロが付着しており天場で焼成されている。24～27は高台径4.9～5.3cmで、高台の形状は椀のように明瞭に分類出来ないが、24は高台の外側が直立し内側が外傾するやや低いものであるのに対し、25～27は高台の内外側が外傾する細く高いものである。底部内面には重ね焼きの

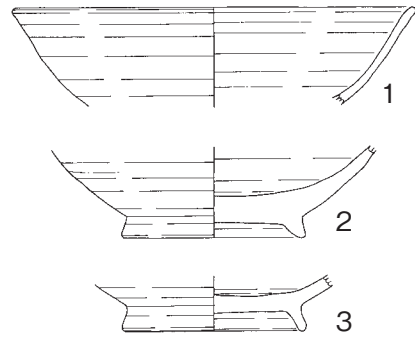


図7 広久手F窯跡第1次調査出土遺物実測図

際の高台痕が確認される。23の体部外面には串状の道具で刻書が施されており、以前の調査で出土した「寺」の一部と考えられる。なお、「寺」だとすると、寺の前に来る名称は確認されない。23・25～27の施釉は不明で、24は無釉と考えられる。胎土内に0.3～0.7cm 大の礫が認められる。

(2) 皿類 (図8)

皿類は付高台で、耳皿を除くと底部外面には回転糸切り痕が残る。体部外面はロクロ目が残り、体部内面はコテによって調整がされ、口縁部は回転ナデ調整が行われている。椀類同様に施釉が確認されるものは、漬け掛けによって施されているが、施釉が明瞭に確認されるものは極めて少ない。胎土は密や緻密なものが使用され、0.1～0.5cm 大の黒斑が認められる。器表・破断面は灰白色や灰色を呈している。皿類には稜皿・折縁皿・玉縁小皿・耳皿がある。

①稜皿 (28～31)

稜皿は体部中央付近から上方に屈曲するものである。28～30は口径10.4～11.4cm で、31は器高2.5cm、口径10.4cm、高台径5.0cm である。31の高台の外側は直立し内側は外傾する。体部外面は直線的に開き、体部中央周辺で上方に屈曲し口縁部まで至る。体部内面は明瞭に稜が作られる。屈曲部から口縁部周辺にかけて回転ナデ調整が施されている。内面の屈曲部には沈線が一周巡る。施釉は28～30は不明で、31は施釉された可能性が認められる。また31の底部内面には重ね焼きによる高台痕が付着している。

②折縁皿 (32)

折縁皿は口縁が大きく外反するものである。口径10.8cm で、体部外面は直線的に開き、口縁部周辺で上方に屈曲し再びに外側に外反する。体部外面下方はロクロ目が残り、口縁部周辺は回転ナデ調整が施されている。施釉は不明である。なお、折縁皿か断定は出来ないが、稜皿とは形状を異にしているため、別器種と考えられる。

③玉縁小皿 (34～36)

玉縁小皿は玉縁椀と同様に、口縁部外側を回転ナデ調整によって面取りしているものである。34は口径10.5cm、35は器高3.0cm、口径12.0cm、高台径6.4cm である。36は高台径5.2cm で、口縁部まで残存していないため断定は出来ないが、体部の開き方が小椀よりも皿類に近く、また稜皿や折縁皿よりも体部が丸みをもって立ち上がっていることから、玉縁小皿とした。高台は内外側ともに外傾しやや細く高いもので、体部外面は丸みをもって口縁部まで至る。35・36は底部内面に重ね焼きによる高台痕が付着している。施釉は34・36は不明で、35は不明瞭であるが外面に僅かに確認される。

④耳皿 (33)

耳皿は皿の体部を2方向から押し、体部下方から内側に直立するようにしたものである。高台径は4.2cm で、内外側が外傾する細く高い高台をもち高台端部は尖る。底部外面から体部下方にかけては回転ナデ調整が行われ、回転糸切り痕は消されている。耳部の体部外面には指跡が確認される。高台端部には重ね焼きの痕跡がみられる。体部外面には施釉の痕跡が確認されるが、天場で焼成されているため内面の釉は不明である。しかし、施釉は漬け掛けによって施されていると考えられる。

(3) その他 (図9)

その他、確認されたものには鉢がある。鉢 (45・46) は全形が判るものは出土しておらず、口縁部周辺および高台部のみが確認された。45は高台径11.8cm で、高台の内外側がやや外傾し端部は丸く収められる。また、高台端部に重ね焼きの痕跡が認められる。46は口径26.2cm で、体部から口縁部に向け

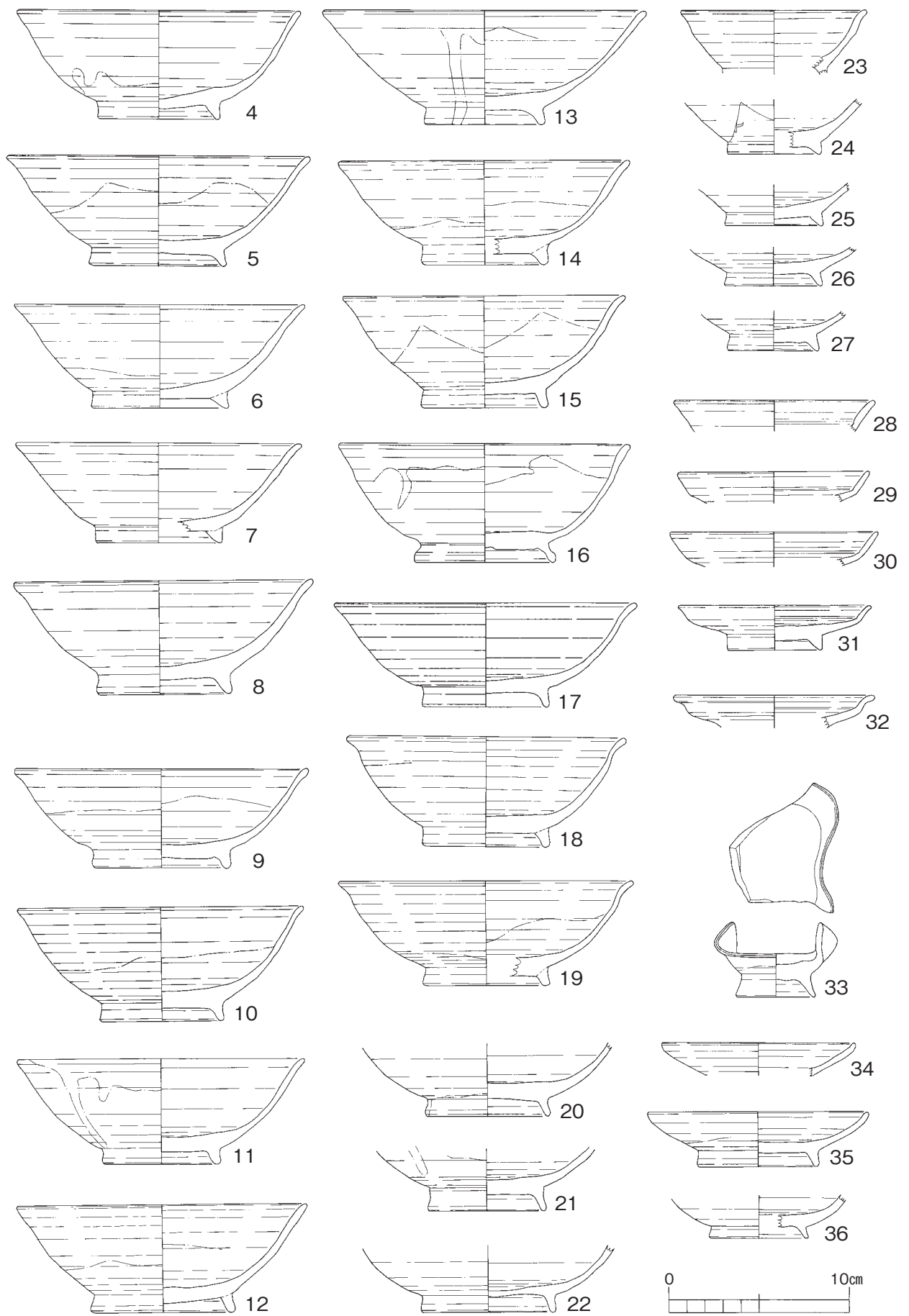


图8 广久手F窯出土遺物実測図(1)

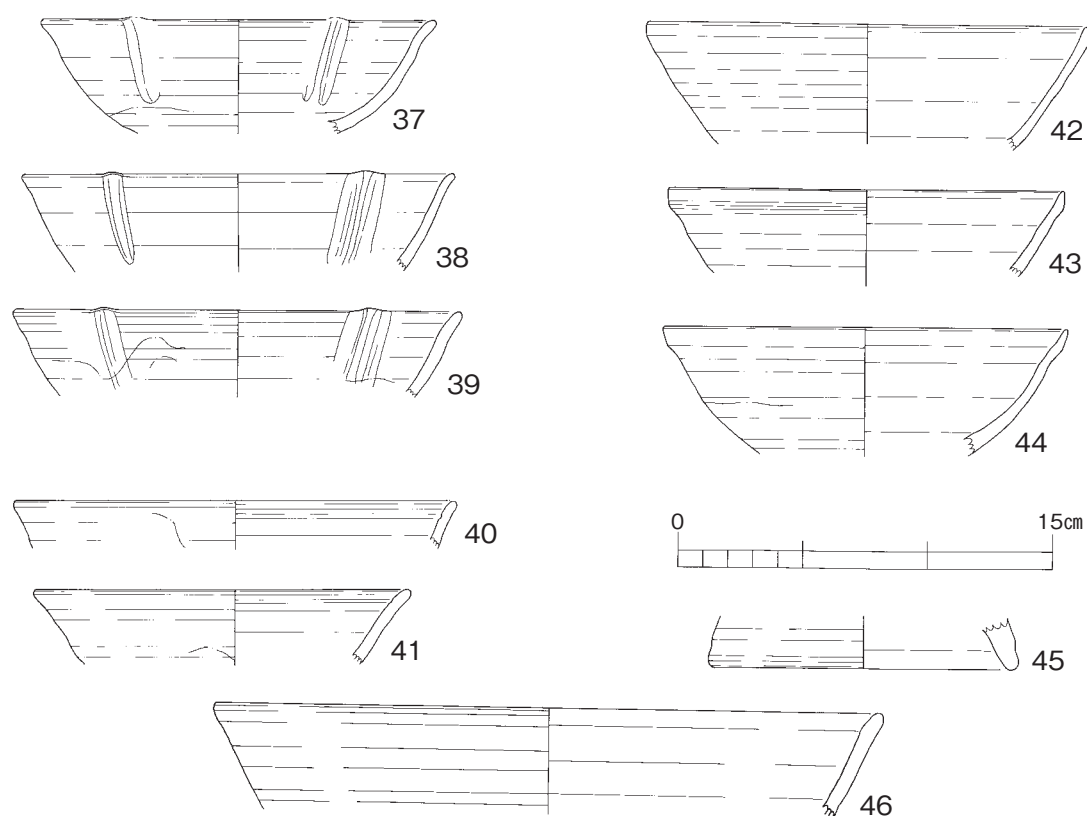


図9 広久手F窯跡第2次調査出土遺物実測図(2)

て直線的に開いている。体部外面はロクロ目が残り、口縁部は回転ナデ調整で施されている。体部内面はコテ調整が行われている。45・46ともに施釉は不明であるが、灰釉が施されていたと思われる。胎土は密で0.1~0.5cm大の黒斑が確認される。器表面や破断面は灰白色を呈している。

6. 小結

(1) 遺構

第1次調査では窯体部の調査を行い、広久手F窯は造り付けの分炎柱を有する窖窯で、全長5.6m、最大幅1.7m、焼成室長3.62m、傾斜角45°の窯体構造が認められた。焚口は明確には不明であったが、燃烧室から焼成室にかけて平面形はほぼ直線的で、焼成室後方から煙道部にかけて徐々に窄まっている。焼成室の床面傾斜は分炎柱下端から後方0.8mまではほぼ水平で、それ以降に急激に立ち上がりを見せる。広久手地区において、遺物から広久手F窯よりも古いとされる広久手30号窯は、2001年に瀬戸市埋蔵文化財センターにより発掘調査が行われ比較的残りが良く精密な図面が提示されており、残存長4.20m、最大幅1.45m、焼成室長3.5m、傾斜角約30°である。広久手30号窯に比べ、広久手F窯は焼成室の長さはほぼ変わらないものの、最大幅は広くなり、床面の傾斜が急になっている。さらに広久手30号窯は焼成室が分炎柱下端から後方1.16mまでは17°、それ以降は35°で煙道部まで緩く立ち上がっているなど、床面傾斜にも変化が認められる。こうした時期差による窯体構造の差は、他の広久手地区や周辺の窯でも確認されるが、比較検討に耐えうる図面とは言い難い。今後さらに同時期に灰釉陶器窯が認められる東濃窯とも窯体構造の検討をし、東海地方における灰釉陶器末期の様相を明らかにする必要がある。

第2次調査では前庭部および工房跡の検出を目指し窯体部前方(南側)に東西10.0m、南北1.0mのAトレンチを、また灰原の範囲確認のため、Aトレンチ南側の斜面上に東西0.5m、南北10.4mのBトレンチを設定し調査を行った。Aトレンチでは焚口前の位置に、造成面が認められ平坦面が確認された。第2次調査による出土遺物の多くがAトレンチから出土している。Bトレンチでは、灰原は確認されず、灰層や遺物は一切認められなかった。地山上方に堆積している層位は薄く、腐植土を除くと1層認められるか否かといった状況である。過去の調査では、灰原の調査も行っており、報告によると灰原は南北約7m、東西約10mの範囲に分布し、ほとんどが地表面に露出していたとされている(水野・小川他1966)。さらに窯体の手前約2mにトレンチを設定し調査を行った結果、灰層を2層検出し遺物も確認され、特に窯体の左側から多く出土し、灰層の拡がりも左側が広く分布していたという。当時の報告と今回の調査状況から推測すると、前回の調査において灰原は広く調査が行われた可能性が高い。しかし、遺物の出土状況や堆積状況から、今回調査を行ったAトレンチは過去の調査において未調査部分であったものと考えられる。さらに今回の調査では谷底付近において遺物が比較的多く表採されており、これらは灰層の末端であったため過去の調査において範囲外であったと思われる。

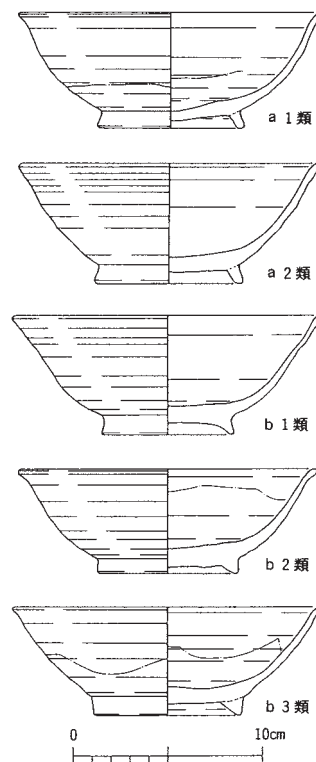


図10 『研究紀要』における碗の分類 (松澤・河合1995より転載)

(2) 遺物

遺物に関しては、既に報告がなされているものと大きく相違はなく、碗類と皿類が主体を占めている。碗・輪花碗・沈線を持つ碗・玉縁碗では施釉しているものが多く確認されたが、小碗は無釉もしくは施釉状況が不明であった。また皿類では施釉が確実に確認されるものが極めて少なく、小碗同様に無釉もしくは施釉状況が不明である。器種によって施釉方法が異なる可能性がある。

また本稿では碗を高台の形状からA類～C類の三つに分類し、さらにB類は口縁部の形態から1類と2類に細分した。瀬戸市埋蔵文化財センターの『研究紀要』において行われた報告では、高台の形状によりa類とb類に分類され、さらに体部や口縁部の形状からa類を1・2類に、b類を1～3類に細分しており(図10:松澤・河合1995)、これに対比させると、A類がb1類、B1類がa2類、B2類がa1類に相当する。今回確認されたC類は高台周辺のみであるが、対応するものが確認されない。細く高い高台であるため、より古い要素をもつものと考えられるが、今後、広久手地区や瀬戸窯の灰釉陶器窯と関係性がみられる来姓窯跡(現豊田市)など全体を通して詳細に検討を行う必要がある。また、東濃窯などの同時期に窯が確認される他の窯業地との比較を進めた上で考察を行い、器種名の統一や器種の組列を明確にしていかなければならない。今後の課題として、本稿では言及せず別稿を用意したい。

おわりに

今回、広久手F窯の窯体を再実測および周辺の調査を行う機会を得ることが出来た。しかし、他にも広久手E窯や広久手C3号窯など過去に調査が行われ、詳細な図面が残されていない窯跡が存在する。こうした窯跡の再調査を今後継続的に続けていき、灰釉陶器の研究を発展させていく必要があるだろう。

引用・参考文献

- 榑崎彰一1961「土器の発達—須恵器と土師器—」『世界考古学大系』第4巻 平凡社
 田中稔1957「尾張・三河の陶質土器—平安後期から鎌倉 室町期—」『古代学研究』第17号 古代学研究会
 宮石宗弘他1966「第2章 広久手F 谷古窯」『瀬戸市の古窯 第1集平安期』瀬戸市教育委員会
 赤塚次郎1969「第二篇第七章 瀬戸市山口、菱野の初期灰釉陶」『瀬戸市史 陶磁史篇一』瀬戸市史編纂委員会
 榑崎彰一他1981『猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告書（Ⅱ）』愛知県教育委員会
 齊藤孝正1981「猿投窯・尾北窯・美濃窯における灰釉陶器の変遷」『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
 榑崎彰一・齊藤孝正1981「猿投窯編年の再検討について」『平安時代の土器・陶器—各地域の諸様相と今後の課題—』愛知県陶磁資料館
 藤澤良祐1982「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館
 榑崎彰一1983「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）（尾北地区・三河地区）付・猿投窯の編年について』愛知県教育委員会
 藤澤良祐1992「第5章広久手窯跡群 第1節広久手20号窯跡 4.まとめ」『上之山—愛知県瀬戸市吉田・吉田奥遺跡群 広久手古窯跡群発掘調査報告書—』瀬戸市教育委員会
 松澤和人1992「第5章広久手窯跡群 第1節広久手20号窯跡 2.遺構」『上之山—愛知県瀬戸市吉田・吉田奥遺跡群 広久手古窯跡群発掘調査報告書—』瀬戸市教育委員会
 松澤和人・河合君近1994「古代灰釉陶器窯調査報告（上）」『研究紀要』第2輯（助瀬戸市埋蔵文化財センター）
 松澤和人・河合君近1995「古代灰釉陶器窯調査報告（下）」『研究紀要』第3輯（助瀬戸市埋蔵文化財センター）
 青木 修2001「第5章 広久手20・30号窯跡の調査」『広久手18・20・30号窯跡—博覧会エントランスエリア整備に係る埋蔵文化財発掘調査—』（助瀬戸市埋蔵文化財センター）
 尾野善裕2008「第三章 古代の灰釉陶器生産と来姓古窯跡群」『来姓古窯跡群』豊田市教育委員会

表1 第1次調査出土遺物台帳

No.	日付	トレンチ	出土層位	基本土層	注記
1	20180208		表採		広久手F No.1
2	20180209	窯体部	窯内埋土	①黒褐色土	広久手F No.2
3	20180210	窯体部	表採		広久手F No.3
4	20180211	窯体部	窯内埋土	①黒褐色土	広久手F No.4
5	20180215		表採		広久手F No.5

表2 第2次調査出土遺物台帳

No.	日付	トレンチ	出土層位	基本土層	注記
1	20180813		表採		広久手F No.1
2	20180813		表採		広久手F No.2
3	20180814		表採		広久手F No.3
4	20180814	A 1 トレンチ	腐植土	①黒褐色土	広久手F No.4
5	20180814	A 1 トレンチ	灰褐色土	⑤にぶい黄橙色土	広久手F A 1 区 No.5
6	20180814	A 1 トレンチ	灰褐色土	⑤にぶい黄橙色土	広久手F A 1 区 No.6
7	20180814	A 1 トレンチ	黄褐色土	④にぶい黄褐色土	広久手F A 1 区 No.7
8	20180814	A 2 トレンチ	灰褐色土	⑨灰黄褐色土	広久手F A 2 区 No.8
9	20180815	B	腐植土	①黒褐色土	広久手F B 区 No.9
10	20180815	A 2 トレンチ	旧表土		広久手F A 2 区 No.10
11	20180815	A 1 トレンチ	旧表土		広久手F A 1 区 No.11
12	20180815	A 1 トレンチ	灰褐色土	⑤にぶい黄橙色土	広久手F A 1 区 No.12
13	20180815	A 1 トレンチ	黄褐色土	④にぶい黄褐色土	広久手F A 1 区 No.13
14	20180817	A 1 トレンチ	旧表土		広久手F A 1 区 No.14
15	20180817	A 2 トレンチ	黄褐色土	⑩黄褐色土	広久手F A 2 区 No.15
16	20180817	A 2 トレンチ	旧表土		広久手F A 2 区 No.16
17	20180817	A 1 トレンチ	黒色土	①黒褐色土	広久手F A 1 区 No.17
18	20180817	A 1 トレンチ	黄褐色土	⑪明灰黄色土か	広久手F A 1 区 No.18
19	20180818	A 1 トレンチ	灰褐色土	⑤にぶい黄橙色土	広久手F A 1 区 No.19
20	20180818	A 1 トレンチ	旧表土		広久手F A 1 区 No.20
21	20180818	A 1 トレンチ	黄褐色土	⑪明灰黄色土か	広久手F A 1 区 No.21
22	20180818	A 2 トレンチ	旧表土		広久手F A 2 区 No.22
23	20180818	A 2 トレンチ	黄褐色土	⑩黄褐色土	広久手F A 2 区 No.23
24	20180818	A 2 トレンチ	焼土混じりの礫層	⑦オリーブ褐色土	広久手F A 2 区 No.24
25	20180819		表採		広久手F No.25
26	20180813		表採		広久手F No.26

表3 出土遺物計測表

図	器種	法量 (cm)				注記番号	口縁 残存率%	高台 残存率%	釉薬	備考
		器高	口径	底径	高台径					
1	椀	—	15.8	—	—	No.2	15	—	不明	
2	椀	—	—	—	7.0	No.2	—	100	不明	
3	椀	—	—	—	7.0	No.2	—	90	灰釉	
4	椀	5.9	15.4	—	6.5	B No.9	20	55	灰釉	
5	椀	6.0	16.5	—	7.0	A1 No.5.11.17	75	90	灰釉	歪みあり
6	椀	5.6	15.8	5.4	7.4	A2 No.15	1	50	灰釉	歪みあり
7	椀	5.35	15.7	6.2	6.6	A2 No.16	15	10	不明	歪みあり
8	椀	6.2	16.8	—	7.6	A1 No.7	20	45	不明	焼成不足
9	椀	5.4	16.0	—	7.1	A1 No.6.11.12	55	95	灰釉	歪みあり
10	椀	6.2	15.6	—	6.5	A1 No.1.6.10.11	40	100	灰釉	歪みあり
11	椀	5.75	15.6	—	6.1	A2 No.8	70	100	灰釉	
12	椀	5.9	15.8	—	7.4	A1 No.6.11	25	70	灰釉	
13	椀	6.2	17.5	—	6.3	A1 No.11	5	50	灰釉	歪みあり
14	椀	5.7	15.7	5.0	6.5	A1 No.11	20	35	灰釉	歪みあり
15	椀	6.05	15.4	—	6.6	A1 No.11.17	10	2	灰釉	
16	椀	6.4	15.8	—	7.6	A1 No.14	15	45	灰釉	高台に歪みあり
17	椀	5.7	16.3	—	6.8	A1 No.5.6.11	15	100	灰釉か	やや焼成過多
18	椀	6.0	15.1	5.3	6.5	No.25	5	55	灰釉	
19	椀	5.7	16.0	5.5	6.4	A1 No.14	30	40	灰釉	歪みあり
20	椀	—	—	—	6.6	A1 No.11	—	65	灰釉	
21	椀	—	—	—	6.2	A2 No.15	—	25	灰釉	
22	椀	—	—	—	7.0	A2 No.10	—	95	灰釉	
23	小椀	—	10.1	—	—	A2 No.10.15	40	—	不明	
24	小椀	—	—	—	5.0	B No.9	—	20	無釉か	刻書あり「寺」か
25	小椀	—	—	—	5.3	A1 No.14	—	100	不明	
26	小椀	—	—	—	5.2	B No.5	—	30	不明	
27	小椀	—	—	—	4.9	B No.9	—	45	不明	
28	稜皿か	—	10.8	—	—	B No.9	30	—	無釉か	体部内面に沈線
29	稜皿	—	10.4	—	—	A1 No.14	10	—	不明	体部内面に沈線
30	稜皿	—	11.4	—	—	A2 No.22	5	—	不明	体部内面に沈線
31	稜皿	2.5	10.4	—	5.0	A2 No.16	30	50	灰釉か	歪みあり
32	折縁皿	—	10.8	—	—	A1 No.14	25	—	不明	
33	耳皿	—	—	—	4.2	A1 No.7	—	50	灰釉	
34	玉縁小皿	—	10.5	—	—	A1 No.12	20	—	不明	
35	玉縁小皿	3.0	12.0	—	6.4	A1 No.5	15	100	灰釉	歪みあり
36	玉縁小皿か	—	—	—	5.2	A2 No.15	25	—	不明	
37	輪花椀	—	15.4	—	—	B No.9	10	—	灰釉	四輪花か
38	輪花椀	—	17.0	—	—	A2 No.15	15	—	不明	四輪花
39	輪花椀	—	17.6	—	—	A1 No.5	10	—	灰釉	四輪花か
40	沈線をもつ椀	—	17.4	—	—	B No.9	—	5	灰釉	口縁内面に沈線
41	沈線をもつ椀	—	13.7	—	—	A1 No.11	—	5	灰釉	口縁内面に沈線
42	玉縁椀	—	17.4	—	—	A1 No.14	10	—	不明	
43	玉縁椀	—	15.6	—	—	A1 No.11	15	—	灰釉	
44	玉縁椀	—	15.8	—	—	A1 No.7	5	—	灰釉	
45	片口鉢 I 類	—	—	—	11.8	A1 No.14	—	5	不明	
46	片口鉢 I 類	—	26.2	—	—	A1 No.11	10	—	不明	

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひろくてFかまあとようたいさいじっそくおよびはんいかくにんちょうさがいようほうこく							
書名	広久手F窯跡窯体再実測および範囲確認調査概要報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知学院大学考古学発掘調査報告							
シリーズ番号	28							
編著者名	森 まどか							
編集機関	愛知学院大学文学部歴史学科							
所在地	〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12 TEL 0561-73-1111							
発行年月日	平成31年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
広久手F窯跡	愛知県瀬戸市 広久手町1 (海上の森内)	23204	3407	35° 11' 13.37"	137° 07' 20.54"	20180208 ～20180217 20180813 ～20180819	第1次調査 約22.5㎡ 第2次調査 約15.2㎡	学術研究
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
広久手F窯跡	生産遺跡	平安時代		窯体・ 前庭部		椀・輪花椀・沈線をもつ椀・ 玉縁椀・小椀・稜皿・ 折縁皿・玉縁小皿・耳皿・鉢		



図版1 広久手F窯窯体部全景（南から）



調査前窯体部全景（南から）



調査前窯体部全景（北から）



窯体部南壁土層断面



調査後窯体部全景（北から）



煙道部

図版2 広久手F窯窯体部



焼成室



A トレンチ完掘 (東から)



燃烧室・分炎柱



B トレンチ完掘 (南から)



A トレンチ北壁土層断面

図版3 広久手F窯窯体部およびA・Bトレンチ



図版4 広久手F窯出土遺物

愛知学院大学考古学発掘調査報告28

古城山窯跡第1次発掘調査概要報告書

広久手F窯跡窯体再実測および範囲確認調査報告

発行日 2019・3・31

発行者 愛知学院大学文学部歴史学科

〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12

Tel (0561) 73-1111 Fax (0561) 73-8179

編集 考古学コース 藤澤良祐・山本智子・森まどか・高野夏姫

印刷 株式会社 あるむ
